志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(16)

県営畑地帯総合土地改良事業曽於東部二期地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鎌石(かまいし)遺跡
田吹野(たぶきの)遺跡

1990年3月

鹿児島県曽於郡志布志町教育委員会

鎌石遺跡Ｃ地点集石

鎌石遺跡Ｅ地点近世墓

田 吹 野 遺 跡

田吹野遺跡遺物出土状況

序　　文

本町は埋蔵文化財埋蔵地が多く、前川・安楽川の流域を中心に約１７０ケ所の周知の遺跡が知られております。

近年、宅地開発や農業基盤整備事業の増加に伴い、これらの遺跡の緊急確認調査も又急増しています。

今回調査しました鎌石・田吹野の各遺跡の確認調査も県営畑地帯総合土地改良事業の実施に先立って行われたものです。

ここにその調査結果を報告書として刊行いたしますが、この資料が歴史解明の一助となり、文化財の保護と学術研究のために広く活用されれば幸いです。

発刊にあたり発掘を担当された調査員はじめ指導者・作業協力者の皆様、又調査に御協力を頂きました土地所有者・並びに関係各位に対し、心よりお礼申し上げます。

平成２年３月

志布志町教育委員会

例　　言

1．　本報告書は、平成元年度に実施した県営畑地帯土地改良事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書である。

2．　確認調査は国及び県の補助を受け、志布志町教育委員会が実施した。

3．　確認調査の実施及び実測及び実測は、米元史郎と東和幸がこれを行った。

4．　発掘調査の現場写真は米元史郎が撮影した。

5．　本書に用いたレベル数値は、すべて海抜絶対高である。

6．　遺物の水洗・注記・拓本等の整理作業は志布志町文化会館で行った。

7．　遺構・遺物の実測・トレース・写真撮影は東和幸が行った。

8．　土器実測図の断面黒塗は還元焼成を表し、断面白抜きは酸化焼成の土器を表す。

9．　傾きが不明の土器については、基準線を引いていない。

10．　本書に記録した遺物番号はすべて続き番号とし、本文及び挿図・図版の番号は一致する。

11．　近世墓の人骨については鹿児島大学歯学部第２解剖教室佐熊正史氏・峰和治氏に取り上げ・分析をしていただいた。

12．　近世墓内出土の古銭については、拓影を九州帝京短期大学桜木晋一氏に分析していただいた。

13．　遺物整理作業において大口市立針持小学校大久保弘二教諭の協力を得た。

14．　本書の執筆・編集は米元史郎と東和幸が行った。

本　文　目　次

序　　文
例　　言
目　　次
第１章　調査の経過……1
　第１節　調査に至るまでの経過……1
　第２節　調査の組織……1
　第３節　調査の経過……2
第２章　遺跡の位置及び環境……4
　第１節　志布志町の位置・環境……4
　第２節　鎌石遺跡……4
　第３節　田吹野遺跡……5
　第４節　牧野地区……6
第３章　鎌石遺跡の調査……8
　第１節　調査の概要……8
　第２節　土　　層……8
　第３節　各トレンチの調査……12
　第４節　Ａ地点の調査……19
　第５節　Ｂ地点の調査……24
　第６節　Ｃ地点の調査……28
　第７節　Ｄ地点の調査……29
　第８節　Ｅ地点の調査……41
第４章　田吹野遺跡の調査……46
　第１節　調査の概要……46
　第２節　土　　層……46
　第３節　各トレンチの調査……47
　第４節　Ａ地点の調査……49
　第５節　Ｂ地点の調査……50
第５章　牧野地区の調査……54
第６章　考　　察……56
第７章　ま　と　め……59
挿図目次
　第１図　鎌石遺跡周辺の遺跡……5
　第２図　田吹野遺跡周辺の遺跡……6
　第３図　鎌石遺跡のトレンチ配置図１（施工前）……10

第４図　鎌石遺跡のトレンチ配置図２(施工後)…… 11
第５図　鎌石遺跡第１トレンチ平面図及び断面図……12
第６図　鎌石遺跡第２トレンチ平面図及び断面図……13
第７図　鎌石遺跡第３トレンチ平面図及び断面図……13
第８図　鎌石遺跡第５トレンチ断面図……14
第９図　鎌石遺跡第６トレンチ平面図及び断面図……14
第10図　鎌石遺跡第８トレンチ断面図……15
第11図　鎌石遺跡第９トレンチ断面図……15
第12図　鎌石遺跡第12トレンチ断面図……15
第13図　鎌石遺跡第13トレンチ断面図……15
第14図　鎌石遺跡第14トレンチ平面図及び断面図……16
第15図　鎌石遺跡第16トレンチ平面図及び断面図……16
第16図　鎌石遺跡第18トレンチ平面図及び断面図……17
第17図　鎌石遺跡第20トレンチ断面図……17
第18図　鎌石遺跡第21トレンチ断面図……17
第19図　出土遺物(１)　鎌石遺跡各トレンチ……18
第20図　鎌石遺跡A 地点の遺物出土状況……19
第21図　鎌石遺跡第19トレンチ平面図及び断面図……21
第22図　出土遺物(２)　A 地点……22
第23図　出土遺物(３)　A 地点……23
第24図　出土遺物(４)　A 地点……24
第25図　鎌石遺跡B 地点(４・17トレンチ)の遺物出土状況……25
第26図　出土遺物(５)　B 地点……26
第27図　出土遺物(６)　B 地点……27
第28図　鎌石遺跡C 地点集石出土状況……28
第29図　鎌石遺跡D 地点の遺物出土状況１……30
第30図　鎌石遺跡D 地点の遺物出土状況２……31
第31図　鎌石遺跡D 地点の遺物出土状況３……32
第32図　鎌石遺跡D 地点の遺物出土状況４……33
第33図　鎌石遺跡D 地点の遺物出土状況５……34
第34図　出土遺物(７)　D 地点…… 35
第35図　出土遺物(８)　D 地点…… 36
第36図　出土遺物(９)　D 地点…… 37
第37図　出土遺物(10)　D 地点…… 38
第38図　出土遺物(11)　D 地点…… 39

第39図　出土遺物(12)　D 地点……40
第40図　鎌石遺跡E 地点近世墓出土状況……41
第41図　鎌石遺跡E 地点 1 号墓出土状況……42
第42図　鎌石遺跡E 地点 2 号墓出土状況……42
第43図　出土遺物(13)　E 地点……43
第44図　出土遺物(14)　E 地点……43
第45図　田吹野遺跡のトレンチ配置図 1 (施工前)……45
第46図　田吹野遺跡のトレンチ配置図 2 (施工後)……45
第47図　田吹野遺跡第 2 トレンチ断面図……47
第48図　田吹野遺跡第 3 トレンチ断面図……47
第49図　田吹野遺跡第 4 トレンチ平面図及び断面図……48
第50図　田吹野遺跡第 5 トレンチ断面図……48
第51図　田吹野遺跡第 6 トレンチ平面図及び断面図……49
第52図　田吹野遺跡第10トレンチ断面図……49
第53図　田吹野遺跡A 地点平面図及び断面図……50
第54図　田吹野遺跡B 地点平面図及び断面図……51
第55図　出土遺物(15)　田吹野遺跡……52
第56図　牧野地区のトレンチ配置図 1 (施工前)……53
第57図　牧野地区のトレンチ配置図 2 (施工後)……53
第58図　牧野地区第 1 トレンチ断面図……54
第59図　牧野地区第 2 トレンチ断面図……54
第60図　牧野地区第 3 トレンチ断面図……54
第61図　牧野地区第 4 トレンチ断面図……55
第62図　牧野地区第 5 トレンチ断面図……55
第63図　鎌石遺跡のタイムスケール……59
第64図　田吹野遺跡のタイムスケール……59

表　目　次

表１　鎌石遺跡周辺の遺跡…… 7
表２　田吹野遺跡周辺の遺跡…… 7
表３　鎌石遺跡各トレンチの状況…… 9
表４　鎌石遺跡Ａ地点石計測表……20
表５　鎌石遺跡Ｃ地点集石計測表……28
表６　田吹野遺跡・牧野地区各トレンチの状況……47

図　版　目　次

図　版　1
図　版　2
図　版　3
図　版　4
図　版　5……61
図　版　6……62
図　版　7……63
図　版　8……64
図　版　9……65
図　版　10……66
図　版　11……67
図　版　12……68

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会(以下県文化課)では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るため、各関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部（農地整備課・大隅耕地事務所）は、志布志町鎌石工区・牧野工区における県営畑地帯総合土地改良事業（曽於東部二期地区）の計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、県文化課に照会した。

これを受けて文化課は、61年5月当該地区の埋蔵文化財分布調査を志布志町教育委員会と実施した。

分布調査の結果、当該事業区域内に鎌石遺跡・田吹野遺跡の存在していることが明らかになり、牧野遺跡の隣接地でもあることが判明したので、事業実施前に遺跡の範囲・性格などを把握するための確認調査を実施することとなった。

発掘(確認)調査は、国・県からの補助事業として、志布志町教育委員会が調査主体者となり、県文化課の協力を得て平成元年10月30日から11月30日までの31日間実施した。

第2節　調査の組織

調査主体者	志布志町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	野間　隆
調査事務	〃	社会教育課長	西坂弘行（～H1、12）
	〃	〃	慶田泰輔（H2.1～）
	〃	文化体育係長	前田泰郎
	〃	主事	谷口隆博
	〃	主事	米元史郎
	〃	主事	荒平安次
	〃	主事	杉田美穂
調査担当者	鹿児島県教育庁文化課	主事	東　和幸
	志布志町教育委員会	主事	米元史郎

なお、調査企画等において、県教育文化課長・吉井浩一、同課長補佐・奥園義則、同主幹・立園多賀生、同文化財研究員兼埋蔵文化財係長・吉元正幸、同企画助成係長・京田秀允、同係の各氏の指導・助言を得た。

発掘調査中は志布志町文化財保護審議会員瀬戸口望氏の協力を得た。

また、近世墓の発掘調査において、出土人骨については鹿児島大学歯学部第2解剖学教室佐熊正史氏・峰和治両氏に、出土古銭については九州帝京短期大学桜木氏にそれぞれ鑑定・助言を得た。

第３節　調査の経過

発掘調査は、平成元年10月30日から11月30日まで実施したが、事業工区が鎌石工区と牧野工区に分かれ、さらに牧野工区は田吹野台地と牧野台地に分かれていたため、３地区を鎌石・田吹野・牧野と順次或いは並行して行った。その間の調査の経過と概要については、日誌抄をもってかえる。

10月30日(月)　鎌石　用具運搬、点検、確認、作業員への調査方法、調査上の留意点の説明。鎌石１，２，３，４，５トレンチ設定、掘り下げ開始。

10月31日(火)　鎌石　６，７トレンチ設定、掘り下げ開始。

11月１日(木)　鎌石　１，４，５，６，７掘り下げ。

11月２日(木)　鎌石　８，９トレンチ設定、掘り下げ開始。

11月６日(月)　鎌石　10，11，12トレンチ設定、掘り下げ開始。４トレンチ遺物出土状況写真撮影。

11月７日(火)　鎌石　２，３，９トレンチ遺物出土状況写真撮影。２，３，５，８，９トレンチ土層断面写真撮影。７トレンチ位置図作成。

11月８日(水)　鎌石　13，14，15，16，17トレンチ設定、掘り下げ開始。１，３，４，５，６，８，９，11，12，13，14，15トレンチ位置図作成。２，３，４トレンチ遺物出土状況実測。２，３トレンチ土層断面実測。４，６，10，11トレンチ遺物出土状況写真撮影。

11月９日(木)　鎌石　１トレンチ土層断面実測。11トレンチ遺構実測、撮影、遺物出土状況実測。11トレンチ土層断面実測。12，13トレンチ土層断面写真撮影。18，19トレンチ設定、掘り下げ開始。

11月10日(金)　鎌石　20，21トレンチ設定、掘り下げ開始。７，10，16，17，18，19，20，21トレンチ位置図作成。４トレンチ土層断面実測。

田吹野へ一部用具・テント運搬、移設

11月13日(月)　朝雨のため発掘作業中止。

鎌石　６，10トレンチ遺物出土状況実測、土層断面実測。15トレンチ遺構実測、撮影、遺物出土状況実測、写真撮影、土層断面実測。

11月14日(火)　鎌石　５トレンチ土層断面実測。

田吹野１，２，３，４，５，７，10トレンチ設定。１，２，３，４，７トレンチ掘り下げ開始。１，２，３，４，５，７トレンチ位置図作成。

11月15日(水)　鎌石　９トレンチ遺物出土状況実測、土層断面実測。12トレンチ土層断面実測。

田吹野５トレンチ掘り下げ開始。10トレンチ位置図作成。

11月16日(木)　鎌石　18トレンチ遺物出土状況実測、土層断面実測。
田吹野10トレンチ掘り下げ開始。

11月17日(金)　鎌石　1，14，16，17，19トレンチ遺物出土状況実測。8，13，14，16，17，19トレンチ土層断面実測。
田吹野1，2，3，4，5トレンチ掘り下げ終了。8トレンチ設定、掘り下げ開始、位置図作成。
牧野　1，2，3，4，5トレンチ設定。

11月20日(月)　鎌石　7，14，16，17，18，19トレンチ遺物出土状況写真撮影。7，14，16，17，18，19，20，21トレンチ土層断面写真撮影。
牧野　1，2，3，4，5トレンチ掘り下げ開始。1，2，4トレンチ掘り下げ終了。

11月21日(火)　田吹野9トレンチ設定、掘り下げ開始。1，2トレンチ土層断面写真撮影。
牧野　3，5トレンチ掘り下げ、終了。

11月22日(水)　田吹野8，9トレンチ掘り下げ、終了。
3地区の発掘作業を終了、用具水洗、点検、確認後収納。

11月24日(金)　田吹野1，2，3，4，5，6，7，8，9，10トレンチ標高設定。
牧野　1，2，3，4，5トレンチ標高設定。

11月27日(月)　田吹野1，2，3トレンチ土層断面実測。

11月28日(火)　田吹野3，4，9トレンチ遺物出土状況写真撮影。3，4，8，9，10トレンチ土層断面写真撮影。3，4トレンチ遺物出土状況実測。4，8，9，10トレンチ土層断面実測。

11月29日(水)　田吹野1，6，7，8トレンチ遺物出土状況写真撮影。5，6，7トレンチ土層断面写真撮影。1，6，7，8トレンチ遺物出土状況実測。5，6，7トレンチ土層断面実測。

11月30日(木)　牧野　1，2，3，4，5トレンチ位置図作成、土層断面写真撮影、実測。
3地区の実測、写真撮影等全作業を完了。撤収。

第２章　遺跡の位置・環境

第１節　志布志町の位置・環境

本町は鹿児島県の東端部で、志布志湾の湾奥部に位置し、海岸線は東西に約10km、内陸部に向かって約24kmで、南北に細長く延びる釣鐘形の形状をなしている。

北東から東側へは、宮崎県都城市及び串間市と接して県境をなし、北西から西へは、末吉町、松山町、有明町とそれぞれ接している。

南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を挟んで、西側は砂浜海岸が続くのに比べ、東側は日南層群で構成される山稜が海までせまり、岩礁海岸を形成している。尚、市街地は、比高40m程のシラス台地の海食崖下に発達した古期砂丘帯上に立地している。これは約6000年前の縄文海進の名残りと考えられる。

内陸部の地形は、山地と台地、それに河川に沿って小規模に発達した沖積低地に大別出来る。

北部から東部にかけての山稜地帯は、主に新生代古第三期の地層と考えられている日南層群よりなる、南那珂山系の西端域となり、これより西に拡がる広大なシラス台地（曽於丘陵地）にはこの山系より派生する残丘状山地が、北東より南西方向に、散発的に、次第に小起伏となって延びている。この日南層群は、砂岩と頁岩及びその両者の互層の三群で構成され、これら以外に石器用石材として加工しやすい火成岩等の原産地は近隣には得られない。

シラス台地は並行して南流する中小の河川の活発な侵食作用によって、深い谷で分断され、さらにその支流によって、樹枝状に拡がる谷頭侵食で細かく刻み込まれており、大小幾多の台地が形成されている。また、谷底の低地とは急傾斜面や崖によって区切られている。

町内を流れる河川は、西側を延長24kmの安楽川が、東側を延長15kmの前川がそれぞれ南流しており、他に北東山間部の四浦地区には、大矢取川が宮崎県串間市を経て志布志湾へ注ぎ込んでいる。

またこれらの河川の中流域から下流域にかけては各所に大小の河岸段丘や谷底平野が形成されている。

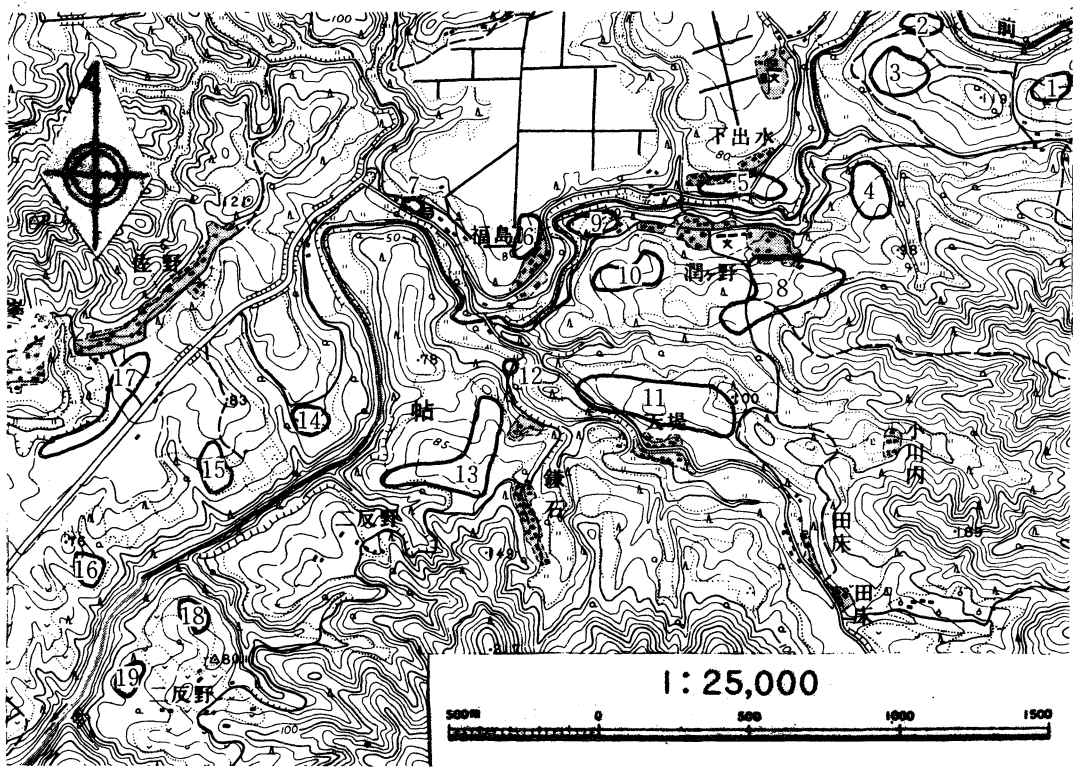
このような地形のため、町内に分布する約170箇所の埋蔵文化財遺跡の多くは台地上に立地しているが、内陸山間部では、山稜に付随するそれぞれ独立した小規模な山麓舌状台地基部（谷あいの湧水を利用するタイプ）、あるいはその辺縁部（台地下の河川を利用するタイプ）に立地しており、南部の広域な台地では、水源に遠い台地中央部に遺跡の立地は見られず、これらの辺縁部、もしくは台地に付随する河岸段丘上に集中している。

第２節　鎌石遺跡

鎌石遺跡は前川中流域の山稜に付随した小規模台地上に立地している。南側の山塊から大きく北にせりだしたこの鎌石台地は、比高約40mの台地下を、東側は前川支流が北流し、北側は北東から南西方向に流れる前川がこの台地によって北西に大きく弧を描き蛇行し、又西側は深く切れ込んだ谷によって、隣接する台地と隔絶している。

この前川流域は、“縄文銀座”と言われるほど遺跡の密集地帯で、鎌石遺跡周辺にも第１図に示す通り多くの遺跡が散在している。特に、昭和56年発掘調査された鎌石橋遺跡は、台地東側の前川支流に沿って細く延びる谷底平野に小規模に発達した河岸段丘上に立地しており、その調査結果は鹿児島考古第16号に発表されているが、縄文時代晩期及び前期の遺構・遺物と共に、縄文時代草創期に比定される隆帯文土器や集石炉遺構が出土し重要な遺跡となっている。又、昭和初年に発掘調査が行われた出口Ａ遺跡も、本町では発掘例の少ない低地河岸段丘(水田)上の遺跡であるが、特殊な異形石器（双角尖頭器）が出土している。

第１図　鎌石遺跡周辺の遺跡



第３節　田吹野遺跡

田吹野遺跡は本町北部の山間地帯にあり、安楽川の一支流の源流域となる山稜に付随する小規模な山麓舌状台地上に立地している。この台地は東側に前記の支流が南流し、西側にさらにその末端支流がＶ字状に深い谷を刻み、平坦面を有しない標高約 220 m の高地である。河川までの比高差約 80m の高台であるが、水源は台地脇の谷あいの湧水を利用できる。

周辺遺跡は、西の谷向かいの牧野台地のさらに西側に、南北に流れる安楽川沿いに集中している。田吹野遺跡と同様な立地条件にあるこれらの遺跡のほとんどは、付近に湧水を持つ山麓台地の基部に立地し、押型文土器を中心とした早・前期の遺跡が多い。

その中で牧野遺跡並びに内門遺跡は、安楽川上流部のこの区域では例外的に広い平坦面を持た河岸段丘付近に立地している。牧野遺跡は山稜からこの河岸段丘へと続く、緩やかに傾斜する台地上に立地し、内門遺跡はこの台地と段丘の基部に立地しており、ここは、現在、水田基盤事業により県道もろとも台地上に移転した集落があったところで、その移転の際に蔵骨器が出土したことが本町町誌上巻に記載されている。これはこの地域が太古だけでなく、中世においても文化的集積があったと推定できることである。

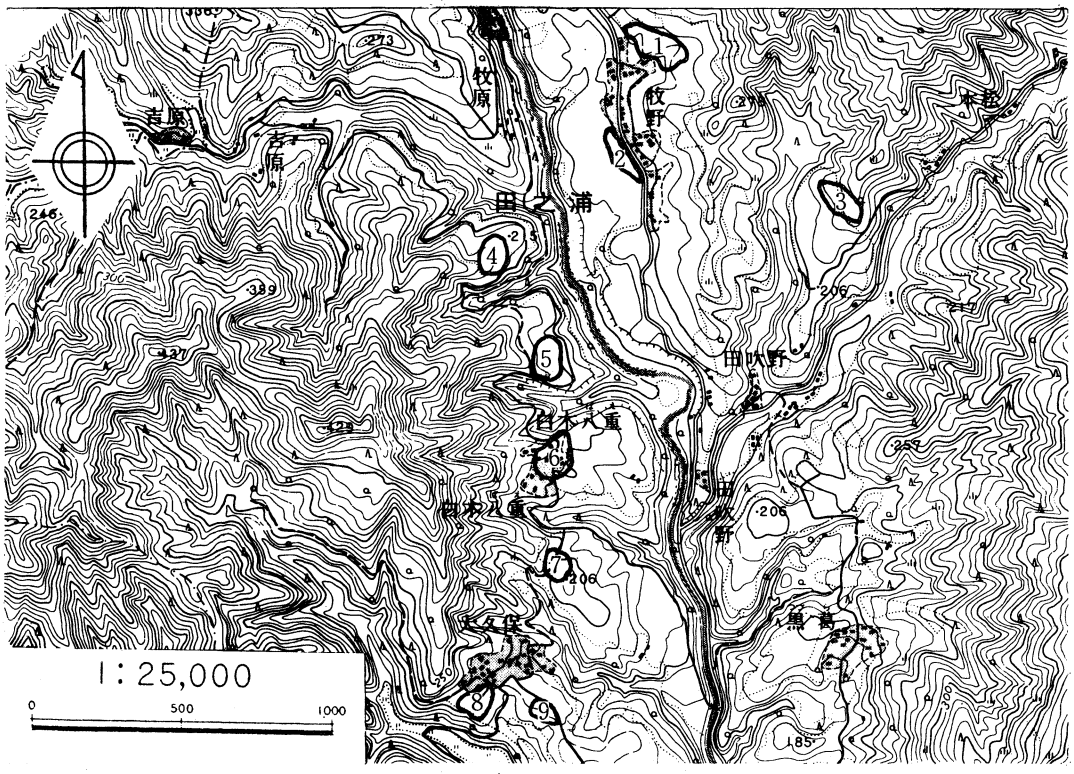
第4節　牧野地区

今回の確認調査の原因事業である“総合土地改良事業牧野工区”の牧野台地に当たる箇所で、当初の分布調査区域に含まれていなかった経緯もあり、又牧野遺跡の立地する台地に接続する台地でもあったため、トレンチ5箇所による確認調査を行なった。

この地区は、西に北から南へ流れる安楽川に沿って急崖で接する、標高約190～220mの山麓台地で、西側は安楽川に向けて緩やかに傾斜しているが、尾根部より東側はより急斜面で田吹野台地と隔てる谷に落ち込んでいる。

又田吹野台地に比べ、すでに個人による畑地造成がすすんでおり調査トレンチは可能な限り旧地形に近いと思われる箇所に設字した。

第2図　田吹野遺跡周辺の遺跡



第1表　鎌石遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
1	風穴	内之倉風穴	台地	縄文(早)	石坂式系、塞ノ神式、石皿
2	土光A	〃 土光	台地	〃 (早前)	塞ノ神式、轟式、春日式
3	土光B	〃 土光	台地	〃(前)古墳	轟式、成川式
4	土原	〃 上原	台地	〃 (早)	吉田式、炉跡
5	中須	〃 中須	台地	〃	
6	立花迫	〃 立花迫	傾斜面	〃 (早中)	石坂式、南福寺式、石斧
7	東原	帖 東原	台地	〃 (早前)	塞ノ神式、曽畑式、石鏃
8	潤ケ野	〃 潤ケ野	台地	〃(早前後晩)	前平式、轟式、岩崎上層式
9	出口A	〃 出口	沖積地	〃 弥生	双角尖頭器
10	出口B	〃 出口	台地	〃 (早晩)	前平式、塞ノ神式、三万田式
11	家ケ野	〃 松崎	台地	〃(後)弥生	指宿式、市来式、草野式
12	鎌石橋	〃 前畑	沖積地	旧石器・縄文	細石核、細石刃、隆帯文土器
13	鎌石	〃 鎌石	台地	縄文	吉田式、筵目圧痕文、石斧
14	牧	〃 牧	台地	〃 ・弥生	
15	下平	〃 下平	台地	〃	
16	下迫	〃 下迫	台地	〃	
17	上佐野原	〃上佐野原	台地	弥生	
18	大二反野A	〃大二反野	台地	縄文・弥生	
19	大二反野B	〃大二反野	台地	〃 〃	

第2表　田吹野遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
1	牧野	田之浦牧野	台地	縄文	
2	内門	〃 内門	段丘	〃・他	蔵骨器
3	田吹野	〃 田吹野	台地	〃 (早前)	
4	倉野	〃 倉野	台地	〃 (早前)	押型文、吉田式、前平式
5	板山	〃 板山	台地	〃 (早)	押型文
6	白木原	〃 白木原	台地	〃 (早)	平栫式、石鏃
7	白木八重	〃白木八重	台地	〃 (早)	楕円押型文、黒耀石
8	大長野A	〃 大長野	台地	〃 (早)	押型文
9	大長野B	〃 大長野	台地	〃	石斧

第 3 章　鎌石遺跡の調査

第1節　調査の概要

確認調査は2m×3mを基本としたトレンチを、各々の畑に設定し、遺構・遺物の検出及び土層の観察を行った。遺物が検出されたトレンチ周辺、または地形からみて遺跡が存在する可能性のある地点については、さらにトレンチの数を増やし、遺跡の範囲について確認を行った。トレンチの配置は、第3図及び第4図に示し、各トレンチの状況については表3に示した。

工事対象地域12haのうち、遺構・遺物が確認された場所は5地点であった。それぞれ確認された順にA地点～F地点とした。各地点は同一小字名であることからA地点～F地点をまとめて鎌石遺跡と呼ぶことにした。

トレンチによる「点」の調査からトレンチ間を結ぶ「線」の調査を行い、遺物が存在する範囲を確認した後、遺跡の取り扱いについて大隅耕地事務所・町耕地課・県文化課・町教育委員会で協議を行った。その結果、①A地点については、土盛りによる遺跡の現状保存、または発掘調査による記録保存が難しいため工事対象地区除外にする。②C地点・E地点については、設計変更によって現状のまま遺跡を保護するのは困難であるため、完全調査を実施し記録保存を図る。③B地点・D地点・F地点については土盛りによる遺跡を保護することとした。

A地点では、縄文時代早期の遺物を確認し、C地点では縄文時代早期の集石を検出した。D地点およびF地点は縄文時代晩期の遺物が主体を占めた。また、B地点からは平安時代の遺物が、E地点からは江戸時代の墓2基が検出された。遺物点数は、A地点100点、B地点78点、C地点60点、D地点262点、E地点14点、F地点12点であった。

第2節　土　層

広い範囲に及ぶ調査であり、部分的に異なる場所もみられたが、基本的には図で示した通りである。3・5・7トレンチを基準とした。これは、これまで飛渡地区で行われた調査地点と類似している。

Ⅰ　層：耕作土。

Ⅱ　層：黒褐色軟質土。粒子は揃っている。B地点では最下部に平安時代の遺物を包含する。

Ⅲa層：暗黄褐色軟質土。時間が経過すると次第に黒く変色する。縄文時代晩期の遺物を包含する。最下部は粒子が大きく、これまでの周辺遺跡の例では、御池ボラ層に比定されている。

Ⅲb層：黄褐色土。Ⅲcの腐食土である。黄白色の軽石をわずかに含む。この軽石は池田軽石と考えられる。

Ⅲc層：橙褐色軽石。およそ6千3百年前のアカホヤ層に比定される。

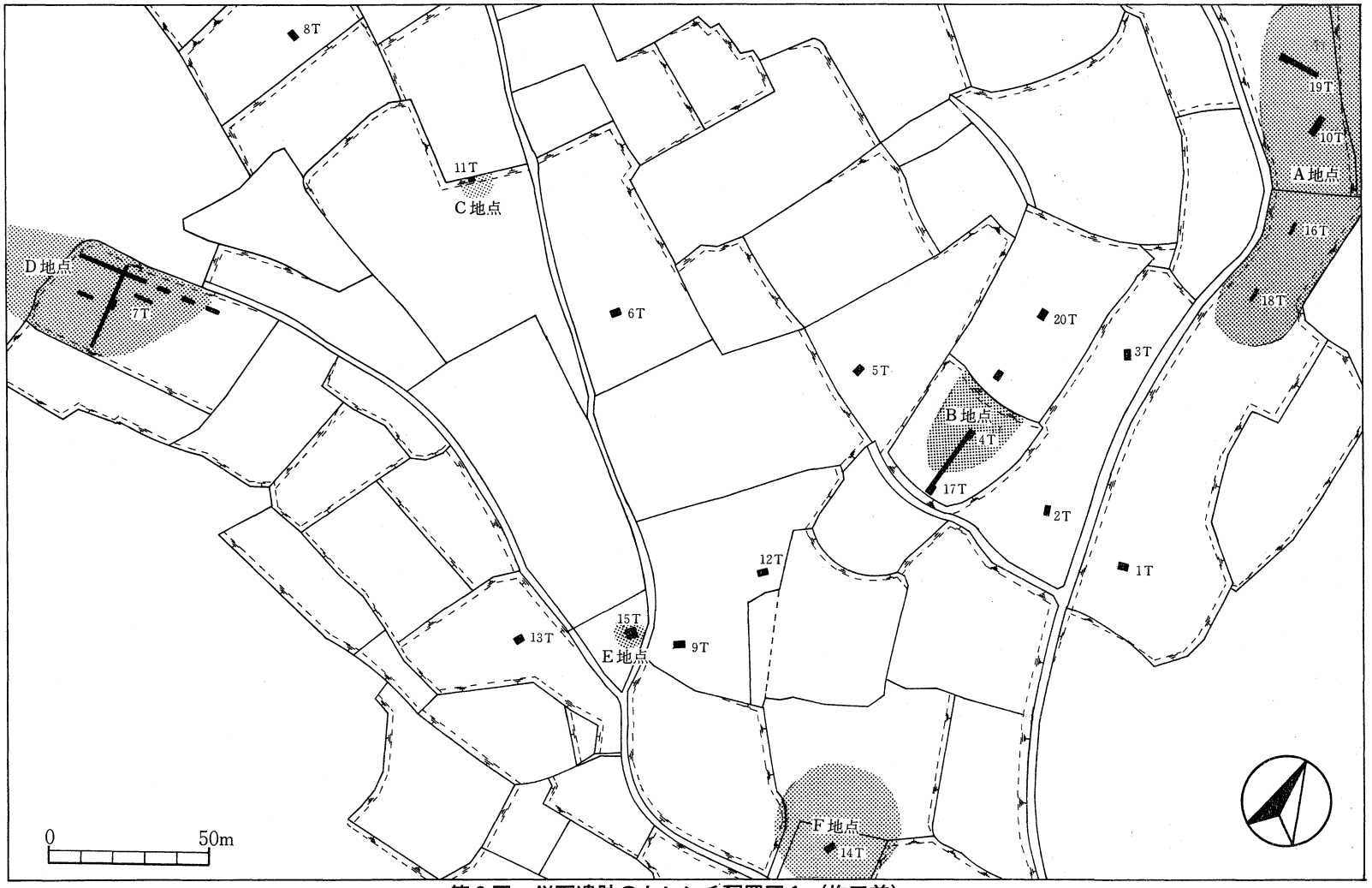
Ⅳa層：茶褐色土。やや灰色に近い部分が斑状に含まれる。縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅳb層：Ⅳa層からⅥ層への漸移層である。

Ⅴ　層：白黄褐色粘質土。およそ1万1千年前の薩摩層に比定される。

第３表　鎌石遺跡各トレンチの状況（調査面積計219㎡）

番号	調査面積	遺物包含層	遺構の有無	表土直下の土層	遺物包含層までの深さ	出土遺物その他
1	6㎡	Ⅴ　層	無	Ⅲａ層	－120cm	縄文晩期土器
2	6㎡	ⅢｂⅣ層	無	Ⅲｂ層	－　60cm	縄文早期土器
3	6㎡	Ⅲｂ層	無	Ⅲｂ層	－　40cm	縄文早期土器
4	6㎡	Ⅱ　層	無	Ⅰｂ層	－　90cm	土師器、須恵器
5	6㎡	無	無	Ⅲａ層	―――	
6	6㎡	Ⅳ　層	無	Ⅲａ層	－110cm	縄文早期土器
7	68㎡	Ⅲａ層	有	Ⅲａ層	－　20cm	縄文晩期土器石器
8	6㎡	無	無	Ⅲ　層	―――	
9	6㎡	無	無	Ⅲ　層	―――	
10	12㎡	Ⅳ　層	無	Ⅲ　層	－　20cm	縄文早期土器石器
11	4㎡	Ⅳａ層	有	Ⅱ　層	－　80cm	縄文早期集石遺構
12	6㎡	無	無	Ⅱ　層	―――	
13	6㎡	無	無	Ⅱ　層	―――	
14	6㎡	Ⅲａ層	無	Ⅲａ層	－　60cm	縄文晩期土器石器
15	9㎡	Ⅰ　層	有	Ⅰ　層	－　60cm	近世墓
16	4㎡	Ⅳ　層	無	Ⅲａ層	－　80cm	縄文早期土器石器
17	24㎡	Ⅱ　層	無	Ⅰｂ層	－100cm	土師器、須恵器
18	4㎡	Ⅳ　層	無	Ⅲｂ層	－　40cm	縄文早期石器
19	16㎡	Ⅳ　層	無	Ⅳ　層	－　20cm	縄文早期土器石器
20	6㎡	無	無	Ⅱ　層	―――	
21	6㎡	無	無	Ⅱ　層	―――	



第３図　鎌石遺跡のトレンチ配置図１（施工前）

第４図　鎌石遺跡のトレンチ配置図２（施工後）

Ⅵ　層：黒褐色土。しまりがあって、硬い。層の上部にⅤ層の薩摩層を挟む。Ⅴ層の上下は区別できないが、Ⅴ層の直下辺りが最も濃い色をしている。

Ⅶ　層：白黄色をしたシルト質の層で、やや粘質を帯びる。緻密にしまっているが、軟らかい。

Ⅷ　層：黄白色シラス。粒子はⅦ層よりも細かい。黄色味が強く、ブロック状になった部分も見られる。およそ２万２千年前の入戸火砕流に比定される。

第３節　各トレンチの調査

工事対象地域に、合計21本のトレンチを設定して遺物の有無を確認した。遺物が出土した地点は次節以降に詳述することにして、本節では遺物が集中して出土した以外のトレンチについて述べてゆきたい。

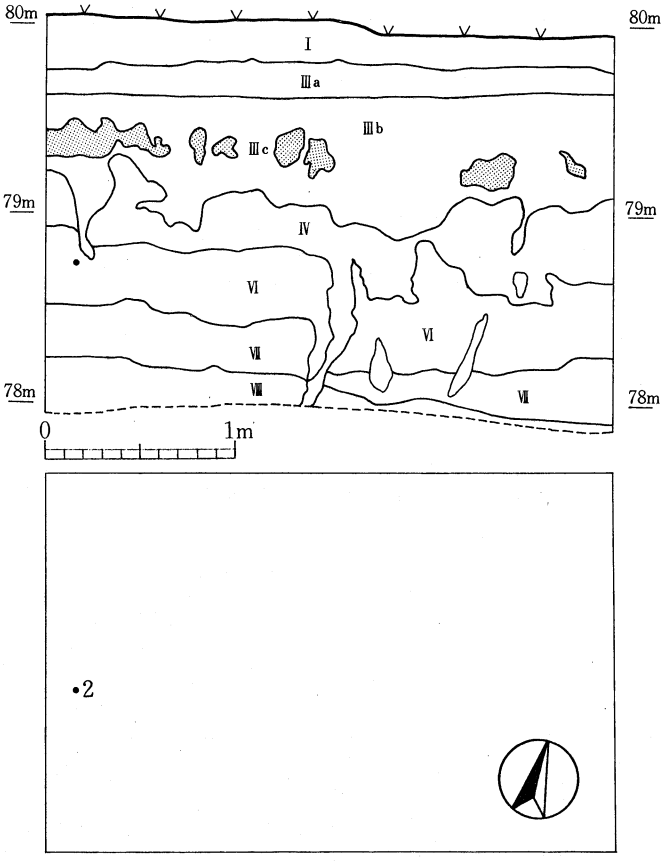
１は第５トレンチ近くで表面採集した打製石斧である。刃部は欠損しており、ほぼ短冊形をしている。両面から丁寧な打撃が加えられている。

第１トレンチ

１トレンチは事業区域の東端に当たり、北へ延びる台地の尾根筋を走る道路のすぐ東側で、標高約80mの地点に２×３ｍの大きさで設定した。

層位はⅡ層が削平されⅤ層（サツマ層）が確認されなかったことを除いてⅠ～Ⅷ層まで認められた。Ⅲ層はａ，ｂ，ｃの３層に分けられた。またⅢｂ層から最下層のⅧ層にかけては樹根により層位に著しい乱れがみられた。この地区は、台地基部よりの、きのこ栽培地や茶園とともに鎌石遺跡の主体部とみられていたが濃密な遺物の包含はなかった。

２は第Ⅳ層から出土した土器である。口縁部を肥厚させ、内外面とも丁寧にナデてある。縄文時代晩期の深鉢形土器と考える。



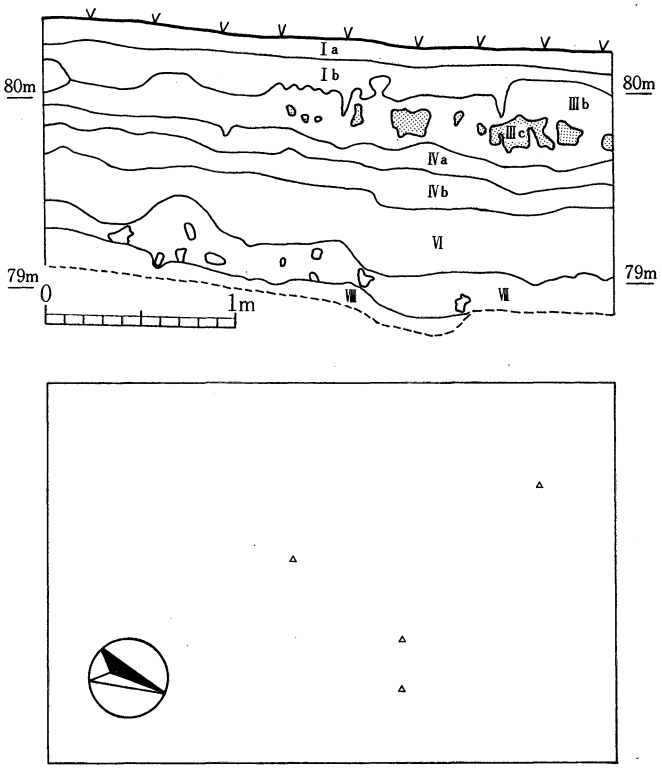
第５図　鎌石遺石第１トレンチ平面図及び断面図

第2トレンチ

2トレンチは1トレンチと道路を隔てた西側の畑で、北北西に向かって緩やかな勾配を持つ標高約80.3mの地点に2×3mで設定した。

層位は1トレンチと同様尾根筋にあたるためかⅡ層とⅢa層が削平されていたが他はⅠ層からⅧ層まで確認された。しかしここでもⅤ層は認められなかった。またⅦ層中に転在するブロックはⅧ層と同質のものと考えられる。

遺物はⅢc層（アカホヤ層）の下部に黒耀石の剝片2点が出土したほか、Ⅳa層に3点とⅥ層に1点の石片が確認されたのみであった。



第6図　鎌石遺跡第2トレンチ平面図及び断面図

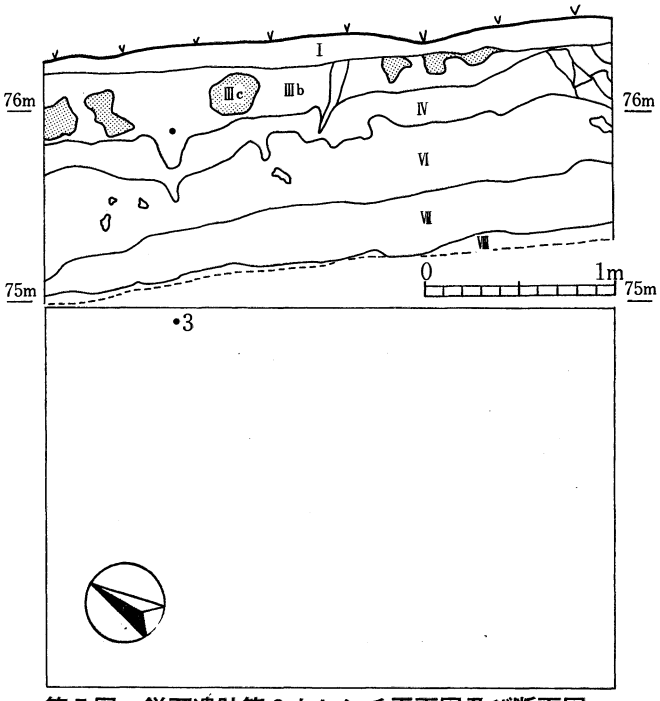
第3トレンチ

3トンンチは2トレンチの北方約50mの地点に2×3mで設定した。2トレンチと同一の畑であるが尾根筋よりはずれているため西へ若干の傾斜をもっている。

層位は尾根側がⅡ層とⅢ層が削平されているが、ここではⅥ層中よりⅤ層（サツマ層）のブロックが僅かながら確認された。

遺物は1点だけ出土している。

3はⅢb層から出土した。外面は斜めの貝殻条痕を施した後、貝殻の腹縁を垂直に刺突している。内面は縦方向のケズリである。器壁が薄く、焼成は良好である。

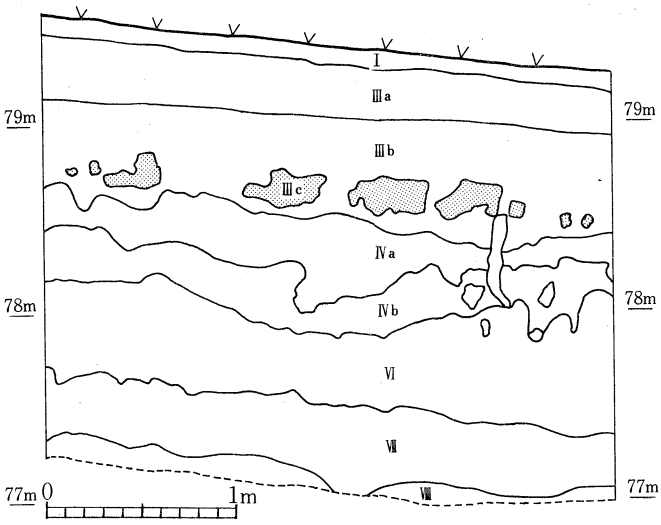


第7図　鎌石遺跡第3トレンチ平面図及び断面図

第5トレンチ

5トレンチは2トレンチと浅い谷を隔てた西側の畑に2×3mの大きさで設定した。また標高は約79.4mで、畑は北東方向へ傾斜している。

層位はⅠ層耕作土が10cm程度しかなくⅡ層も削平されていたが、Ⅲa層からⅧ層まではそれぞれ厚く堆積していたが、Ⅴ層についてはこのトレンチでも確認されなかった。



第8図　鎌石遺石第5トレンチ断面図

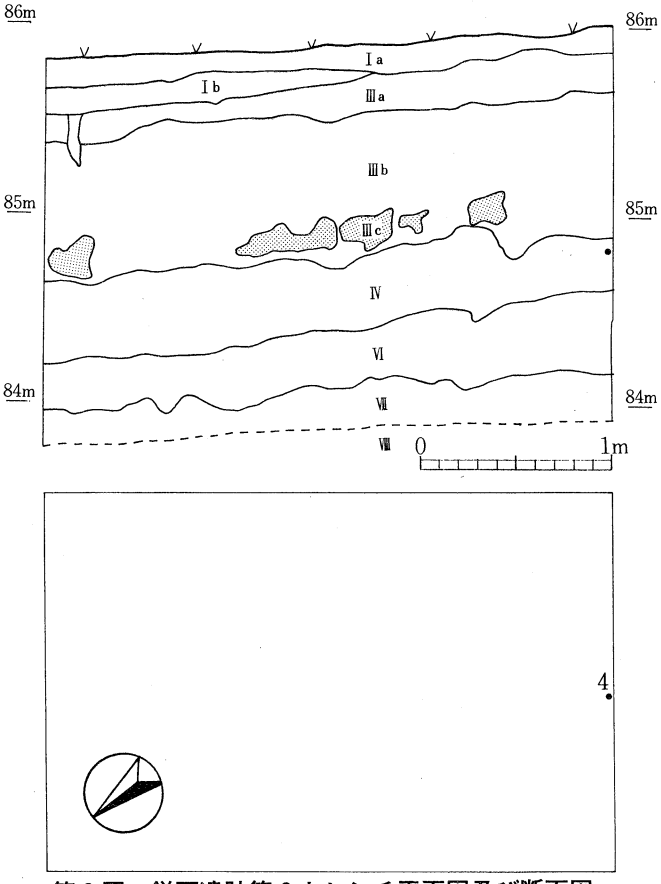
第6トレンチ

6トレンチは鎌石台地の中央部にあたり5トレンチの西約80mの箇所に2×3mの大きさで設定した。標高は約86mで、このトレンチの背後にある樹園地が、山稜の基部から北と西に延びた尾根筋を主体とするこの台地全体の最高点で標高は約88.8mを数える。

層位はⅠ層からⅧ層まで確認された。さらにⅠ層はa，b二層に分けられⅢ層はa，b，cの三層に分けられた。ここでもⅡ層は削平されており、台地中央部で各層安定的な推積をみせているにもかかわらずⅤ層は確認されなかった。

また出土遺物はⅣ層壁面より土器1点が出土したのみであった。

4はⅣ層から出土した。縦位に網目状撚糸文を施し、一部分に横位の沈線を巡らすものである。

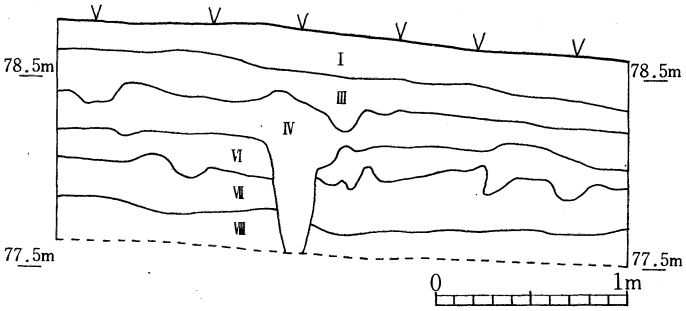


第9図　鎌石遺跡第6トレンチ平面図及び断面図

第８トレンチ

８トレンチは、６トレンチの西約100ｍの標高約78.7ｍの箇所に２×３ｍで設定した。

層位はⅡ、Ⅴ層を除いてⅧ層まで確認されたが、各層の堆積が比較的薄く１ｍで赤橙灰色のシラス層に達した。遺物の出土はない。



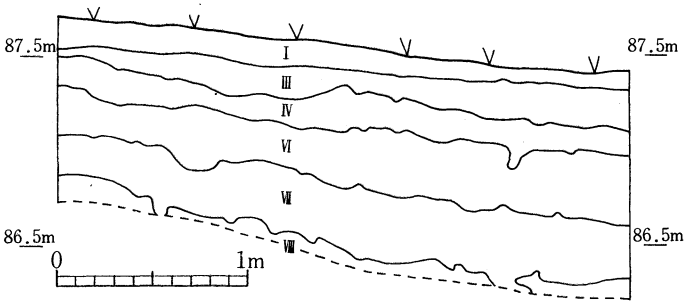
第10図　鎌石遺跡第８トレンチ断面図

第９トレンチ

９トレンチは、５トレンチの南約110ｍの標高約87.6ｍの箇所に２×３ｍで設定した。

層位はⅡ、Ⅴ層を除いてⅧ層まで確認された。

遺物はⅠ層直下で人頭大の平たい石が出土したのみであった。



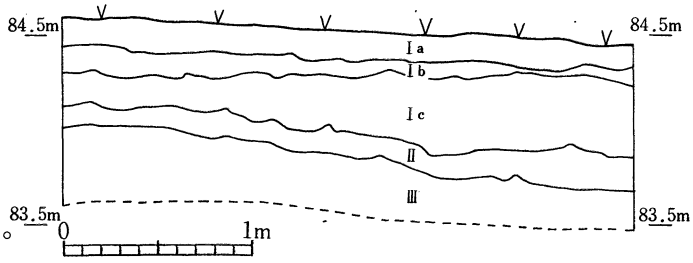
第11図　鎌石遺跡第９トレンチ断面図

第12トレンチ

12トレンチは５トレンチの南約70ｍの標高約84.5ｍの箇所に２×３ｍで設定した。

層位は４トレンチの谷頭にあたりⅠ～Ⅲ層までを確認したがⅠ層はａ，ｂ，ｃの三層に分けられた。

遺物の出土は見られなかった。



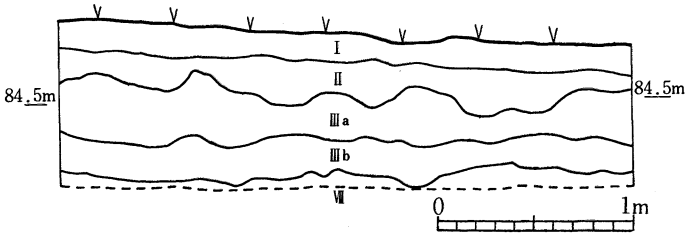
第12図　鎌石遺跡第12トレンチ断面図

第13トレンチ

13トレンチは９トレンチの西南西約50ｍの標高約85ｍの箇所に２×３ｍで設定した。

層位はⅠ～Ⅲ層の下層はⅦ層でⅣ～Ⅵ層は確認できなかった。Ⅲ層はａ、ｂ二層に分けられる。

遺物の出土は見られなかった。



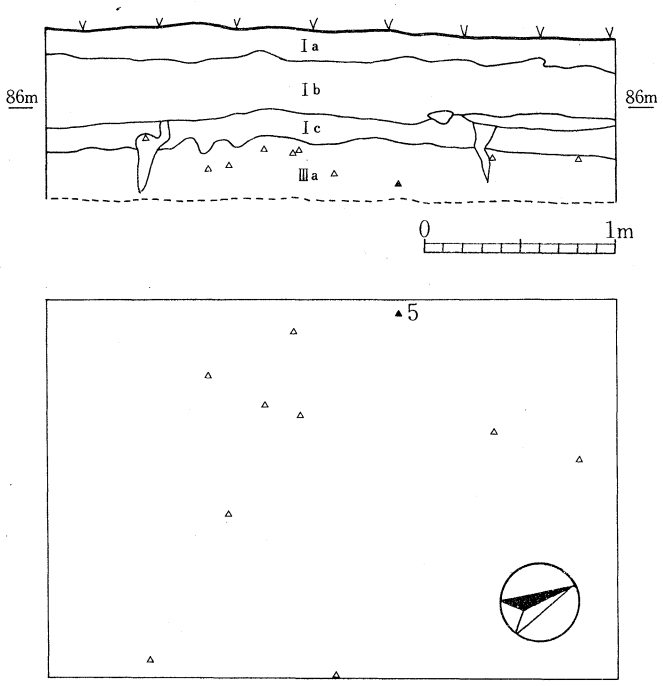
第13図　鎌石遺跡第13トレンチ断面図

第14トレンチ

14トレンチは9トレンチの東南東約80mの箇所に2×3mで設定した。ここは調査区域の南端部で鎌石台地の山麓基部に当たる。標高は約86.4mである。

層位はⅠ層a，b，c各層の下にⅢa層が確認されこの層より遺物が出土している。

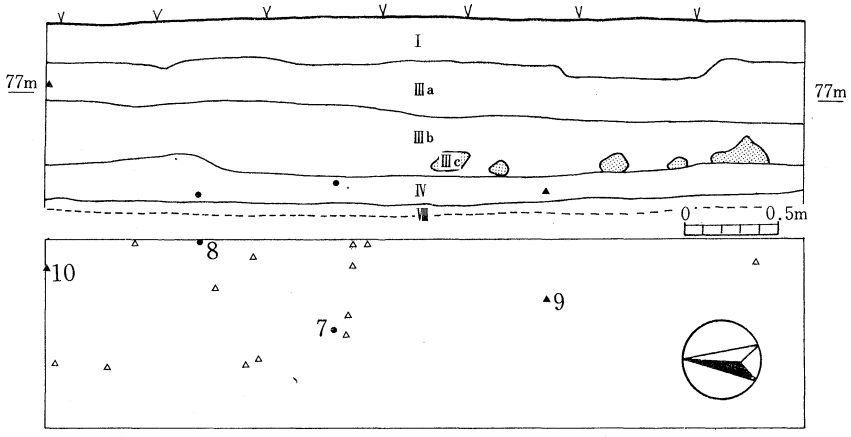
5はⅢa層から出土した。両面とも丁寧に研かれた小型の磨製石斧である。中央両側にわずかな抉りが認められる。長さ10cm、幅4cm、厚さ2cm、重さ100.5gを測る。



第14図　鎌石遺跡第14トレンチ平面図及び断面図

第16トレンチ

16トレンチは1トレンチの北方へ約120m程の標高約77.4mの地点に2×3mで設定した。この地区は南隣りの18トレンチと共に10トレンチを中心とするA地区に包含されると思われる。



第15図　鎌石遺跡第16トレンチ平面図及び断面図

層位はⅡ層を除いてⅣ層まで確認できた。遺物はこのⅣ層から出土している。

10はⅢa層から出土した。横型剝片を用いた打製石斧である。両面から丁寧に剝離されている。刃部は湾曲し、片方がやや幅広い。刃部と基部がはっきりしている。長さ13cm、刃部幅は8.6cm、基部幅4.8cm、厚さ1.9cm、重さ181gを測る。

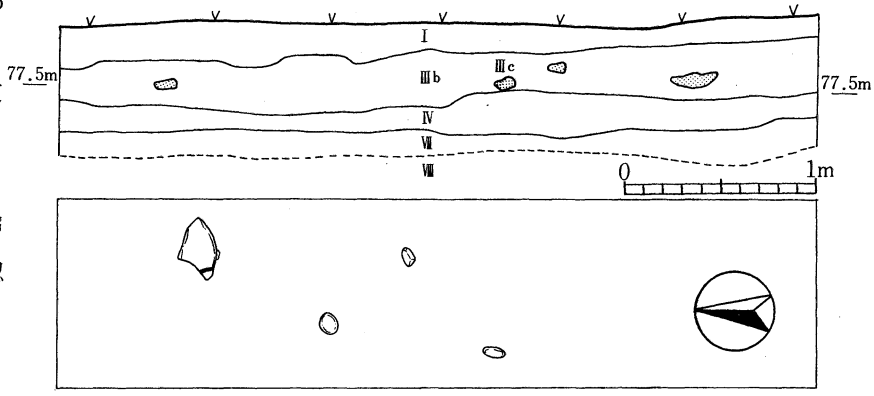
5～9はⅣ層から出土した。6は沈線で区画し、撚糸文を施す。7は口唇部に刻みを施し、口縁部には網目状の撚糸文を施す。8は沈線が2本見られる。9は頁岩製の基部に深い抉りの入る石鏃である。長さ4.7cm、幅3cm、厚さ1cm、重さ1.18gを測る。

第18トレンチ

第18トレンチは、16トレンチの南20mのところに2×3mで設定した。標高は約77.9mである。

層位はⅡ・Ⅴ・Ⅵ層を除いてⅧ層まで確認できる。

遺物は全てⅣ層より出土している。

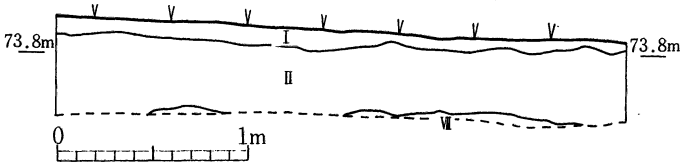


第16図　鎌石遺石第18トレンチ平面図及び断面図

第20トレンチ

20トレンチは4トレンチの北約40mの標高約74mの地点に2×3mで設定した。

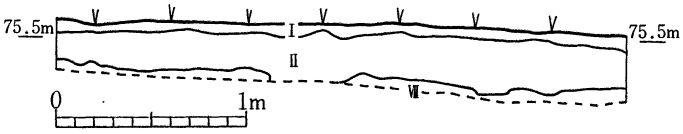
層位はⅠ・Ⅱ層の下層は直接Ⅶ層であることが確認された。



第17図　鎌石遺石第20トレンチ断面図

第21トレンチ

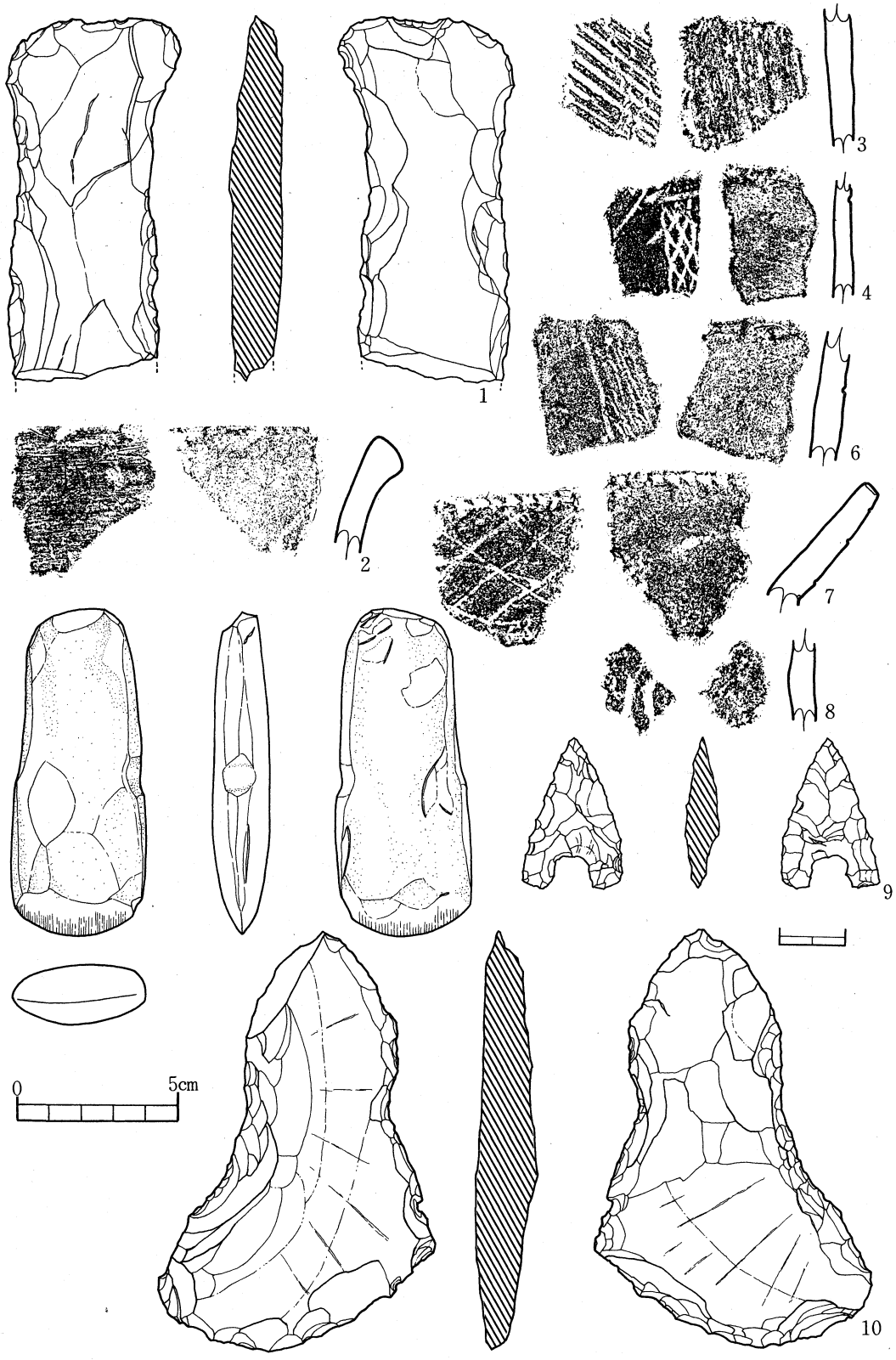
21トレンチは4トレンチの北約20mの標高約75.6mの地点に2×3mで設定した。この地点は4トレンチと20トレンチの丁度中間地点であるが、20トレンチと同一の畑で4トレンチを設定した畑より一段下位の畑になる。



第18図　鎌石遺跡第21トレンチ断面図

層位は20トレンチ同様Ⅰ・Ⅱ層の下層が直接Ⅶ層となっている。また、17，4，21，20の各トレンチを設定したこの地区は、鎌石台地の中心部に入りこんだ谷の谷頭で一列数段の谷畑となっているが、両脇の尾根畑では確認されないⅡ層が明瞭に確認できる。

尚、遺物についても20トレンチ同様出土していない。

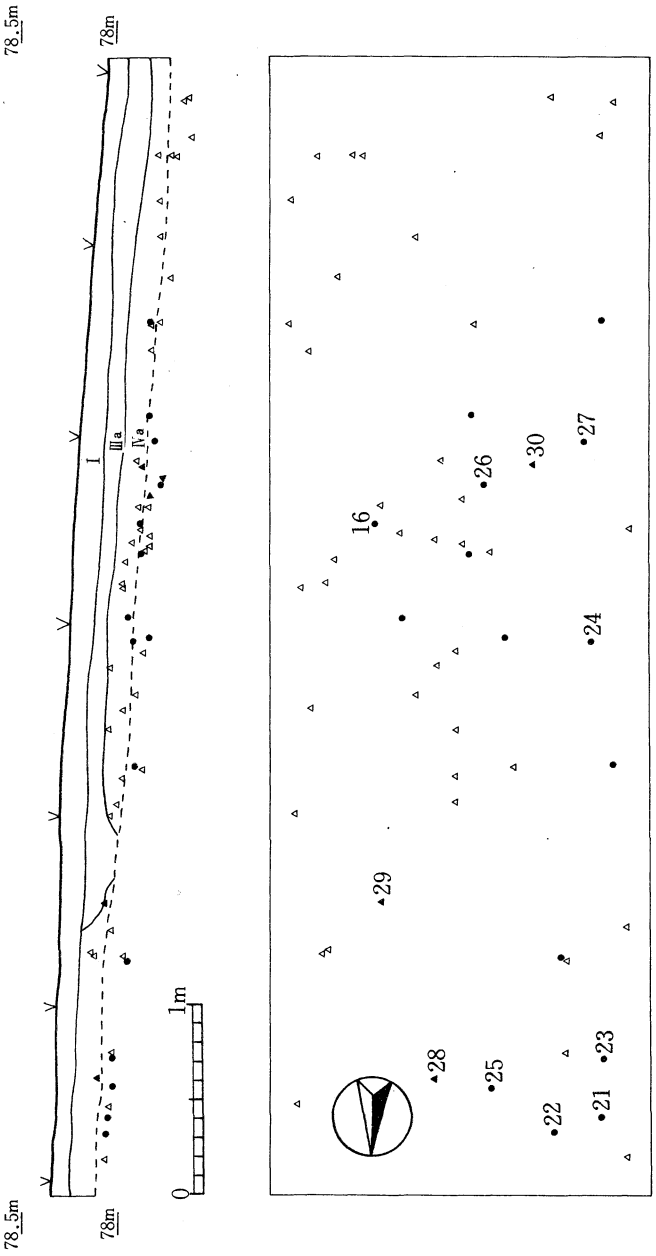


第19図　出土遺物（1）鎌石遺跡各トレンチ

第4節　A地点の調査

西側へ向く尾根の斜面に位置し、現地表面は標高79m～77.5mと傾斜している。4本のトレンチを設定した結果、2枚の畑にわたって遺物包含層が残っていることが確認できた。前節で紹介した第16・18トレンチもA地点に含まれる。高い方の畑は表土が浅く、10トレンチと19トレンチでは10cmも掘り下げるとⅣa層の縄文時代早期の遺物が出土する。Ⅲ層以上はすでに削平されているのが確認できた。16トレンチではⅢa層以下が残っておりⅢa層からは石鏃が出土した。

遺物は土器30点、石100点が出土し、その内で図示できるすべてのもの18点について掲載した。最も多く出土したのは自然礫であり、表4に長さと重さの関係を示した。全部で75個あり合計の重さは8.79kgである。

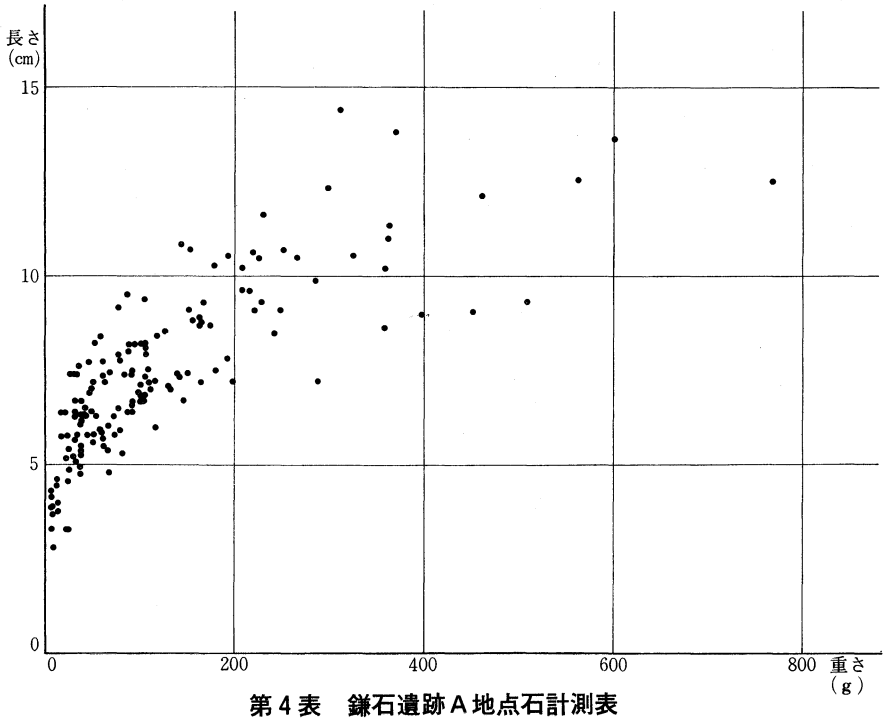


第20図　鎌石遺跡A地点の遺物出土状況

塞ノ神式土器　11は口唇内部をわずかにくぼませ、端部に刻みを施す。口縁部には沈線で波線と2本の横線を交互に描く。明橙色を呈する。12・13は頸部屈曲部に半截竹管様の工具で列点を施す。12は4本の平行沈線を帯状に施す。器壁は厚く、茶褐色を呈する。14・15は沈線で文様を描く。色調も文様も11に類似する。14は3本の横線と波線をもつ。15は2本の横線と波線が交互に繰り返される。16～20は沈線による区画に撚糸文を施す。16は網目状の撚糸文である。

倉園Bタイプの土器　21～25は同一個体の土器と考えられる。口唇部は平に面取りし、刻みは施さない。口縁部には貝殻腹縁をやや下方から突き刺すようにして横位に3本の平行線を描く。

器面調整は内外面とも光沢をもつような丁寧なナデである。外面には貝殻腹縁で「ハ」の字を意識した条痕文が描かれる。23の胴部拓影にみられるように最初2mm、次に5mm、最後に18mmと押し引き状に条痕を施す部分もみられる。貝殻の腹縁部を利用して描いたのか、背の筋を押圧したのかは明確に識別できない。底部は直径19cmと比較的大きい。底部全体が接地する平底で、圧痕等はみられない。接地面近くまで「ハ」の字状の条痕が施され、円筒土器に一般的な縦位の条線はみられない。色調は茶褐色を呈し、胎土には金雲母が多く含まれる。



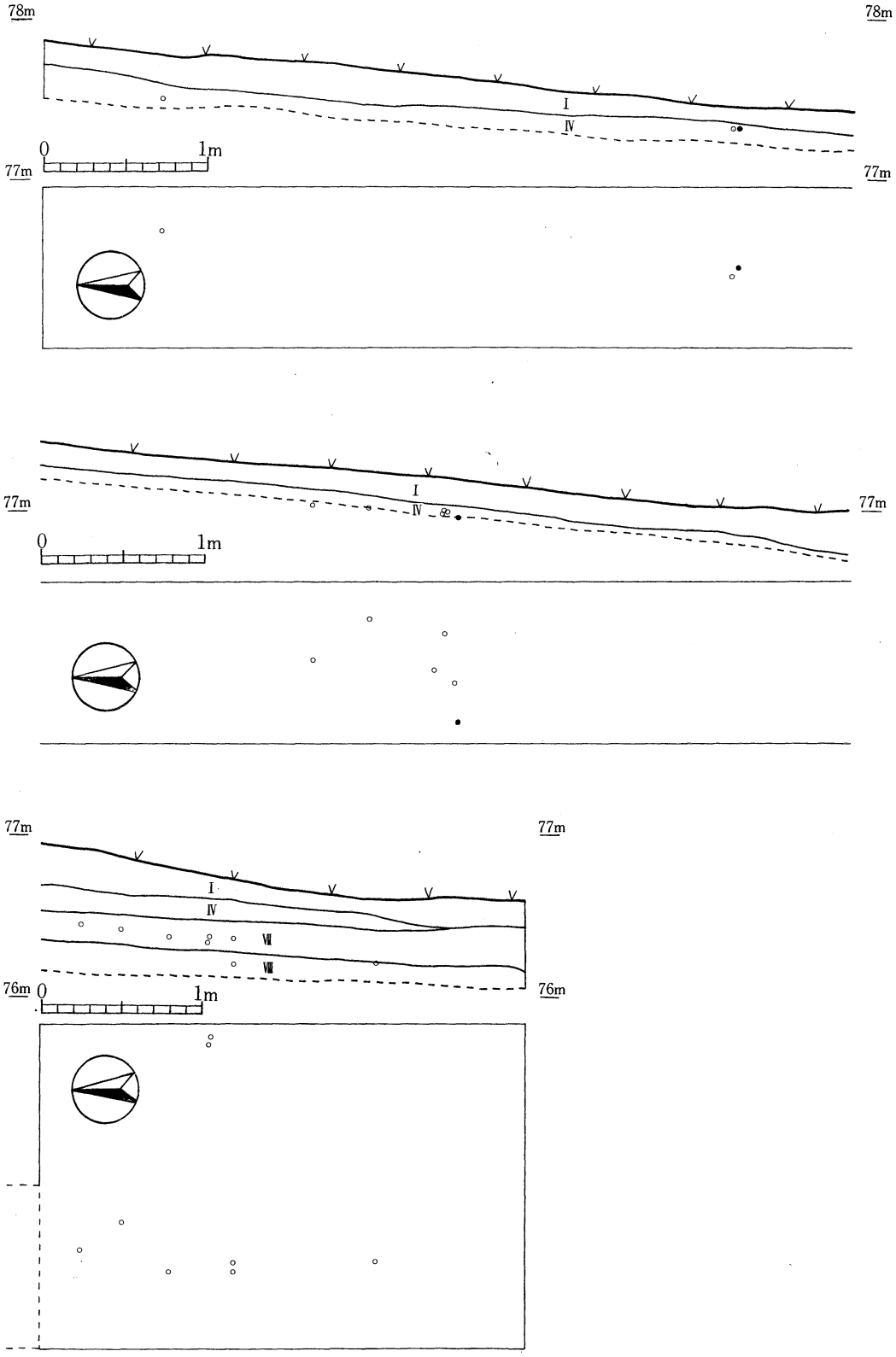
第4表　鎌石遺跡A地点石計測表

26は外面が横位の条痕であり、内面は縦位の条痕を施す土器である。胎土にカクセン石を含む。1片しかなく、型式名は不明である。

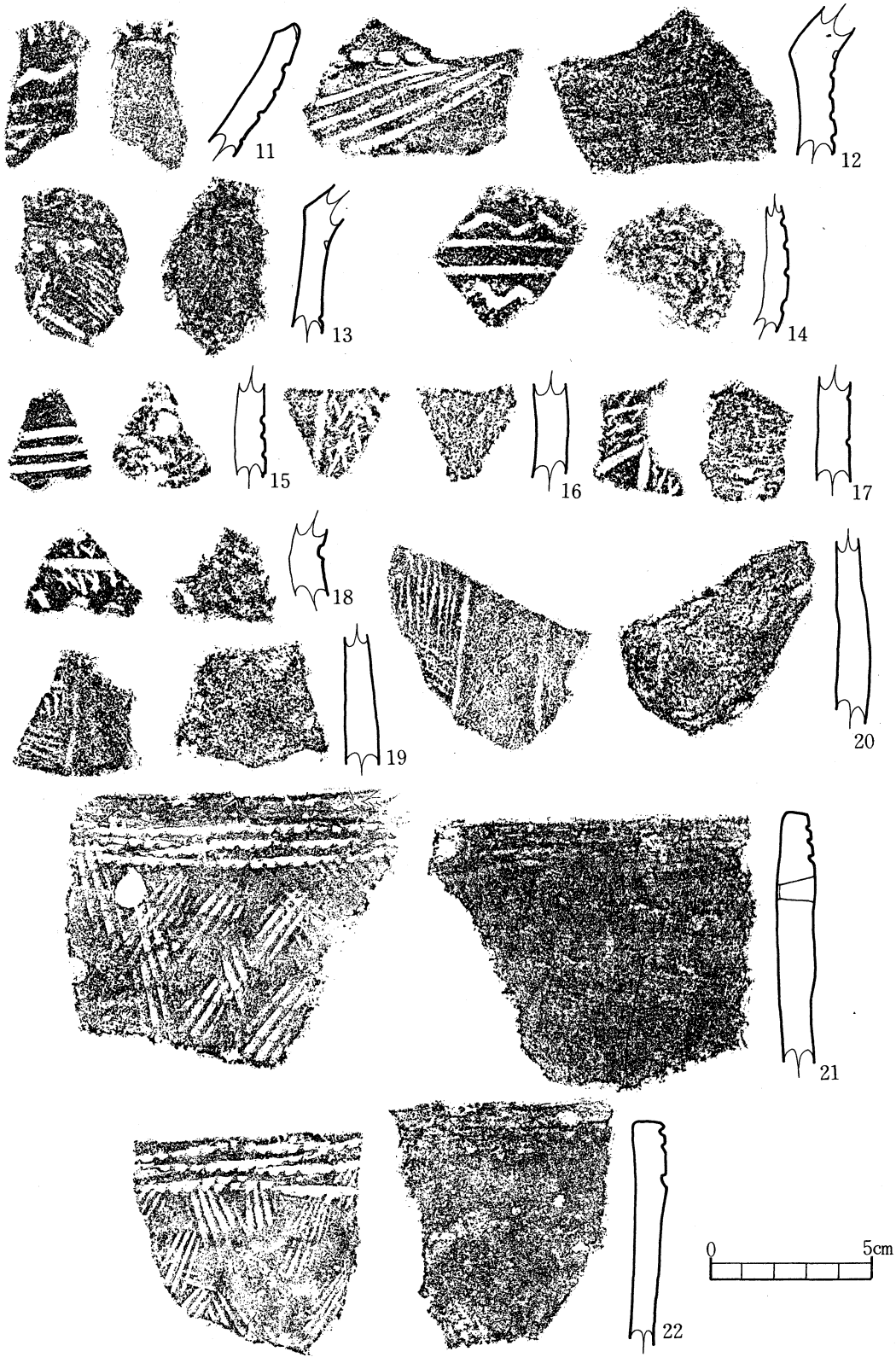
下剝峯タイプの土器　27の口唇部は尖り、瘤状の肥厚部を頂点とする波状口縁の土器である。器面調整は内面が横方向の粗いケズリであるのに対し、外面は丁寧なナデである。縦長の瘤状肥厚部をもち、貝殻腹縁をほぼ垂直に刺突する。

磨石　28は11.7cm×9.1cmの楕円形の礫を用いる。片面だけに磨痕が残る。砂岩質で、厚さは4.5cmを測る。29は6.4cm×5.7cm×4.0cmの小さな礫を用いる。片面だけ磨痕が残る。石材は砂岩質である。

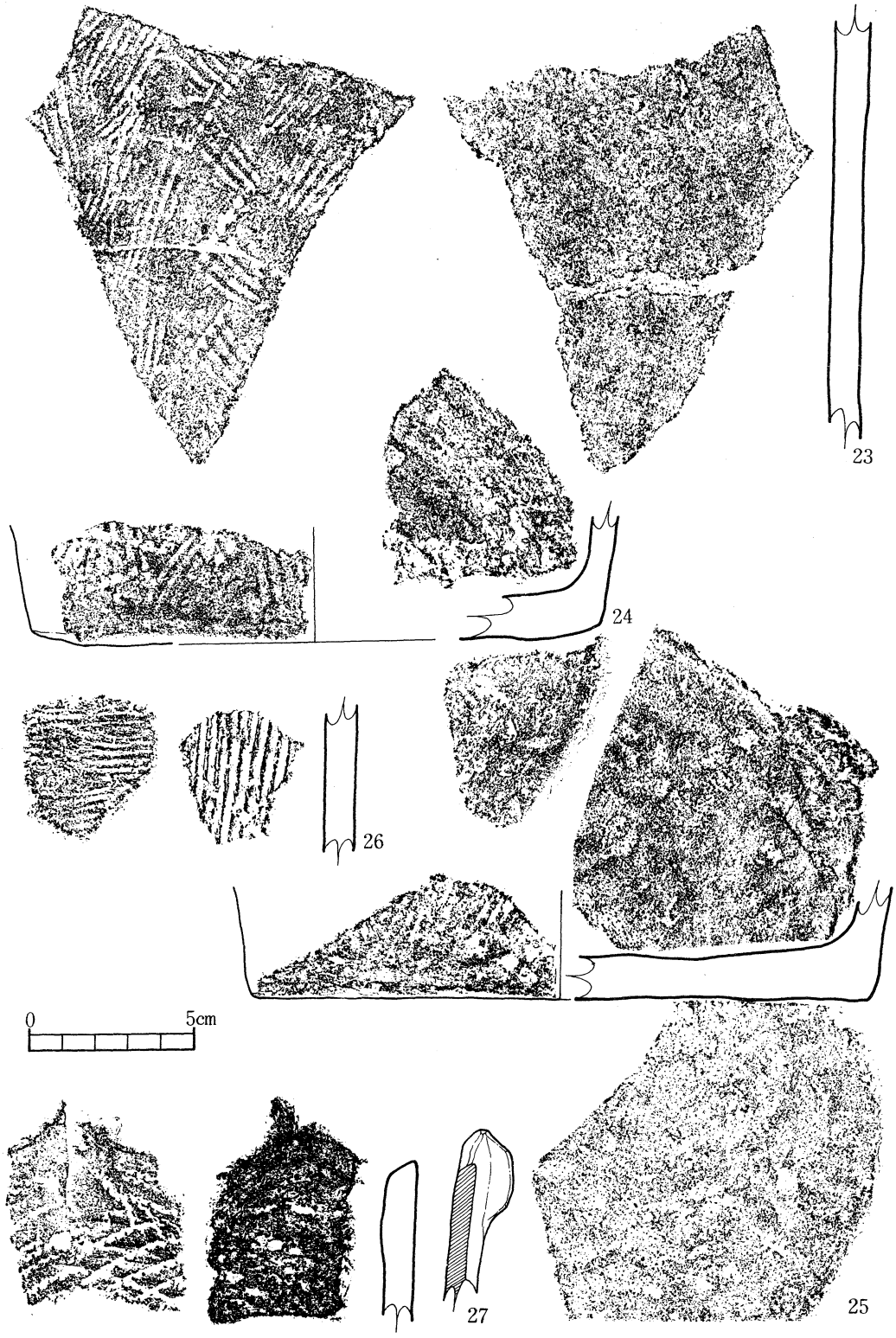
石鏃　黒耀石製で、基部はわずかに凹をもつ。先端角は鋭い。縦1.58cm、横1.31cm、厚さ0.33cm、重さ0.45gを測る。



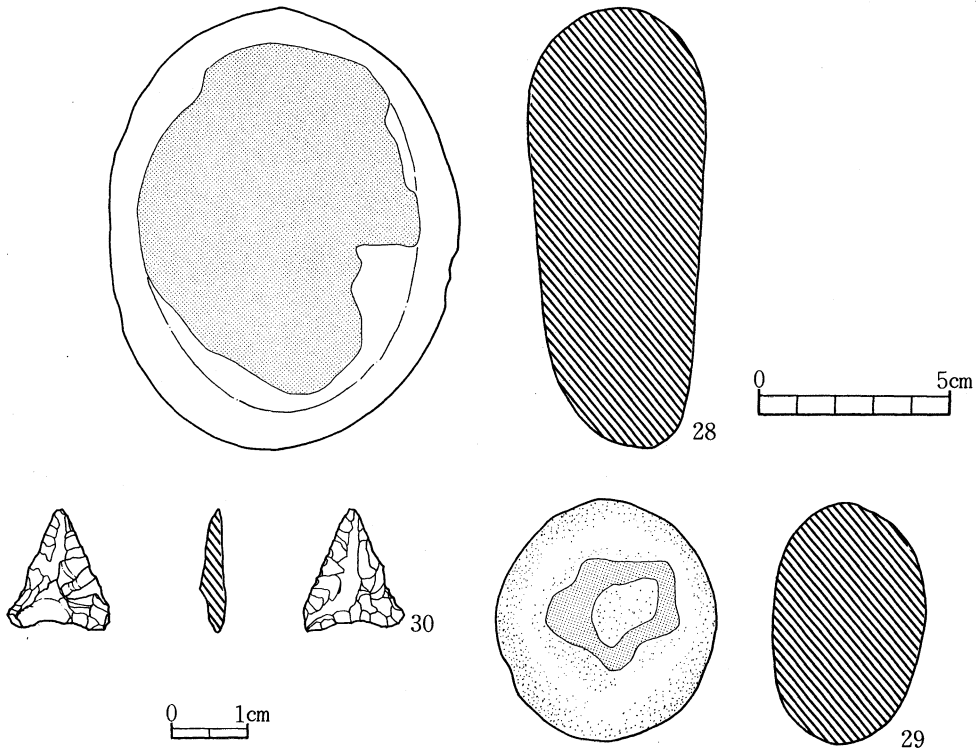
第21図　鎌石遺跡第19トレンチ平面図及び断面図



第22図　出土遺物（2）A地点



第23図　出土遺物（3）A 地点



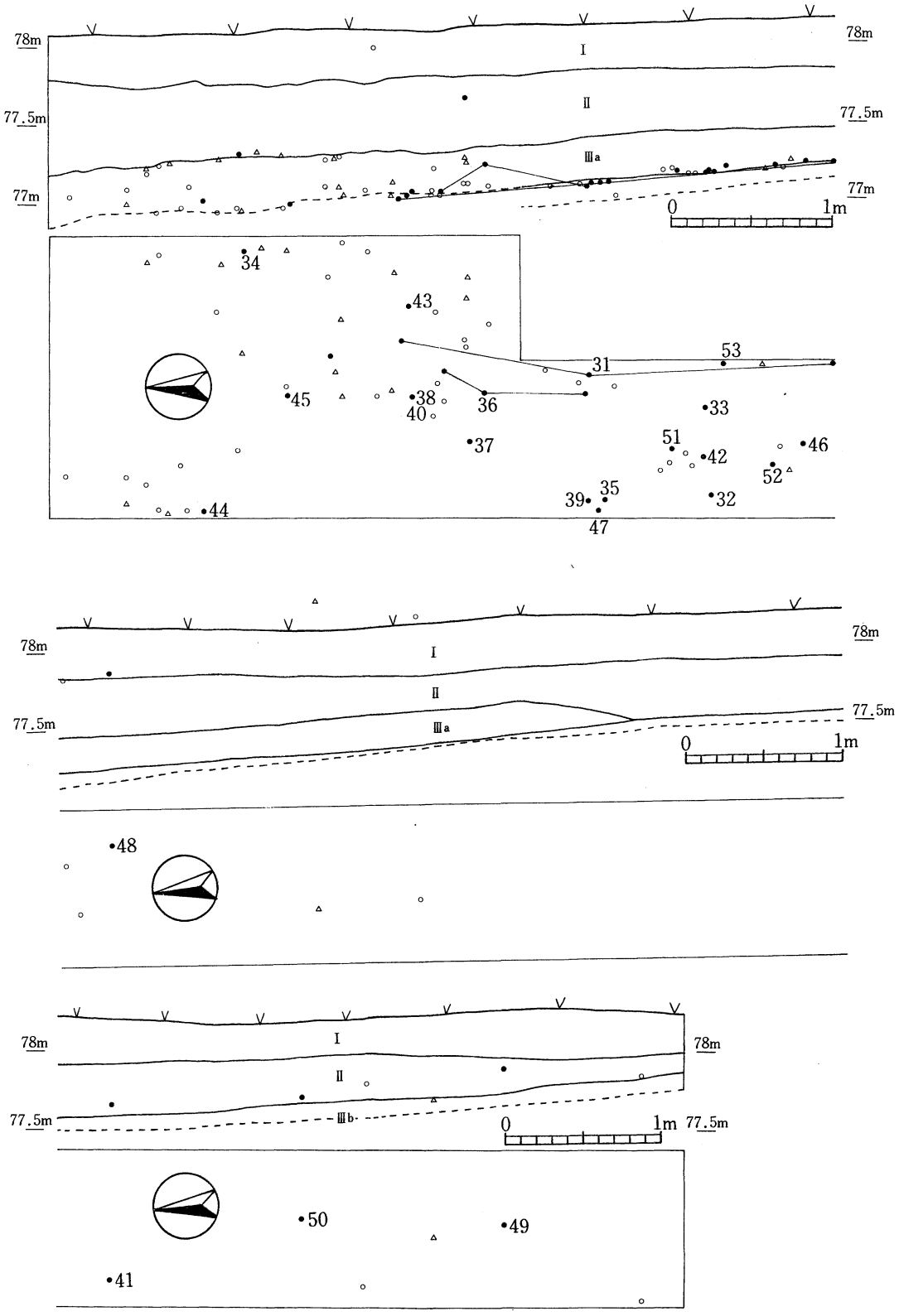
第24図　出土遺物（4）　A地点

第5節　B地点の調査

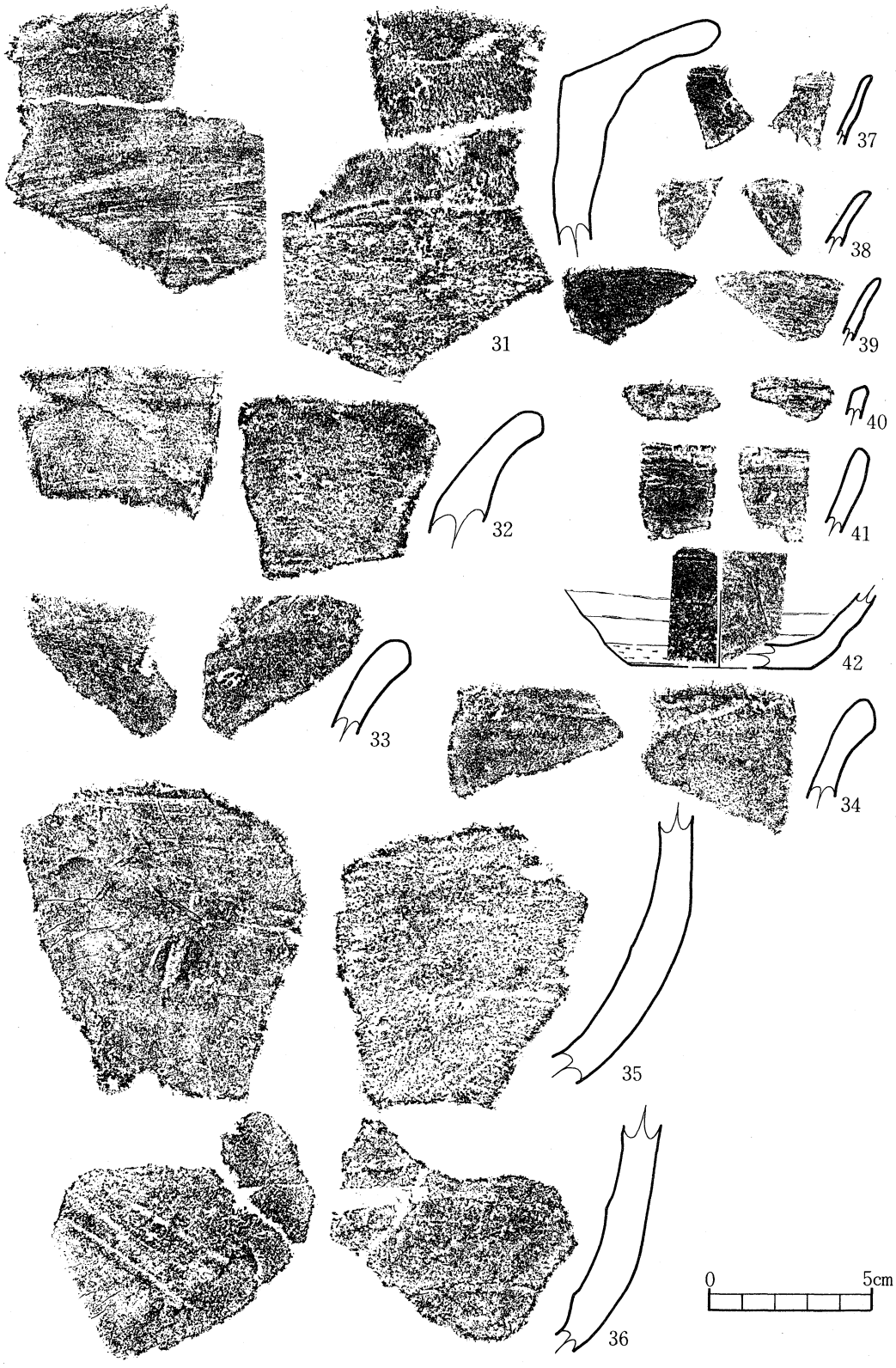
北に延びる小さな谷頭に位置し、Ⅲa層は標高76.8m～77.8mと北側へわずかに傾斜している。遺物の散布は南北に細長くみられ、遺構は確認できなかった。遺物の出土は主にⅡ層とⅢa層の境である。下段の畑の第20・21トレンチでは包含層も遺物も確認できなかったので、残っているのはB地点の畑部分に限ると考えられる。遺物は土器64点、石14点が出土し、その内で図示できるすべてのもの23点について掲載した。

甕形土器　口縁部（31～34）と胴部（35・36）が出土した。底部として分離できるものが見あたらないことから、底部は胴部からの延長で丸底を成していると考えられる。口縁部は内外面ともヨコナデする。胴部外面は調整痕を丁寧にナデ消されている。また、内面はヘラ状工具を使って、横方向に削られているのが特徴である。

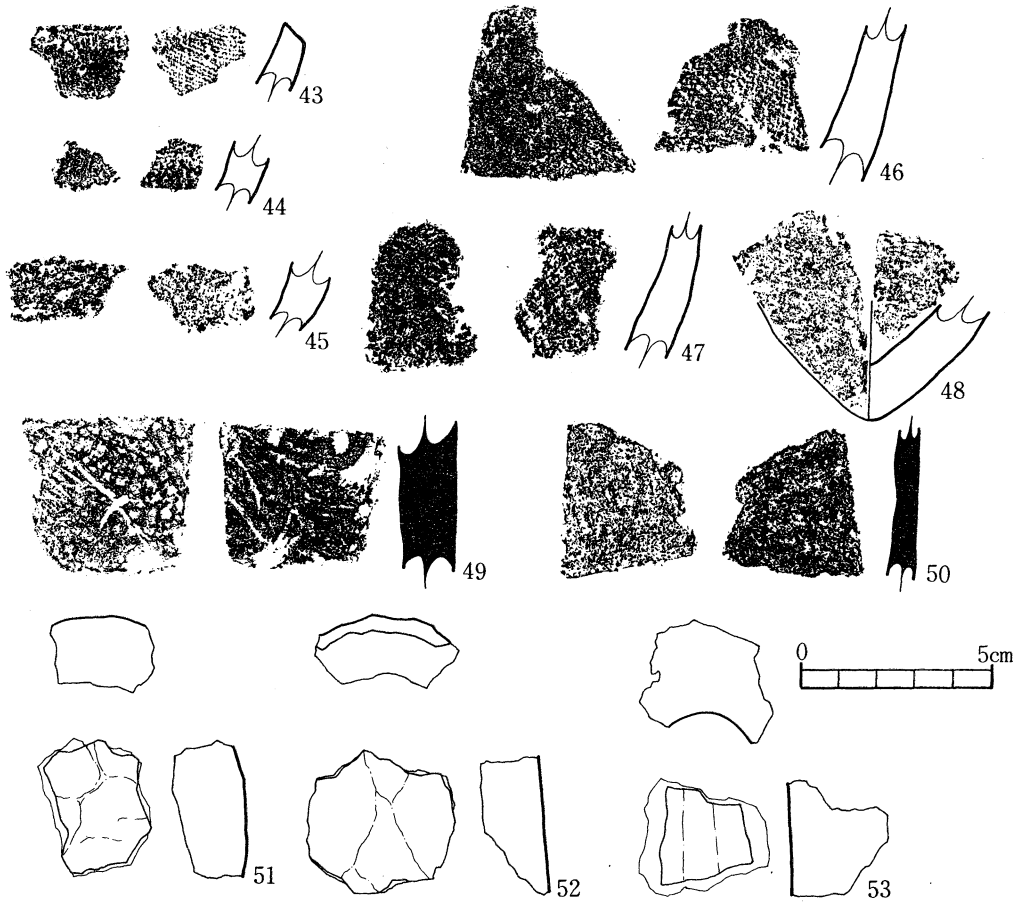
坏形土器　口縁部（37～41）と底部（42）が出土した。ロクロによる水引きで形が整えられる。完形になるものは出土していないが、ほぼストレートの体部になると考えられる。37～39が薄手で口縁端部が尖るのに対し、40・41は厚手で口縁端部は丸味を帯びる。37は内面が丁寧に磨かれ、器面全体が灰色を呈し還元炎による可能性もある。39の口縁部外面には乳白色の釉がかけられている可能性がある。42の底部は、ヘラ切りによる切り離し方法であるかどうかはっきりしないが、少なくとも回転糸切りによるものではない。接地部に近い体部は削りによる整形が行われる。



第25図　鎌石遺跡B 地点（4・17トレンチ）の遺物出土状況



第26図　出土遺物（5）　B地点



第27図　出土遺物（6）　B地点

焼塩壺　内面に布目をもつ土器（43～48）が6点出土している。外面は指頭で形成したままの状態を残し、内面は平織りの布目を残す土器である。43は口縁部で口縁部内側が尖る。外面には縦方向の擦痕が残る。48は尖底となる底部である。胎土は粗く、8mm大の小礫も含む。器壁は熱を受けて赤く変色している。輪積み痕を残さないことと、割れ口が規則的でないこと、内面に布目痕をもつことから型にあてはめてつくられたことが考えられる。

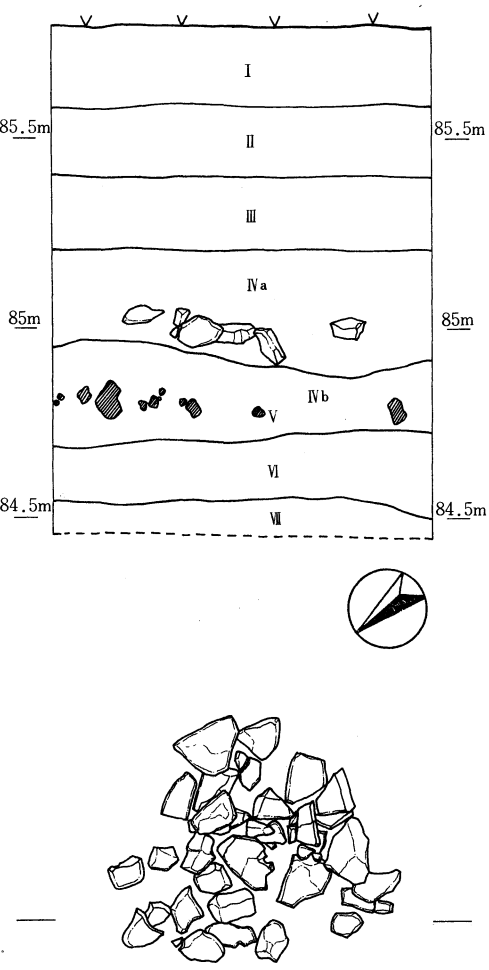
須恵器　49・50の2点出土した。両者とも摩耗が著しい。49は外面は格子の叩き目をもつ。内面ははっきりしない。器壁は1.3と厚く、赤褐色を呈する。50は、外面は横方向のナデ、内面は斜方向のナデが観察できる。器壁は6mmと薄く、色調は青灰色を呈する。

その他の土器　51～53は全形ははっきりしないが、同一個体のものとおもわれる。外面・内面とも粗く整形されており、円筒状の形になると考えられる。器壁は厚く、表面は強い熱を受けたためか外面灰褐色、内面赤色を呈する。鉄滓などは出土していないが、フイゴ羽口の破片ではないかと考えられる。

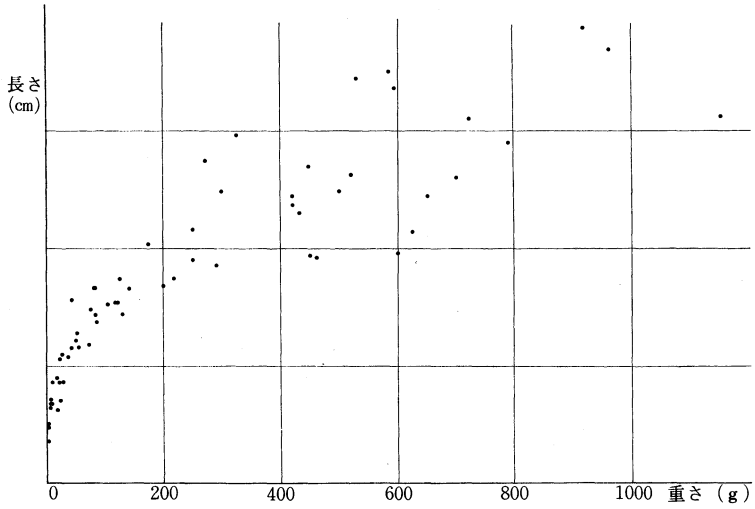
第6節　C地点の調査

北西側に向く台地端に位置し、現地表は標高85.8mである。遺物は全く出土しはかったが、Ⅳa層から集石遺構が検出された。北西側は耕作地の地下げのため一部分石が抜き取られている。平面形は直径80cmのほぼ円形をしており、大きな石の重なった部分はなく、すべて1個体づつが隙間なく敷き詰められた状態である。集石はほぼ水平を保ち、掘り込みなどの施設はみられなかった。石は割れているものも含めると全部で60個であり、合計の重さは15.885kgである。石質は砂岩であり、すべて熱を受けて赤く変色している。石皿や凹石など石器を転用したものはみられなかった。また、集石に接する地面に熱を受けた形跡は肉眼では観察できなかった。各石の最大長と重さの関係は表5のとおりである。最も大きな石は長さ18.5cmであり、最も小さな石の長さは1.8cmである。

アカホヤ層より下位に、しかも薩摩層よりも上位に検出されたので、縄文時代早期のものであるということは、はっきりしている。遺物の出土はないが、最も近い第6トレンチの同じ層から塞ノ神式土器が出土していることから、縄文時代早期後半の時期のものであると考える。



第28図　鎌石遺跡C地点集石出土状況



第5表　鎌石遺跡C地点集石計測表

第7節　D地点の調査

西側の尾根端部に位置し、ほぼ平坦な地形をしている。Ⅲa層の縄文時代晩期の包含層で発掘を止めているため、Ⅲb層以下に遺物を包含しているかどうかは確認していない。110の土器のように縄文早期に該当するような土器もみられるため、アカホヤ層以下にも遺物を包含している可能性がある。遺物は土器186点、石76点が出土し、その内で図示できるすべてのもの62点について掲載した。

土師器　54は平安時代の甕形土器である。55は平安時代の杯形土器である。2点のみの出土であり、摩滅も著しいことからD地点に住んでいたとは考えられない。B地点の人々のものに関係が深いと考える方が良さそうである。

精製浅鉢形土器　56は口縁部を屈曲させ内側に一条の凹線を施す。内外面とも丁寧にミガキあげていて、黒色を呈する。57はほぼ直口する口縁部で、端部のみがやや内側に傾く。内面には浅い凹を施す。外面もほんのわずかに凹をもつ。58は内面に強く屈曲する口縁部である。体部は3.5㎜と非常に薄く仕上げている。59は針で描いたようなごく細い沈線を施し、沈線内には赤色の顔料が残っている。60～62は胴部屈曲部である。60・61が強く屈曲するのに対し、62はゆるい屈曲である。

粗製鉢形土器　63～69は口唇部を平らに面取りする。64は胎土に金雲母を多く含む。68は内面は貝殻条痕で器面調整する。外面の口縁部付近はナデにより、体部は横方向のケズリである。68・69ともに外面に煤が付着する。

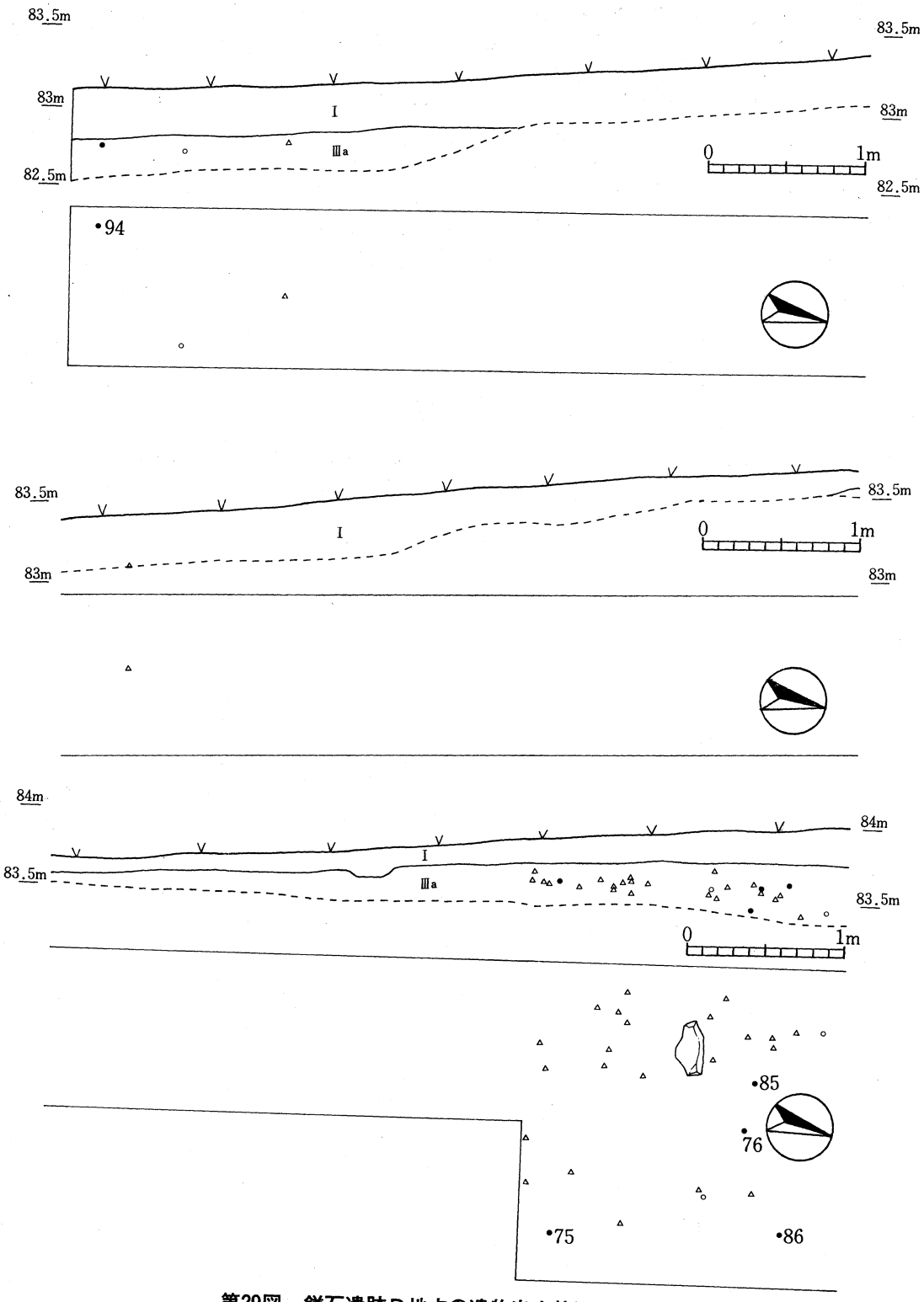
70～78は外面を肥厚させる口縁部である。76は口唇部にそって逆L字状に粘土紐をはりつけ、口唇部は平に面とりする。肥厚部の幅は最も狭い。内外面とも粗い調整である。71・74・75は口縁肥厚部の断面が三角形をなす。口唇部は丸くおさめる。肥厚部の幅は約1㎝である。77・78は肥厚部の段がはっきりし、断面形は長方形になる。肥厚部の幅は1.5㎝とやや間延びする。73の肥厚部はさらに間延びし、幅は2㎝である。

79～81は口縁部にかけてやや内湾させ、口唇部は丸くおさめる。82～84・89は内面を肥厚させる。口縁部内面の肥厚部は口唇から続けて丸く形作る。肥厚部の幅は1.5㎝である。87は頸部がはっきりし、口縁部はわずかに屈曲して立ち上がる。

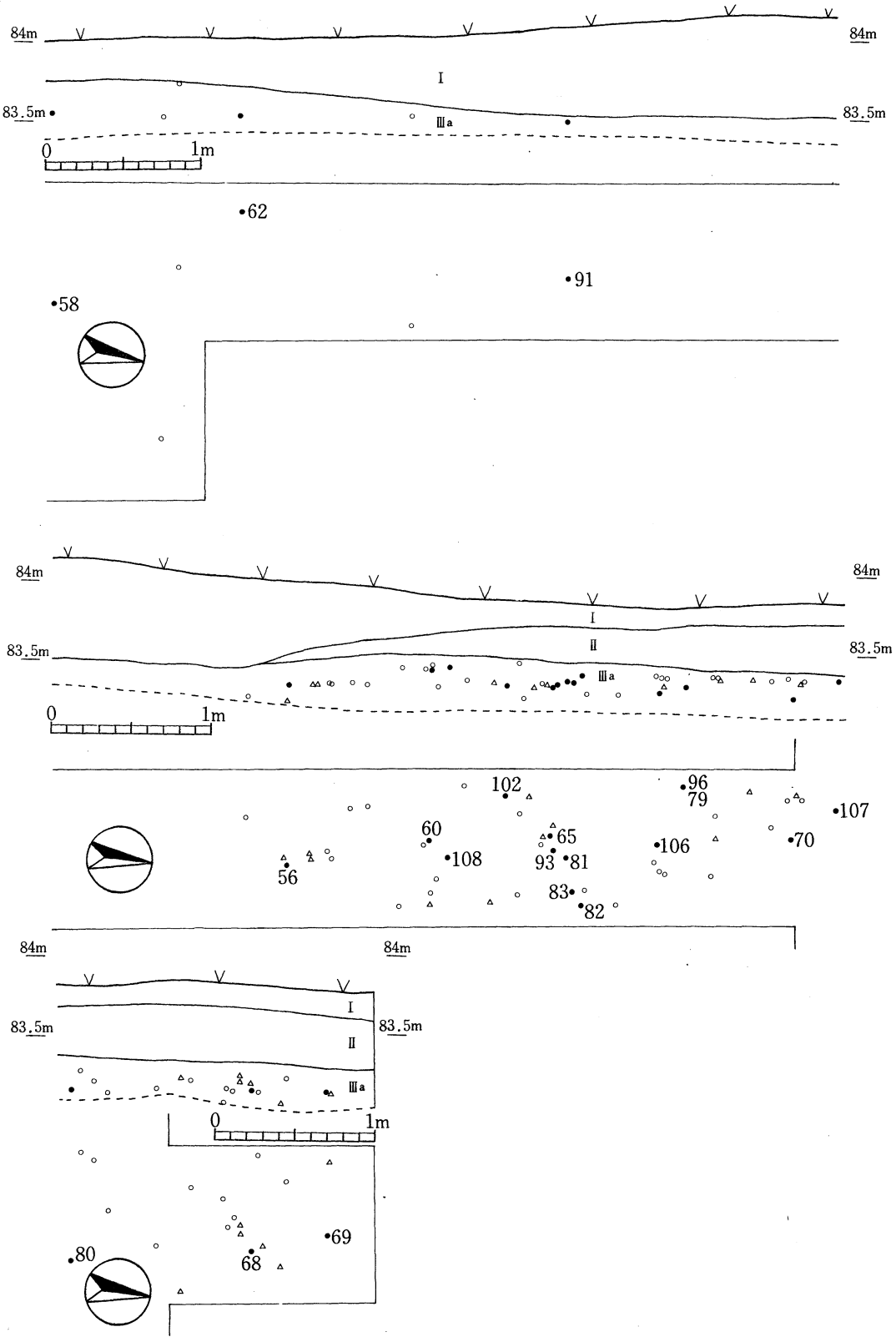
91～100は胴部の破片である。92・94・95は胴部から頸部への屈曲部と考えられる。96・97は段をもって肥厚する口縁部に続く部位と考えられる。98は突帯を張り付けているが、突帯で描く文様をはっきり知ることはできない。99は内外面とも器面調整は貝殻条痕によるものである。100は底部付近と考えられる。

底部　101と102の2点が出土した。両方とも平底であり、外側に張り出すのが特徴である。101は接地面に6㎜幅の直線の圧痕が2列みられる。

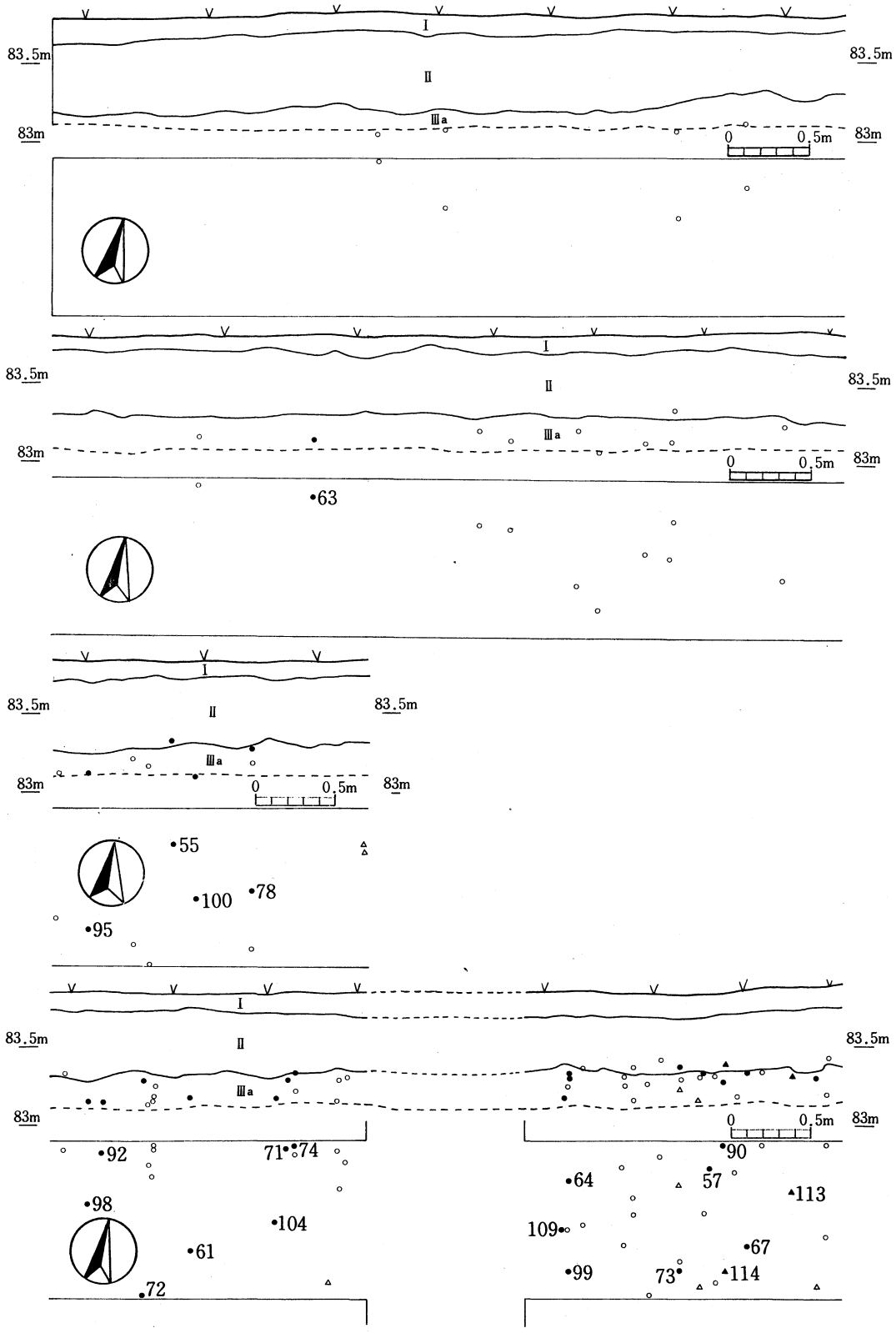
組織文土器　8点の組織文土器（103～109）が出土した。蓆目圧痕と呼ばれるものばかりで、網目圧痕土器は出土しなかった。単位幅は広く、約2.7㎝である。1㎝あたりの緯線の本数は5本である。



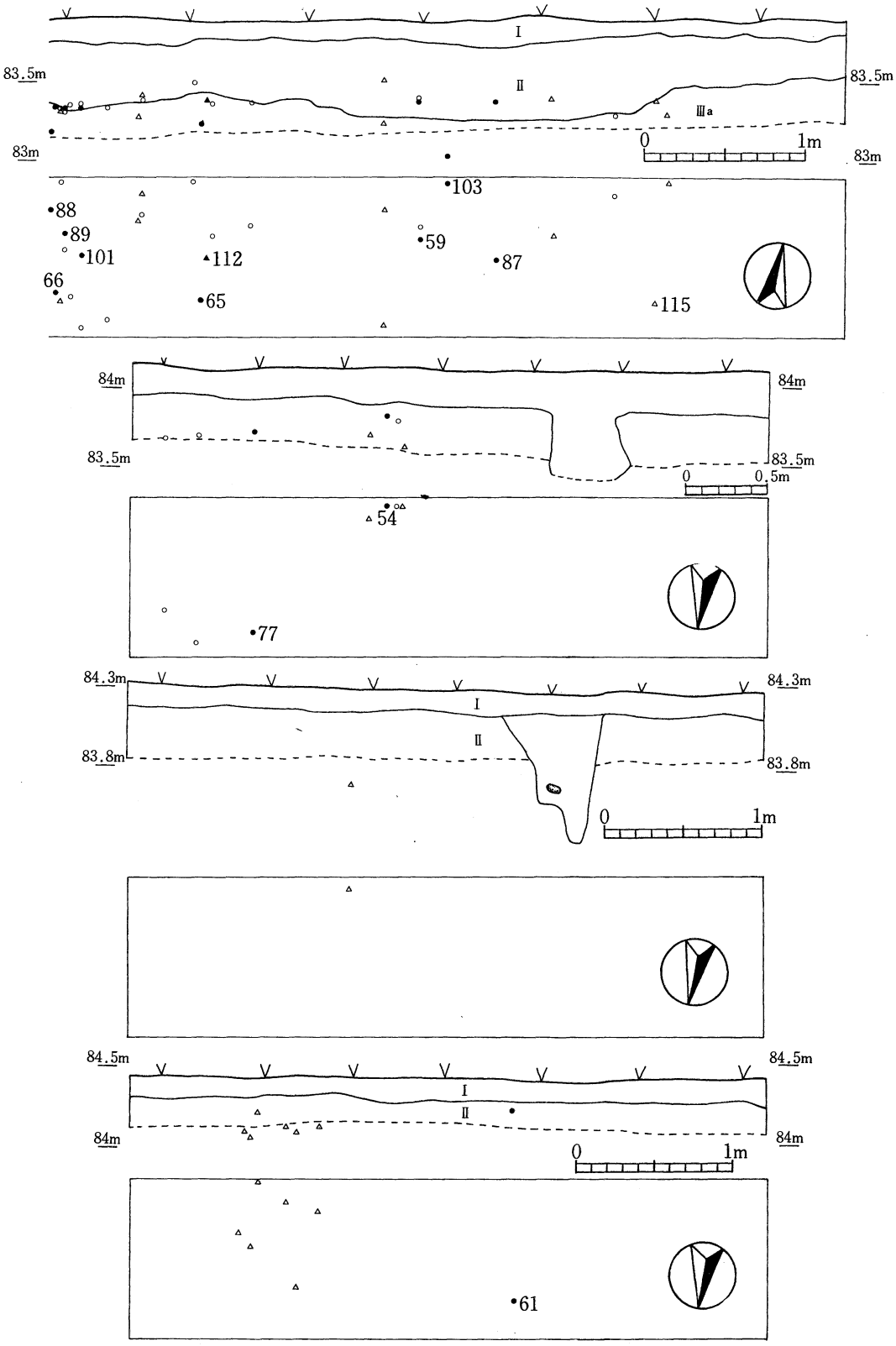
第29図　鎌石遺跡Ｄ地点の遺物出土状況１



第30図　鎌石遺跡Ｄ地点の遺物出土状況２



第31図　鎌石遺跡D地点の遺物出土状況 3



第32図　鎌石遺跡Ｄ地点の遺物出土状況４

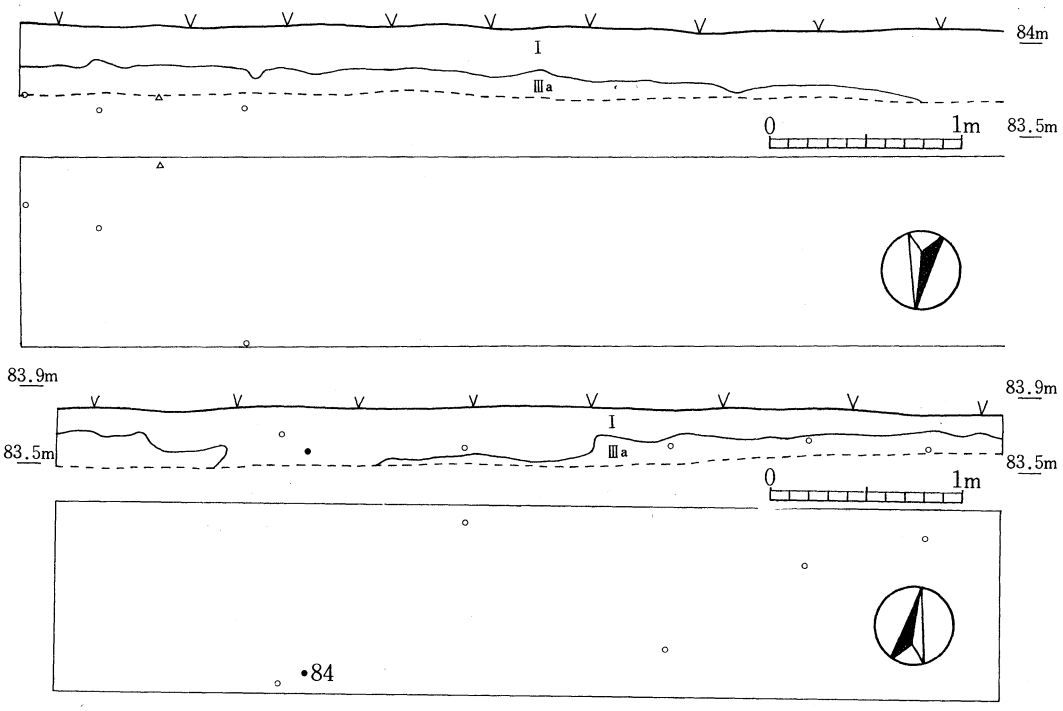
その他の土器　110は1点だけ他の土器と異なる。外面は貝殻条痕を施し、少なくとも2列を単位とした連点を描く。内面は粗いケズリである。明橙色を呈する。既存の型式名に該当する土器はなく、縄文時代晩期の土器とも考えにくく、今後の課題としたい。

凹石　111はピット内から出土した。4面に凹部をもつ。表裏の凹は深く、8.6mmに達する。両側の凹は浅い。凹以外の部分は5ケ所に平坦な研磨面をもつ。石材は砂岩である。縦11.5cm、横8.47cm、厚さ5.98cmを測る。

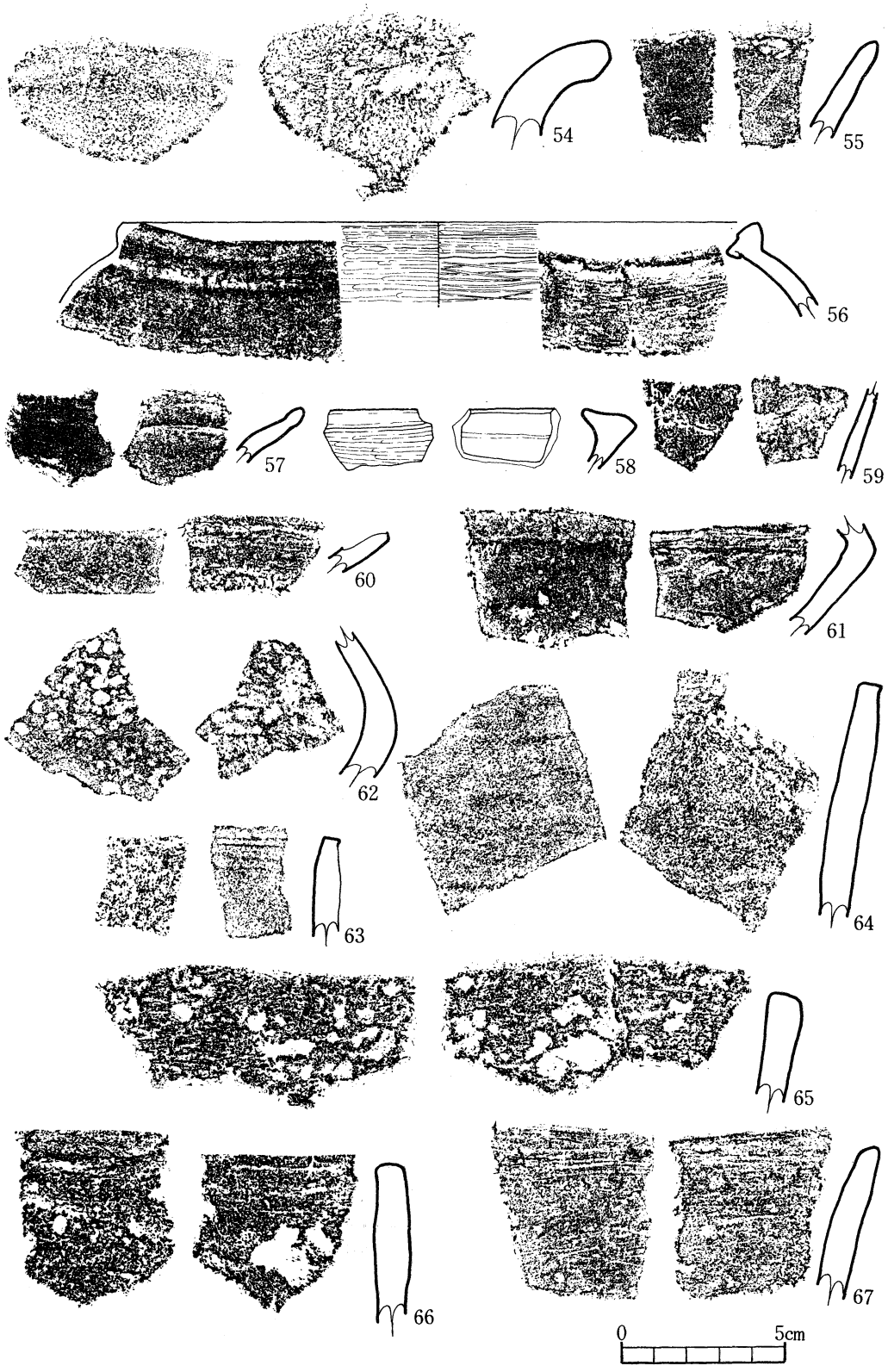
磨石　112は円形をし、表裏とも研磨されている。側面は一周キザミがつけられている。磨石の他に、この刻み面を利用した機能が重視されていたと考えられる。今のところ類例を知らない。石材は砂岩である。縦10.5cm、横9.85cm、厚さ3.67cmを測る。113は小形の礫を用い、片面だけに磨痕がある。石材は砂岩である。縦5.39cm、横4.93cm、厚さ1.24cmを測る。

打製石器　114は頁岩の横長剝片を用い、両面から細かい剝離を加える。基部が折れているため、全体の形状ははっきりしない。土掘具として使用されたと考えられる。縦6.25cm、横6.05cm、厚さ1.55cmを測る。

石鏃　115は平坦な基部をもち、先端は船先形をしている。石材は頁岩質である。縦1.95cm、横1.38cm、厚さ0.53cm、重さ1.12gを測る。

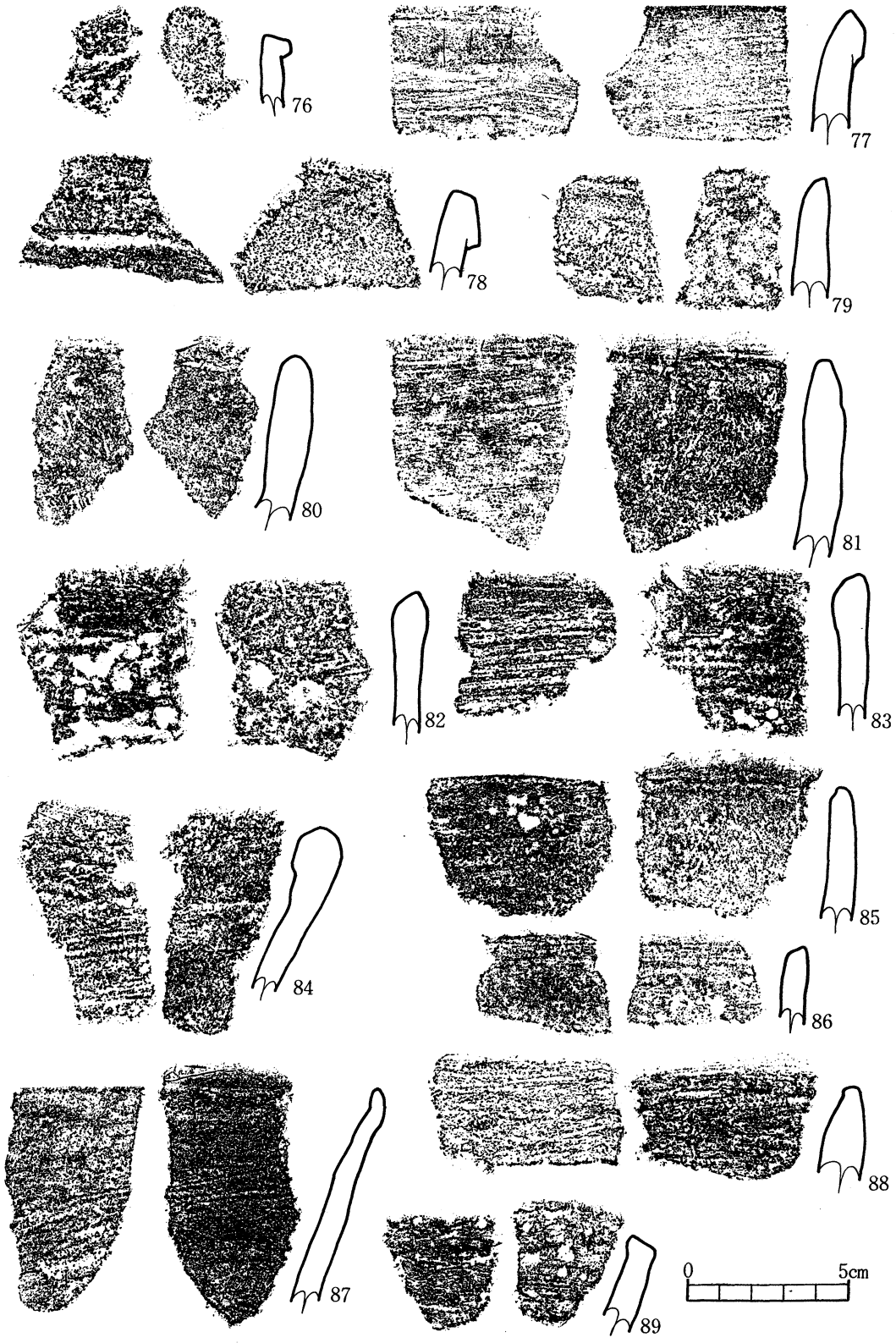


第33図　鎌石遺跡D地点の遺物出土状況5

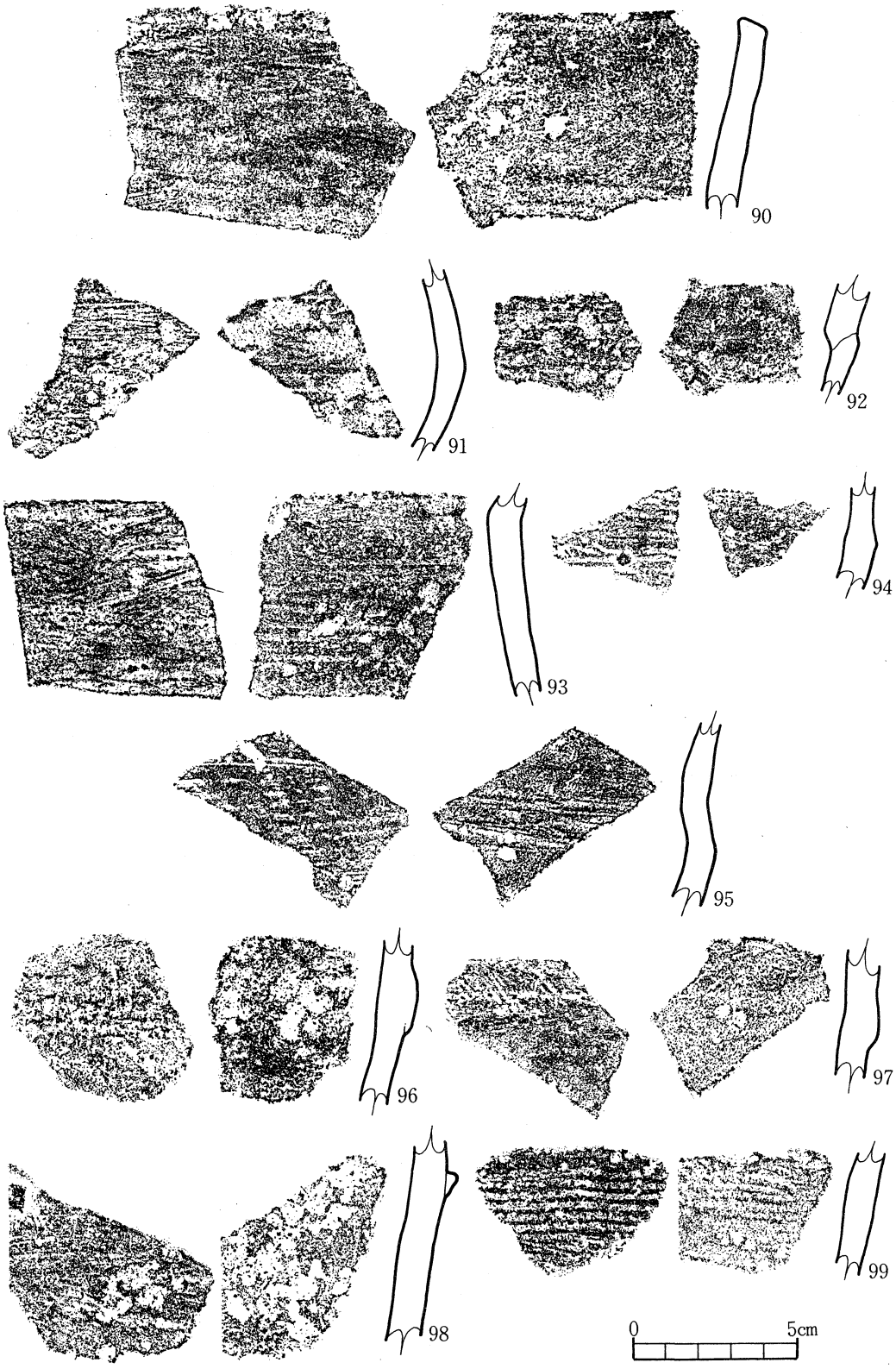


第34図　出土遺物（7）　D地点

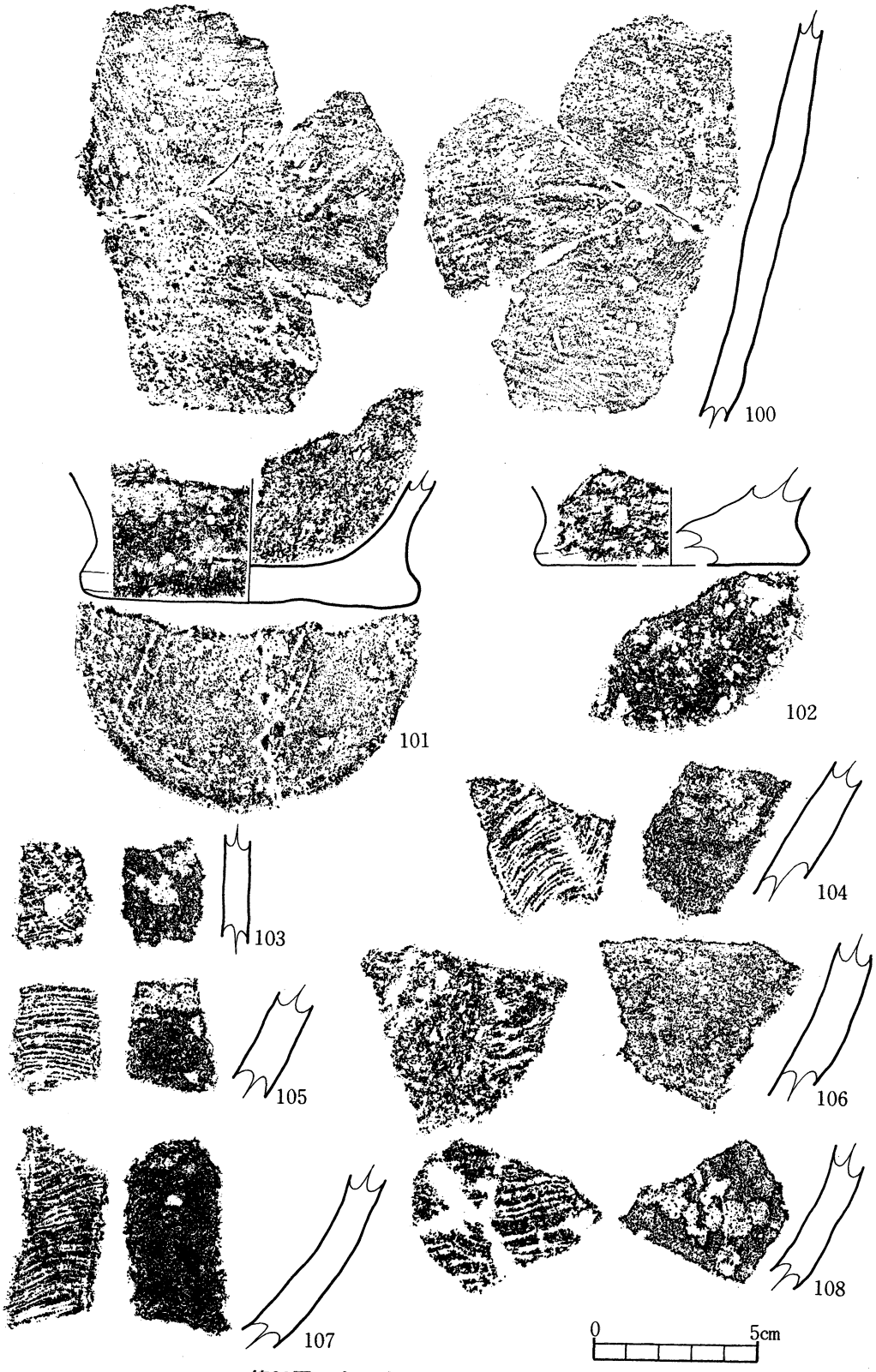
第35図　出土遺物（8）　D地点



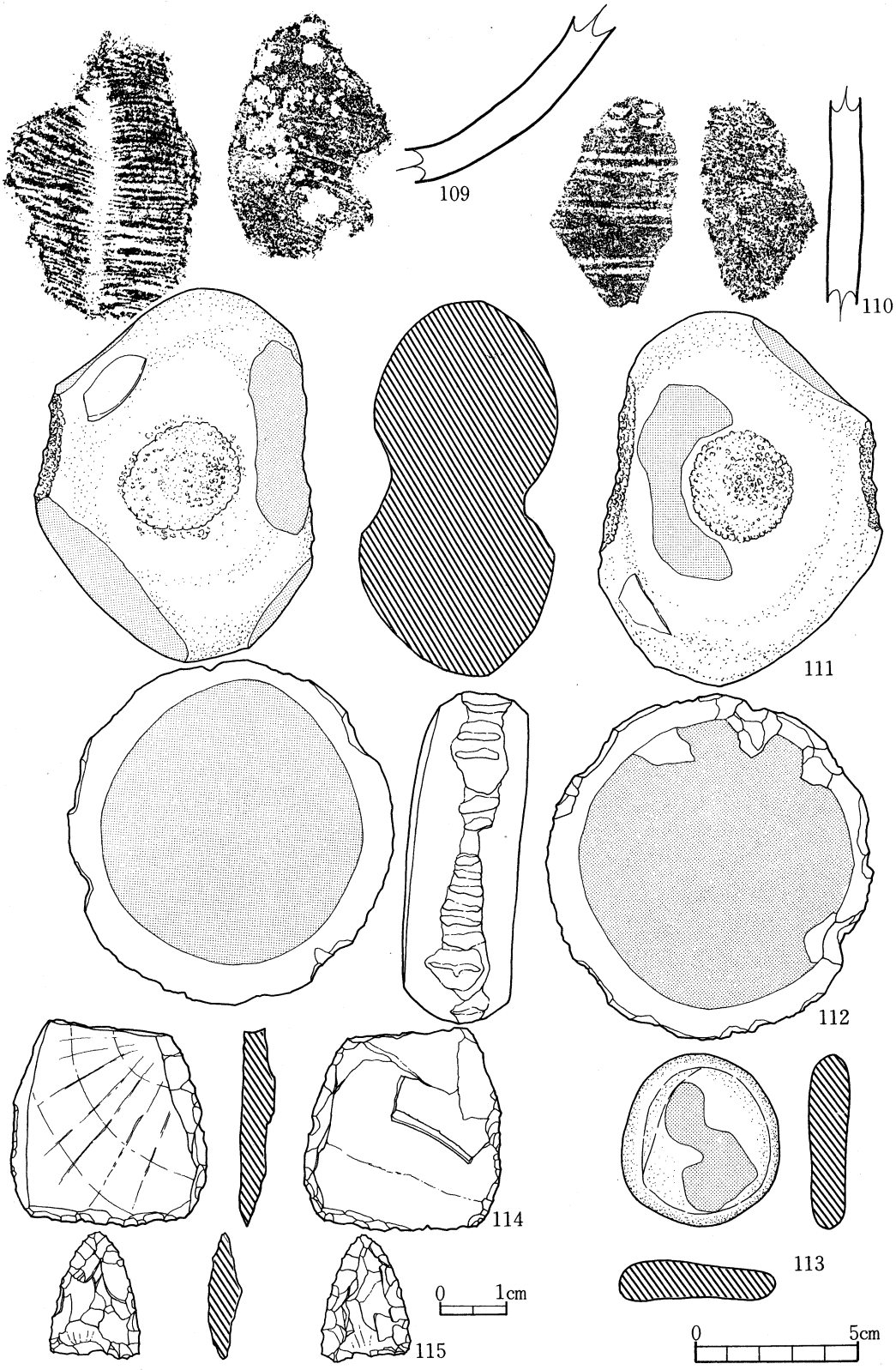
第36図　出土遺物（9）　D地点



第37図　出土遺物（10）　D地点



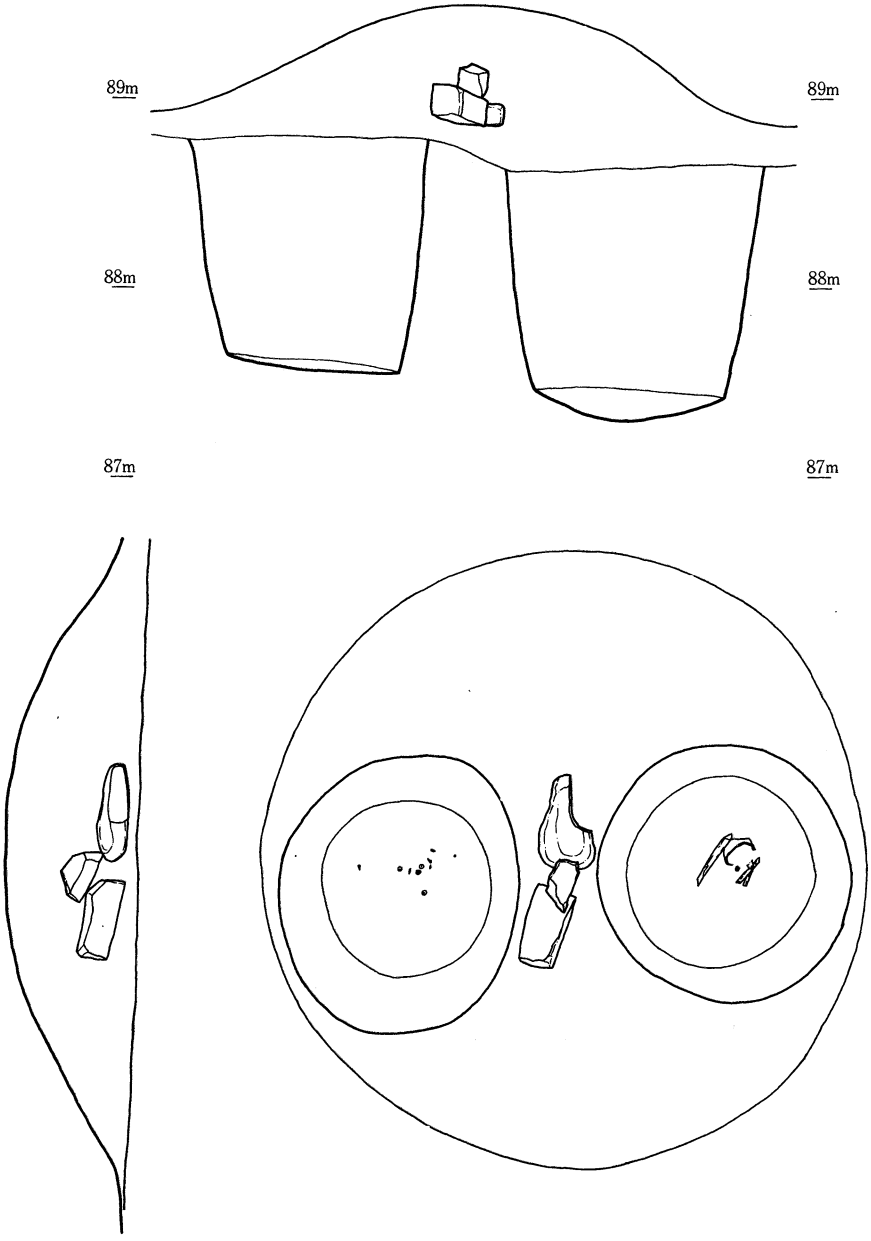
第38図　出土遺物（11）　D地点



第39図　出土遺物（12）　D地点

第８節　Ｅ地点の調査

今回の調査範囲内ではほぼ中央にあり最も高い場所に位置する。ここは、ゴショアゲバショと呼ばれる集落共同のお祭りを行う場所である。集落の人々が大切に奉ってきた塚があり、古老の話によると「塚の下には西南の役（1822年）の時戦死した人が葬られていて、戦前(1940年)には大きな木があった。」ということである。



第40図　鎌石遺跡Ｅ地点近世墓出土状況

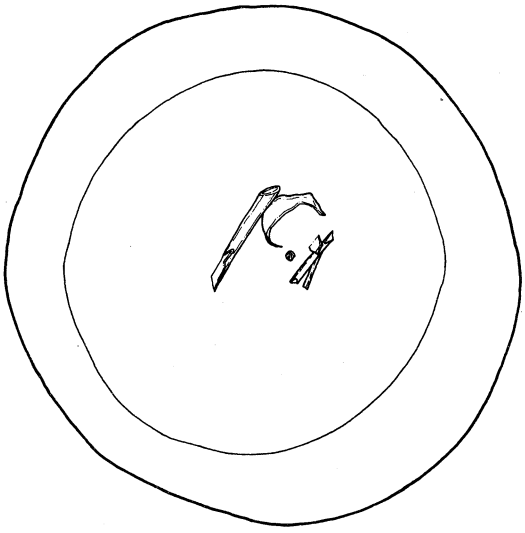
塚は直径３ｍの円形をなし、高さは70㎝である。塚内には、凝灰岩質の切り石片が集められたような状態で検出された。塚の直下には、円形のプランをもつ墓２基があり、それぞれ１体の人骨が埋葬されていた。また、寛永通宝７枚と角釘数本が出土したことと墓穴が重なっていないことから、埋葬形態・埋葬時期とも近接した様相が窺える。東側を１号墓、西側を２号墓とした。

1号墓　検出面の直径1.4ｍ、床面の直径1ｍの円形をなし、深さは1.34mである。床面に人骨・古銭・鉄釘が残っていた。

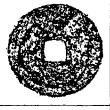
人骨は腐食が著しいが、頭蓋骨・腕骨・大腿骨・歯が残っている。頭蓋骨の特徴や歯の消耗具合いから30代半ば～40代にかけての男性のものであるという。詳細は44ページに報告している。

古銭は7枚あり、7枚とも重なった状態であった。7枚とも寛永通宝である。116と120は密着して不明であるが、他の裏面はすべて無文である。119と120が「寶」のハネの部分が「ス」になっており、古寛永である。残りは「ハ」の字になっており、新寛永である。

鉄釘は6本あり、すべて断面形は長方形をなす。



第41図　鎌石遺跡Ｅ地点１号墓出土状況

	116	117	118	119	120	121	122
拓　影（表　面）							
拓　影（裏　面）							
長さ（cm）	2.53	2.50	2.49	2.48	2.44	2.44	2.46
重さ（g）	(6.75)	3.76	2.69	3.56	3.07	(6.75)	2.64

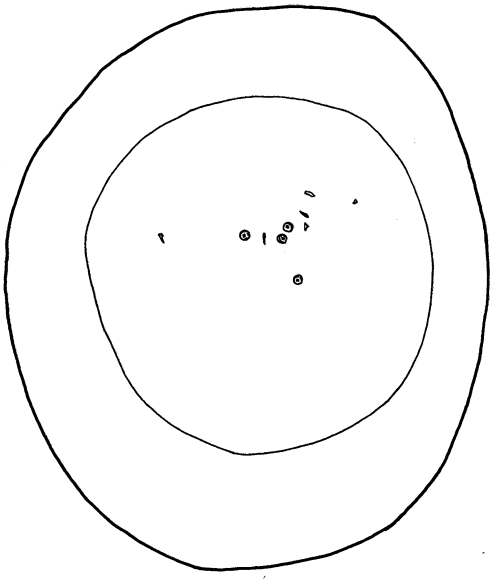
第42図　出土遺物（13）Ｅ地点

2号墓　検出面の径1.5m×1.3m、床面の直径0.9mのやや楕円形をなし、深さは1.2mである。墓穴の形状・規模ともに1号墓と比較して大きな差はみられない。床面に人骨・古銭・鉄釘が残っていた。

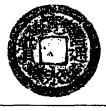
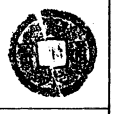
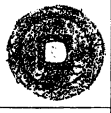
人骨は腐食が著しく、歯しか残っていなかった。性別ははっきりしないが、歯の消耗具合いから1号人骨よりは年齢を重ねていたことが解った。詳細については、次ページに報告している。

古銭は7枚あり、3枚・2枚・1枚・1枚という状態で出土した。7枚とも寛永通宝であり、裏面は無文である。123・125・126・127が「寶」のハネの部分が「ス」になっており、古寛永である。残りは「ハ」の字になっており、新寛永である。

鉄釘は5本あり、すべて断面形は長方形をなす。



第43図　鎌石遺跡E地点2号墓出土状況

	123	124	125	126	127	128	129
拓　影（表　面）							
拓　影（裏　面）							
長さ（cm）	2.44	2.52	2.53	2.58	2.42	2.48	2.33
重さ（g）	4.02	3.38	2.86	2.85	3.24	2.26	1.75

第44図　出土遺物（14）E地点

志布志町鎌石遺跡出土人骨について

鎌石遺跡の１号墓および２号墓にはそれぞれ成人１個体が埋葬されていたと考えられる。いずれも保存状態が悪く、小量の骨片とほぼ全顎の歯が遺存していた１号墓の人骨についてはわずかにその形質を窺い知ることができたが、２号墓には３本の遊離歯が遺存していただけであった。そのため両墓とも埋葬姿勢などは明らかにし得なかったが簡略に所見をまとめると次の通りとなる。

＜１号墓＞

主な遺存部位は脳頭蓋の後半部、前頭骨片、下顎骨、上下顎の29歯、左側前腕骨骨幹、左右側大腿骨骨幹および椎骨小片などである。いずれも骨表面の腐食が著しく、通常の人類学的計測を行える部位はほとんどなかった。

ａ、頭蓋および歯

外後頭隆起がやや突出し（Brocaの３度）、軽度の後頭隆起も認められる。乳様突起は先端部を欠失しているが、基部の幅は広い。前頭骨は右側の眼窩上縁部だけが遺存しており、眉上弓内側半の突出が強い。非計測的小異変としては、右側にアステリオン小骨が存在する。遺存する縫合のうち、ラムダ縫合の内板上半部に閉鎖が認められる。歯列について見ると、上顎骨が56部の歯槽突起を除いて欠失しており、比較的保存の良かった下顎骨も歯槽部の破損が大きいため、29本の遺存歯はほとんど遊離状態で検出された。歯式で表すと次の通りである。

○７６５４３２１	１２３４５６７○
８○６５４３２１	１２３４５６７８

（○：不明）

左側中切歯の舌側面に斜切痕が見られる。う蝕やエナメル質減形成などの病的所見は認められない。咬耗は8がMartinの１度であるほかは、大部分が２～３度である。

ｂ、体肢骨

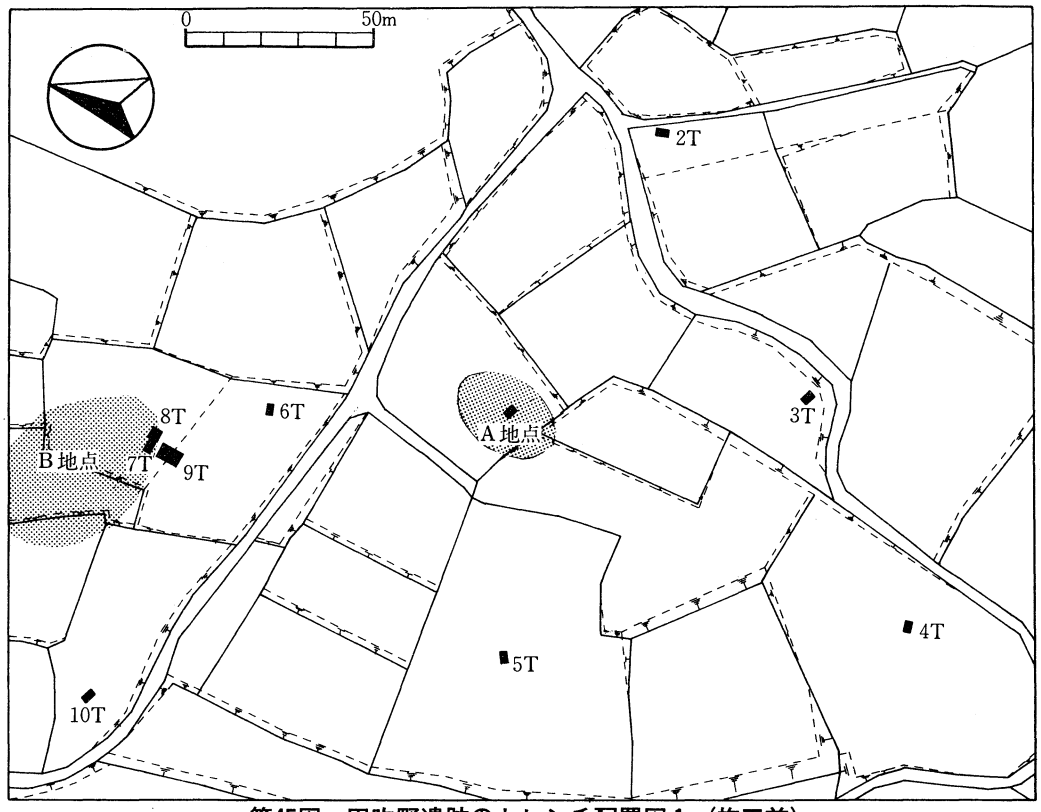
左側の橈・尺骨骨幹片（約15cm）と左右側大腿骨骨幹片（右側約35cm、左側約25cm）が遺存するが、表面の剝離と腐食によって周径などの正確な計測は不能である。前腕骨では骨間縁が比較的良く発達している。参考までに左側大腿骨の中央付近で断面示数を概算してみると、少なくとも105を超える値を示していたものとみられる。

ｃ、性・年齢

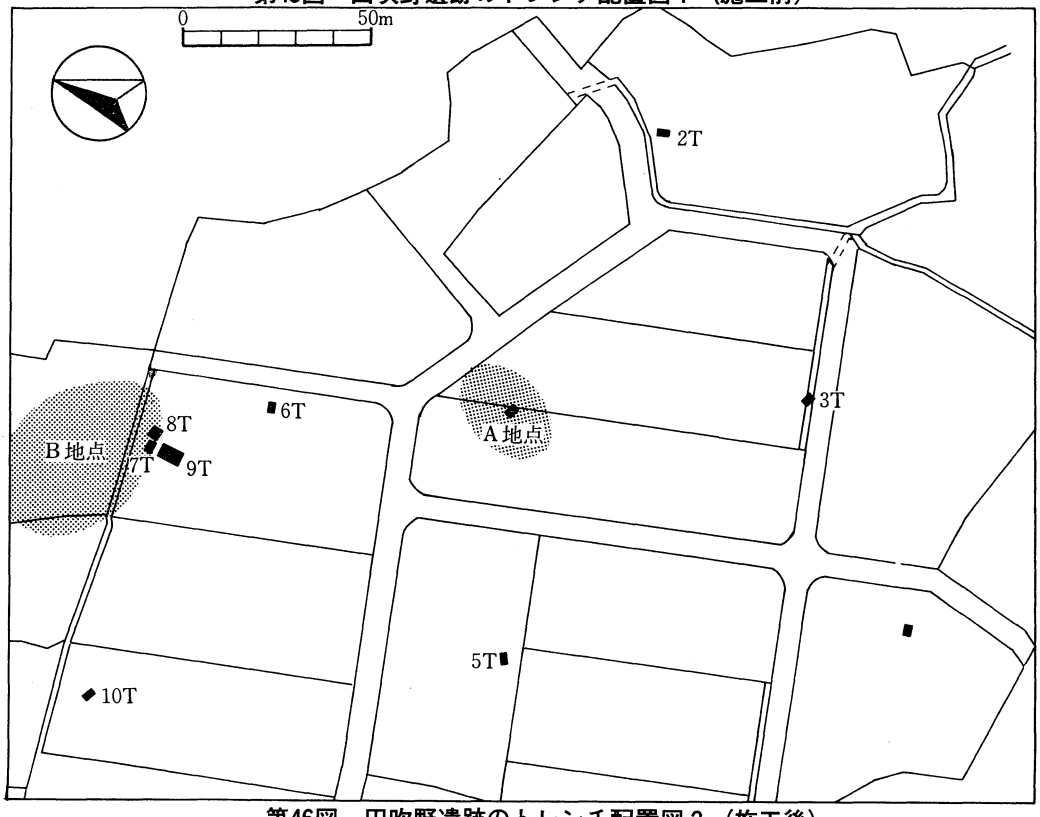
欠損部位が多いため確度の高い判定はできないが、性別は脳頭蓋の形状や体肢骨の大きさ・頑丈さから男性と、年齢は歯の咬耗や縫合の閉鎖状態から壮年後半期と推定される。

＜２号墓＞

発掘されたのは３本の歯だけで、１号墓と同様すべて遊離状態であった。いずれも比較的咬耗が進行しており、Martinの２～３度である。このため歯冠部から歯種が鑑別できたのは小臼歯１歯だけであり、それも上下左右は不明である。残る２歯はいずれも歯根が著しく長いことから、上下は不明であるものの犬歯であろうと推察された。咬耗の度合は１号墓の個体より進行しており、２号墓の個体の方が年齢の高い可能性がある。



第45図　田吹野遺跡のトレンチ配置図１（施工前）



第46図　田吹野遺跡のトレンチ配置図２（施工後）

第 3 章　田吹野遺跡の調査

第1節　調査の概要

確認調査は2m×3mを基本としたトレンチを、各々の畑に設定し、遺構・遺物の検出及び土層の観察を行った。遺物が検出されたトレンチ周辺、または地形からみて遺跡が存在する可能性のある地点については、さらにトレンチの数を増やし、遺跡の範囲について確認を行った。トレンチの配置は、第45図及び第46図に示し、各トレンチの状況については表6に示した。

工事対象地域8haのうち、遺構・遺物が確認された場所は2地点であった。それぞれ確認された順にA地点・B地点とした。各地点は同一小字名であることからA地点・B地点をまとめて田吹野遺跡と呼ぶことにした。

トレンチによる「点」の調査からトレンチ間を結ぶ「線」の調査を行い、遺物が存在する範囲を確認した後、遺跡の取り扱いについて大隅耕地事務所・町耕地課・県文化課・町教育委員会で協議を行った。その結果、A地点・B地点については土盛りにより遺跡を保護することとした。

A地点では、縄文時代早期の遺物を確認し、B地点ではアカホヤ層と御池ボラ層に比定される層に挟まれて土器が出土した。この火山灰層の間から遺物が出土した例は、宮崎県でも2例しかなく、鹿児島県では初めてである。遺物点数は、A地点14点、B地点42点であった。

第2節　土　層

Ⅰ　層：耕作土。

Ⅱ　層：黒褐色軟質土。粒子は揃っている。

Ⅲa層：暗黄褐色軟質土。時間が経過すると次第に黒く変色する。縄文時代晩期の遺物を包含する。最下部は粒子が大きく、これまでの周辺遺跡の例では、御池ボラ層に比定されている。

Ⅲb層：黄褐色土。Ⅲc層の腐食土である。黄白色の軽石をわずかに含む。この軽石は池田軽石と考えられる。

Ⅲc層：橙褐色軽石。およそ6千3百年前のアカホヤ層に比定される。

Ⅳa層：茶褐色土。やや灰色に近い部分が斑状に含まれる。縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅳb層：Ⅳa層からⅥ層への漸移層である。

Ⅴ　層：白黄褐色粘質土。およそ1万1千年前の薩摩層に比定される。

Ⅵ　層：黒褐色土。しまりがあって、硬い。層の上部にⅤ層の薩摩層を挟む。Ⅴ層の上下は区別できないが、Ⅴ層の直下辺りが最も濃い色をしている。

Ⅶ　層：白黄色をしたシルト質の層で、やや粘質を帯びる。緻密にしまっているが、軟らかい。

Ⅷ　層：黄白色シラス。粒子はⅦ層よりも細かい。黄色味が強く、ブロック状になった部分も見られる。およそ2万2千年前の入戸火砕流に比定される。

第６表　田吹野遺跡、牧野地区各トレンチの状況（調査面積111㎡）

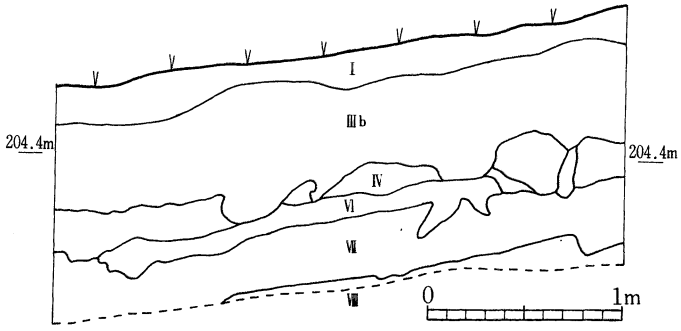
番号	調査面積	遺物包含層	遺構の有無	表土直下の土層	遺物包含層までの深さ	出土遺物その他
1	6㎡	Ⅳａ層	無	Ⅲａ層	－ 80cm	縄文早期土器
2	6㎡	無	無	Ⅲｂ層	―――	
3	6㎡	無	無	Ⅱ　層	―――	石鏃（表土）
4	6㎡	Ⅳ　層	無	Ⅲａ層	－ 80cm	石片
5	6㎡	無	無	Ⅲａ層	―――	
6	6㎡	Ⅲｂ層	無	Ⅲａ層	－ 60cm	縄文早期土器
7	6㎡	Ⅲｂ層	無	Ⅱ　層	－ 90cm	縄文早前期土器
8	9㎡	Ⅲｂ層	無	Ⅱ　層	－ 80cm	縄文前期土器
9	24㎡	無	無	Ⅲ　層	―――	
10	6㎡	無	無	Ⅲｂ層	―――	
1	6㎡	無	無	Ⅲｂ層	―――	
2	6㎡	無	無	Ⅵ　層	―――	
3	6㎡	無	無	Ⅲａ層	―――	
4	6㎡	無	無	Ⅳ　層	―――	
5	6㎡	無	無	Ⅲａ層	―――	

第３節　各トレンチの調査

第２トレンチ

２トレンチはこの事業区域最東端にあたり、二本松集落への町道からこの台地への分岐道路が台地内に入り、左右に分かれる三叉路の南約30mの標高約200ｍの箇所に２×３ｍで設定した。

層位はⅡ・Ⅴ層を除きⅧ層まで確認したが遺物は出土していない。



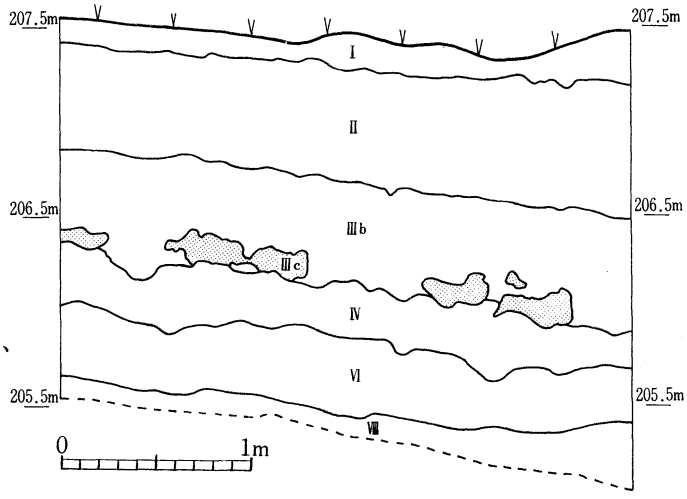
第47図　田吹野遺跡第２トレンチ断面図

第３トレンチ

３トレンチは２トレンチの南西約80mの標高約207.5ｍの箇所に２×３ｍで設定した。

層位はⅤ・Ⅶ層を除いてⅧ層まで確認できた。傾斜畑の末端の為か台地尾根部の直下でありながら、Ⅱ層の黒褐色軟質土が厚く堆積している。

147の石鏃が耕作土層より出土した。黒耀石製で、重さ0.2gである。



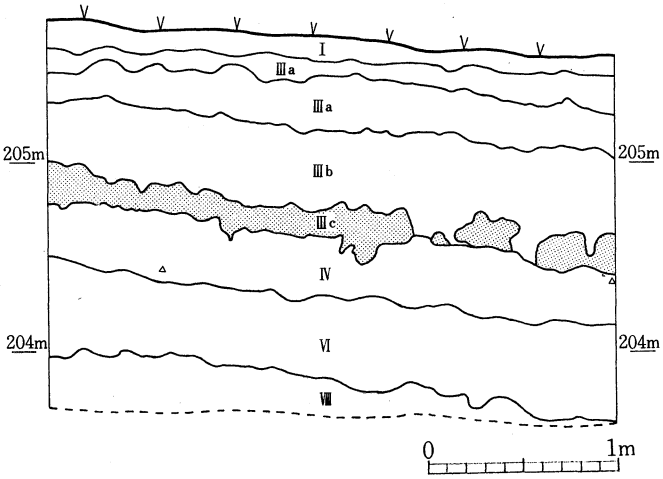
第48図　田吹野遺跡第３トレンチ断面図

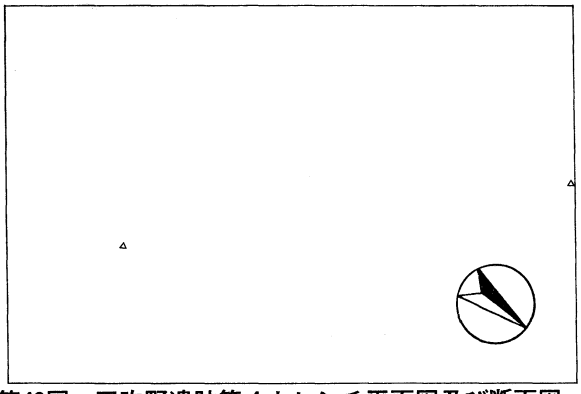
第4トレンチ

4トレンチは3トレンチの南西約70mの標高約205.6mの箇所に2×3mで設定した。

層位はⅡ・Ⅴ・Ⅶ層を除いてⅧ層まで確認できたが、Ⅲ層はa”ａｂｃの四層に分けられる。このa”層は黄茶褐色で御池火山灰の腐食した土壌と思われ、乾燥すると黒っぽく見えるものである。これに比べa層は黄灰色の1～3mm程度の軽石粒がブロック状に密集した土層である。各層水平に厚く安定堆積をしているのは、この地点が尾根筋でありながらやや幅の広い鞍部にあたるためであろう。

遺物はⅣ層中よりチャート質の石片が2点出土している。又この層は炭化粒も多かった。





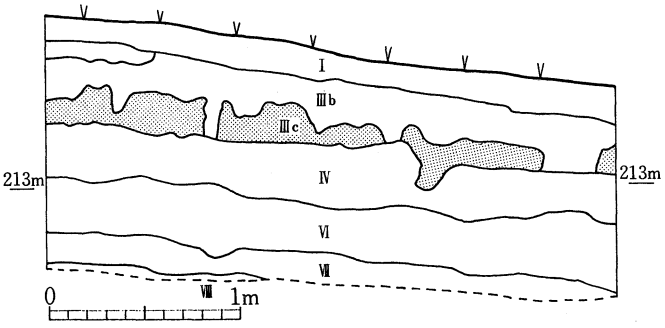
第49図　田吹野遺跡第4トレンチ平面図及び断面図

第5トレンチ

5トレンチは2トレンチの西約150mの標高約213.7mの箇所に2×3mで設定した。

層位はⅡ・Ⅴ層を除いてⅧ層まで確認した。この地点は尾根筋西側の傾斜面畑のほぼ中心に位置するため、各層の堆積は厚くなく地表面より約1.2mの深さでシラス層を検出している。

遺物の出土は見られなかった。



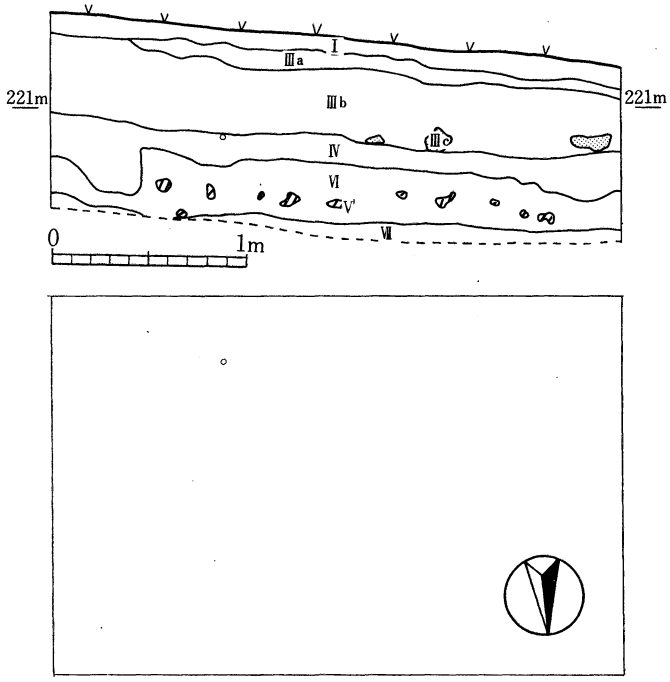
第50図　田吹野遺跡第5トレンチ断面図

第6トレンチ

6トレンチは2トレンチの北西約130m、5トレンチの北東約90mの台地尾根部頂上付近の標高約221.4mの地点に2×3mで設定した。

層位はⅡ層を除いてⅦ層まで確認できたが、Ⅶ層はⅧ層ヌレシラス混じりの土壌にも看えた。又このトレンチではⅢc層アカホヤ層とともにⅤ層サツマ層がブロック状に堆積している。

出土遺物はⅢ層アカホヤ層直下付近で貝殻腹縁の刺突をもつ微小な土器1点が出土した。

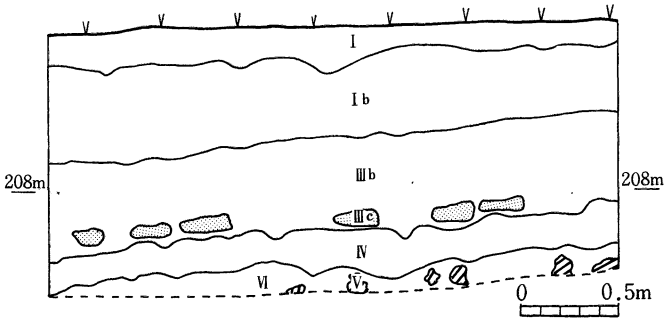


第51図　田吹野遺跡第6トレンチ平面図及び断面図

第10トレンチ

10トレンチは6トレンチの西北西約90mの標高約208.8mの地点に2×3mで設定した。

層位はⅡ層を除いてⅥ層まで確認された。またこの地点は傾斜畑の下端部付近にあるためか、Ⅱ層が削平を受けているものの表土下にⅠb層が厚く堆積している。これは傾斜畑を拡げるために高位置から大量に移動された旧耕作土壌と思われる。



第52図　田吹野遺跡第10トレンチ断面図

遺物は、この地点が二つの時代の遺物包含層を有するB地点を先端部とする浅い谷状の地形を取り囲む様な微高地であることから、期待をもって設定したトレンチであったが皆無であった。

第4節　A地点の調査

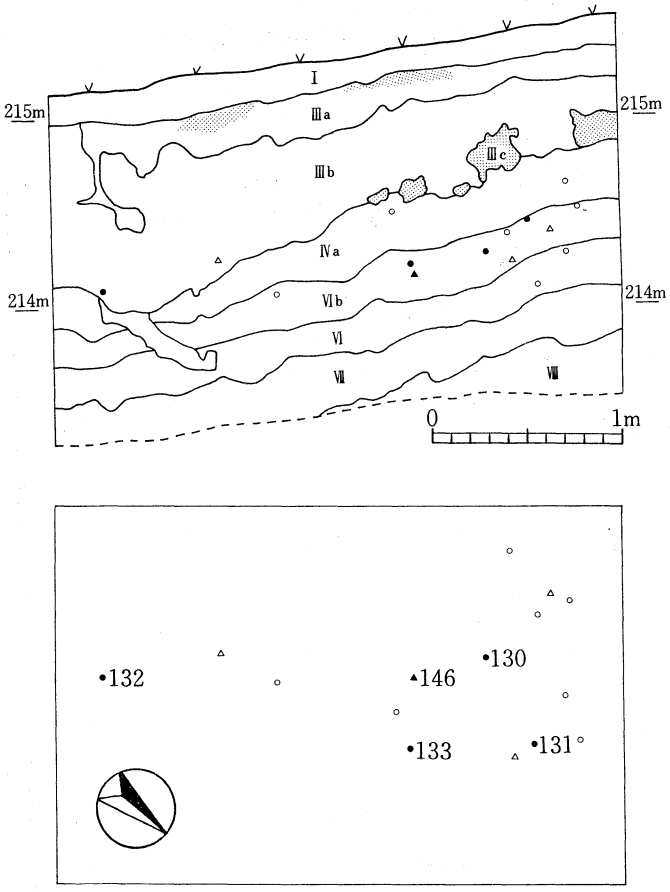
東側へ落ちる谷の傾斜面の頂上付近に位置し、現地表面は約15%の傾斜をもつ。2×3mのトレンチを設定した結果、アカホヤ直下のⅣa層に遺物が包含されていることが確認できた。

遺物は土器11点、石3点が出土し、その内で図示できるすべてのもの5点について掲載した。

130は器壁が薄く、貝殻腹縁による押し引き文を全面に施す。内面は縦方向のケズリである。

131の器面には貝殻腹縁を刺突する。両側を沈線で接着させた楔形のはりつけ文をもつ。132と133は貝殻腹縁を縦位に刺突する。器面の調整に貝殻条痕は行われず、ナデ調整のみである。器壁はやや厚く内面は縦方向のケズリである。

146はチャート製の石鏃である。先端部を鋭く尖らせ、両側に凹をもつため三菱形をしている。長さ1.13cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.27gを側る。縄文時代早期に該当する。



第53図　田吹野遺跡Ａ地点平面図及び断面図

第５節　Ｂ地点の調査

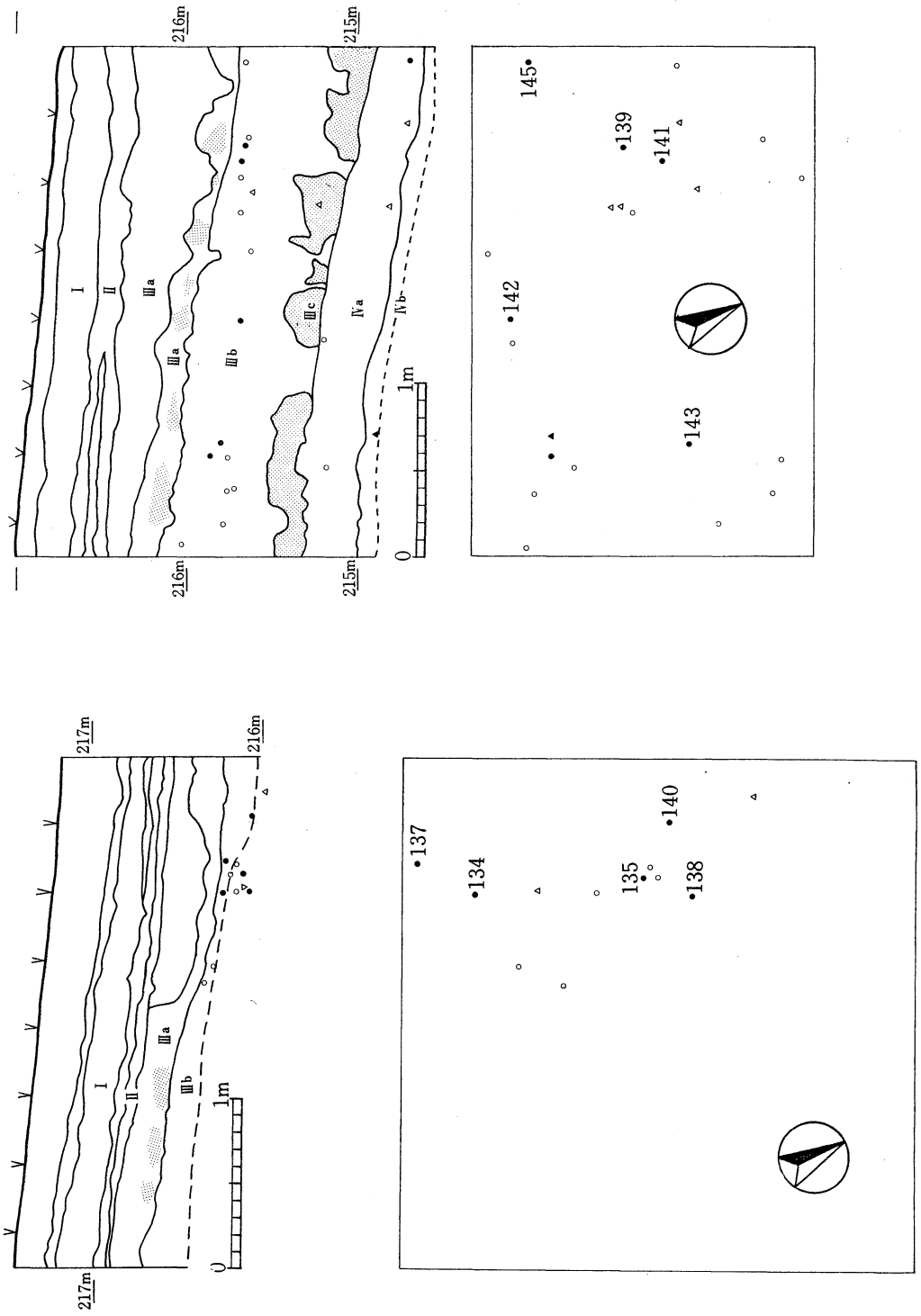
西側へ落ちる谷の傾斜面の頂上付近に位置し急な傾斜をもつ。合計39m²のトレンチを設定した結果、アカホヤ直下のⅣａ層に遺物が包含されていることが確認できた。

遺物は土器35点、石７点が出土し、その内で図示できるすべてのもの15点について掲載した。

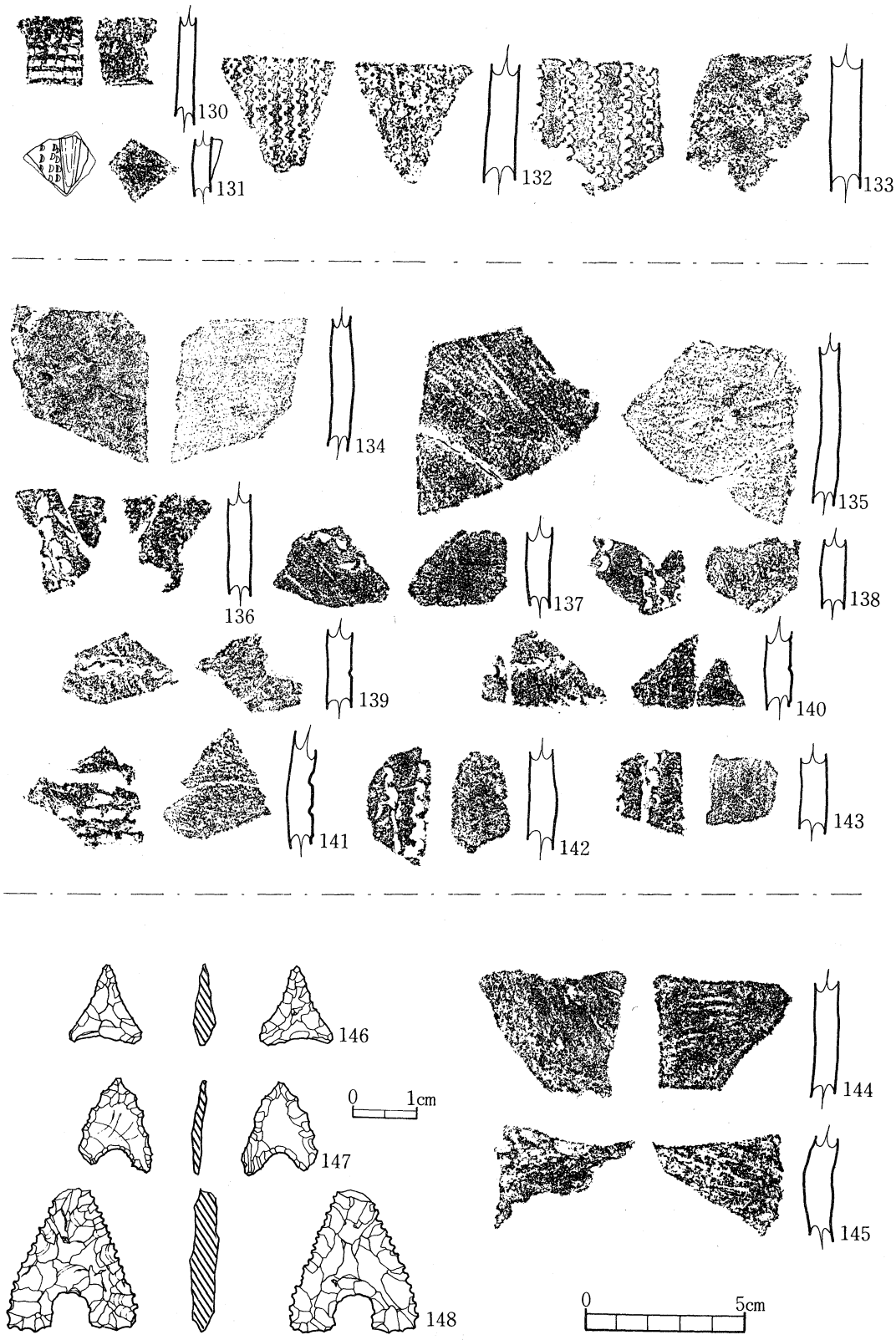
Ⅲｂ層の土器　134と135は無文の土器である。この他に27点の同様な土器が出土している。外面は明褐色を呈し、特徴のないナデによる整形のみである。内面は茶褐色を呈し、横方向のケズリによる調整を行う。136～143の外面は黒褐色を呈し、器面はナデによる整形の後、貝殻腹縁をやや斜めにして刺突を行う。小破片のため、縦位に施すのか横位に施すのかは判断しかねる。140のように煤が付着しているものもみられる。内面は茶褐色を呈し、横方向のナデ調整を行う。両者とも胴部の小破片であり、器形の特徴をつかめないのが残念である。縄文時代前期に該当するものと考える。

Ⅳ層の土器　144は内外面とも明茶褐色を呈し、特徴のないナデ調整である。145はくびれの部分と考えられ、外面はナデ、内面は横方向のケズリによる調整である。内外面とも赤褐色を呈し、胎土には金雲母を含む。型式名ははっきりしないが、縄文時代早期の土器である。

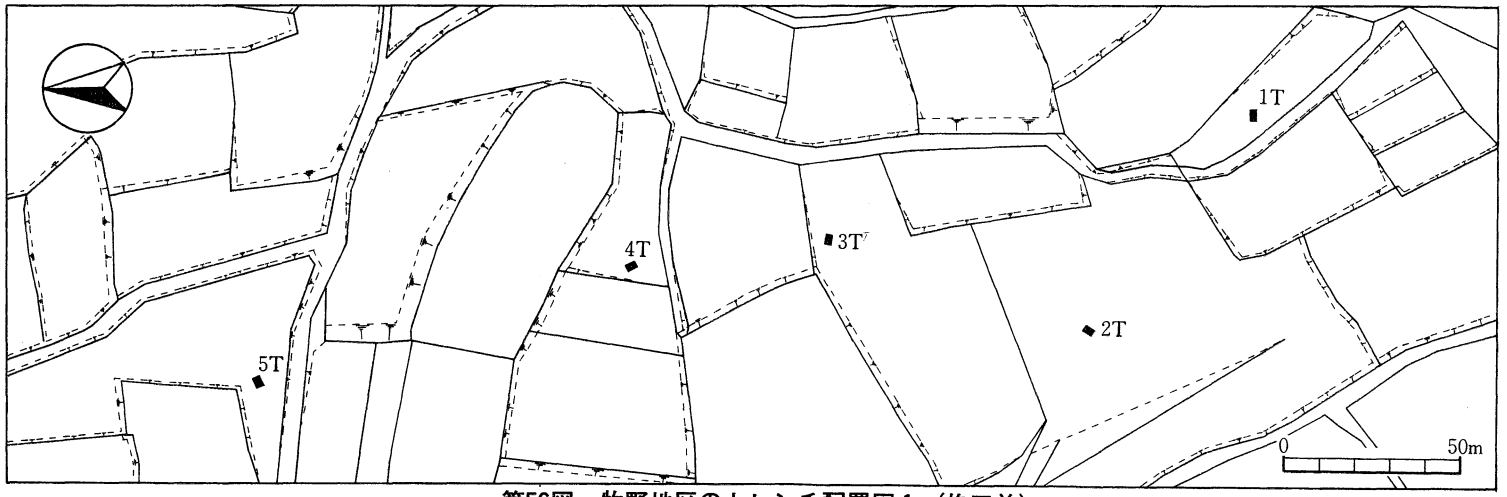
Ⅳ層の石鏃　158は基部を平らに取り、半円形の深い抉りをもつ。先端部は欠けているが、両側を鋸歯状に細かく剝離することに特徴がある。現存する長さ2.18cm、幅1.98、厚さ0.35cm、重さ1.63gを側る。



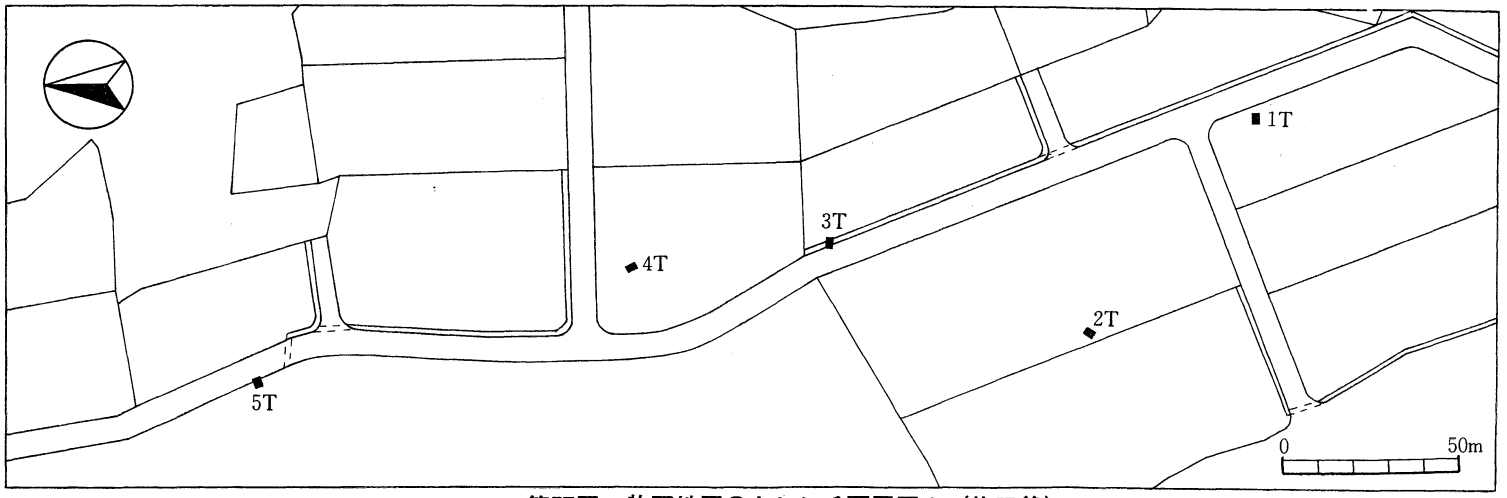
第54図　田吹野遺跡Ｂ地点２（左８トレンチ・右７トレンチ）平面図及び断面図



第55図　出土遺物（15）　田吹野遺跡



第56図　牧野地区のトレンチ配置図１（施工前）



第57図　牧野地区のトレンチ配置図２（施工後）

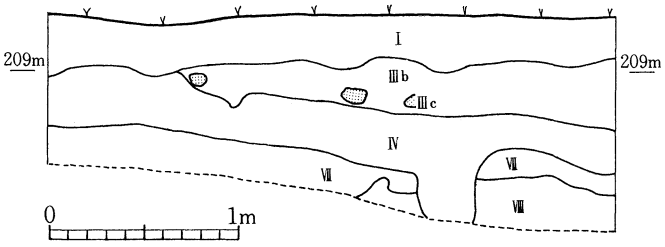
第 5 章　牧野地区の調査

第２章第４節で先述した通りこの地区は、牧野遺跡の立地する台地の南に連なる台地であるが事前の分布調査区域から洩れていた地区である。その為今回牧野遺跡の隣接地域として確認調査を実施した。事業区域は台地尾根部西側の狭隘な斜面一体で、個人による小規模な畑地造成が進んでおり、調査は一部に残る自然勾配地を選んで実施した。

第１トレンチ

１トレンチは県道から牧野台地へ分岐する舗装道路の頂上部分三叉路から、北西に約50ｍの標高約209.3ｍの地点に２×３ｍで設定した。

層位は尾根部のためⅡ～Ⅳ層にかけて削平の跡が看られる。



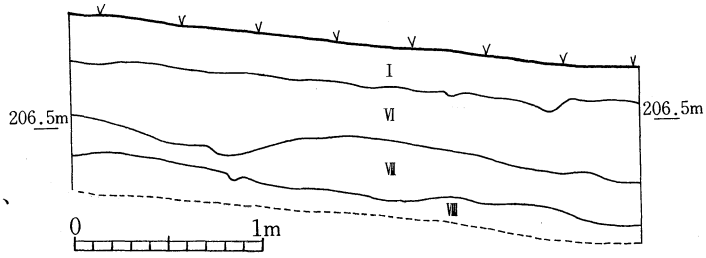
第58図　牧野地区第１トレンチ断面図

第２トレンチ

２トレンチは１トレンチの北西約80ｍの標高約207ｍの地点に２×３ｍで設定した。

層位はⅧ層まで確認したが、傾斜面にありながら広域な畑であり、Ⅱ～Ⅴ層まで削平を受けている。

遺物の出土はない。



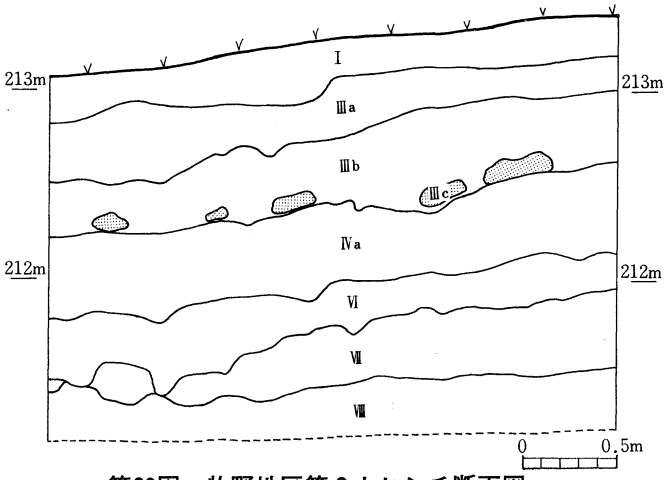
第59図　牧野地区第２トレンチ断面図

第３トレンチ

３トレンチは１トレンチの北北西約120ｍの標高約213.3ｍの地点に２×３ｍで設定した。

層位はⅡ・Ⅴ層を除きⅧ層まで確認された。

遺物の出土はみられなかった



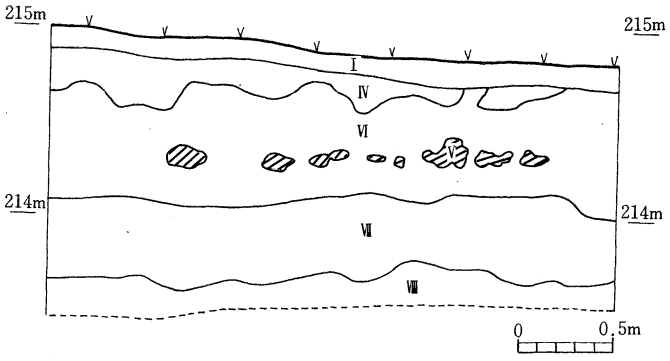
第60図　牧野地区第３トレンチ断面図

第4トレンチ

4トレンチは3トレンチの北約120mの標高約215mの地点に2×3mで設定した。

層位は、Ⅱ層から一部Ⅵ層にかけて削平を受けていたがⅧ層まで確認され、この地点ではブロック状ではあるもののⅤ層も明瞭に確認することができる。

遺物の出土はみられなかった。



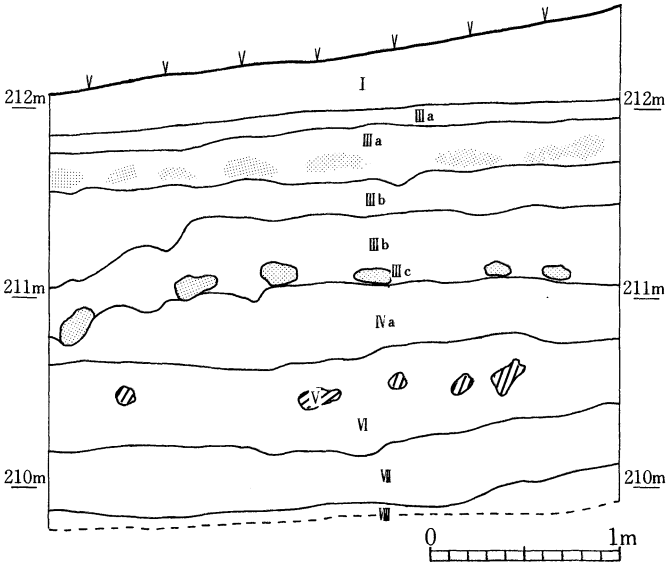
第61図　牧野地区第4トレンチ断面図

第5トレンチ

5トレンチは4トレンチの北北西約110mの標高約212.2mの地点に2×3mで設定した。

この地点は牧野集落からこの台地へ上る農道の脇にあたり、また4トレンチとの間に西側より台地に入りこむ浅い谷を挟んだ北側の微高地でもある。

層位はⅡ層が削平を受けているものの、Ⅷ層までの各層が水平的な安定堆積をみせ、最も模式的な土層断面を出現している。又このトレンチの各土層は他のトレンチに比べ各層が全体に黒っぽい色調を見せているのが特徴的であった。



第62図　牧野地区第5トレンチ断面図

遺物はここでも出土せず、この牧野地区に設定した5箇所全てのトレンチから遺物の出土をみることはできなかった。又調査期間中の周辺の表面採取でも遺物は発見できなかった。しかしながらこの地区全域が遺跡の立地を不適とする条件はないと思われる。日程の制限もあり詳細な調査が行き届かなかったが、或いは小規模な包蔵地が残存している可能性もないとはいえず今後も巡視の必要がある地区と思われる。

第６章　考　察

縄文時代早期

遺構としては鎌石遺跡Ｃ地点から集石が出土している。遺物は出土していないが、11,000年前の薩摩層と6,300年前のアカホヤ層に挟まれているので縄文時代早期に比定できる。集石は縄文時代の調理施設と言われている。すなわち、石を熱した上に植物で包んだ肉類を置き、その上から土をかぶせて蒸焼きにするものである。新東晃一氏は集石使用実験の結果から、集石を２つに分類している。本遺跡でも同氏の方法を用いて計測した。１つは小石片及び軽量石片が多いパターンであり、もう一つが小石片及び軽量石片が少なく浮遊したパターンである。新東氏は、前者を被覆石に後者を炉石と考えている。鎌石遺跡Ｃ地点の集石は出土状態と計測値を考え合わすと、後者の炉石とする方が妥当である。

田吹野遺跡Ａ地点の土器は 130 は器面全体に貝殻腹縁による押し引き文を施し、吉田式土器の特徴を備えている。131～133の土器は、河口貞徳氏と新東晃一氏の間で意見の分かれる土器であり、未だ結論は出ていない。しかし、吉田式土器と前平式土器との両者に密接な関係があるということに異論はない。河口氏の設定する吉田式土器は「貝殻腹縁による押し引き文」をメルクマールとするものであり、前平式土器は「貝殻条痕の上に文様を描く二重施文」をメルクマールとする。132と133の土器は地文の調整がナデによるものであり、直接貝殻腹縁を刺突することから、このどちらにも該当しないことになる。

完成された楔・薄手の器壁で精巧な施文・器形の一致という面からみると、地文の施文方法に関係なく一つのグループとしてくくられる土器である。前平式・吉田式という名称に固守するあまり本質を見失うのであって、本田道輝氏が述べるように「独立一型式として認めるべきもの」とする方が混乱を少なくするものと考える。

個人的意見としては、楔の初源は河口氏が述べるように、土器面に貝殻などを使って連続押圧を施すときにできる粘土の盛り上がりに求めるのが妥当と考える。完成された楔の両わきに刺突文を施すのは、貝殻腹縁のルジメントであると考えられ、吉田式土器については河口氏の編年を支持したい。前平式土器については、層位的あるいはルジメントを用いて型式学的に証明し得る材料を持ち合わせていないので、ここでは意見を差し控えたい。

鎌石遺跡Ａ地点出土の倉園Ｂタイプの土器について新東晃一氏は「倉園Ｂ式土器」として一つの型式として独立させようとしている。しかし、倉園Ｂ遺跡出土土器の種類はいくつかあり、その細かな分析もされていない。また系統的な研究も分布範囲もはっきりしていない。このようなことを考えると将来はそうなるかも知れないが、現時点ではまだ独立型式とするには時期早々なのではなかろうか。

縄文時代前期

田吹野遺跡Ｂ地点である。御池ボラ層とアカホヤ層に挟まれて合計10点の土器が出土した。無文のものと有文のものの２種類がある。有文のものは貝殻腹縁を垂直に刺突したものである。

これまで名付けられた型式に該当するものはなく、今後の資料の増加を待ちたい。

御池ボラ層とアカホヤ層に挟まれた遺物の出土例は、これまで宮崎県に2例知られるのみで鹿児島県では初めてである。宮崎県高城町の城ケ尾遺跡例は曽畑式土器であることが判明している。また、宮崎県田能町天神遺跡では船元式土器の古いタイプが出土しているという。御池ボラの年代は、4,000年前ごろといわれている。松山町前谷遺跡からは縄文時代中期に位置づけられる春日式土器の住居跡の埋土に御池ボラの堆積がみられるという。しかし、これは1次堆積なのか2次堆積なのかはっきりされていない。財部町高塚A遺跡では、厚く堆積した御池ボラの上から縄文時代中期末に位置づけられる岩崎下層式土器が出土している。カーボン14年代測定法によって御池ボラの噴出年代を明らかにしたデータは現在のところ知られていない。船元式土器は中期前半に位置づけられており、高塚A遺跡とを考え合わすと、御池ボラの降下時期は中期前半～中期末の間にしぼられてきたことになる。田吹野遺跡B地点の土器は、細かな年代を知る手がかりに欠けるため、アカホヤ降下時期である6,300年前から中期末間におけるある一時期の土器であるとしか今のところ言えない。

火山灰と土器との関係をつかむというのは、①年代をはっきりおさえることができる。②火山灰は広域に積もるので遠距離にあっても遺跡の前後関係の比較が可能である。③火山灰が厚く積もるほど自然環境に与えた影響は大きいと考えられ、当然人間の生活にも大きな影響を被った。等当時の社会を復元する上で非常に重要な役割を果たすということができる。今後とも火山灰との関係がはっきりする遺跡を捜してゆく努力をしてゆきたい。

縄文時代晩期

鎌石遺跡D地点から精製浅鉢形土器・深鉢形土器・蓆目圧痕をもつ土器とともに各種の石器が出土した。現在鹿児島県での晩期土器の編年は御領式→上加世田式→入佐式→黒川式→刻目突帯文土器の流れが考えられている。本遺跡の土器は、器形の特徴と蓆目圧痕土器を伴うことから黒川式の時期に該当すると考える。

曽於郡での晩期遺跡の数は県内でも特出しており、1988年9月現在の県内晩期遺跡359遺跡の内、実に41.5%にあたる149遺跡が曽於郡内に所在している。また蓆目圧痕土器を含む組織文土器出土遺跡数は県内全域の32遺跡例に対し、曽於郡内出土は56%の18遺跡にのぼる。これらのことは曽於郡内の縄文時代後半の歴史を考える上でさけて通れないデータである。

平安時代

鎌石遺跡のB地点から出土した遺物はこの時期に該当するものである。須恵器・土師器の他、フイゴの羽口ではないかと思われるものが出土している。土師器には椀形土器、杯形土器、甕形土器、焼塩壺がある。時期を示す特徴を箇条書にあげると、

- 杯形土器の底部がヘラ切り離し方法によるものである。
- 杯形土器の底部付近を削る。
- 甕形土器が内面ヘラケズリである。
- 須恵器をわずかながら伴っている。

• 焼塩壺は「八世紀代に出現し、九世紀中頃になるとその姿を遺構上から消す。」と考えられている。

• 緑釉陶器や磁器類を全く伴っていない。

以上の特徴から鎌石遺跡B地点の年代は9世紀代～10世紀代に位置づけるのが妥当だと考える。遺跡の性格は遺構を伴っていないので明確にはし得ない。焼塩壺は一般的に郡衛や駅等の公的施設や寺院跡に関係するものと言われており、鹿児島県の薩摩半島側ではこれらの推定地でしか発見されていない。しかし、曽於郡では焼塩壺の出土例が多く、しかも今回発見された鎌石遺跡のように山間部に多いというのが特徴である。例えば末吉町井出ノ上遺跡は9世紀前半に位置づけられ、内黒土師器・内朱土師器・墨書土器等も出土している。立地も山間部の小谷頭ということで鎌石遺跡と似ている。薩摩国と大隅国での焼塩壺に対する認識の違いだったのかどうかは推定の域を出ないが、その性格の追求が今後の課題である。

江戸時代

鎌石遺跡E地点の墓は、伝承によると西南の役の戦死者が葬られているとのことであったが、発掘の結果およそ300年前のものであることが解った。塚は大木が枯れた後、周辺にあった墓石と共に築かれたものであると考えられる。人骨は腐食が著しく全体の体格や既往症については明かにできなかったが、性別と年齢が判断できたのは幸いだった。副葬品としては六道銭がある。

寛永通宝は、1626年（寛永3年）から鋳造されたもので、幕末に至るまで流通していた貨幣である。鋳造は全国におよそ50カ所ある銭座で行われ、鋳造地・鋳造時期によって種類が異なる。1号墓からは古寛永が2枚、2号墓からは古寛永が4枚出土しており、裏面に文様がみられないことから1700年の頃のものであるという。さらに、2号墓のほうが1号墓よりも10年ぐらい古いものであるということである。死者と共に埋葬する貨幣は六道銭と呼ばれ、通常6枚が一般的であるが、鹿児島県内では7枚埋葬する例が多いという。当時の人々の考え方を探る上で大変興味深い問題である。

鉄釘が出土したことから、棺桶に納められて土葬にされたことが解る。棺桶がどのような形状のものであったのかという問題も今後の課題としたい。

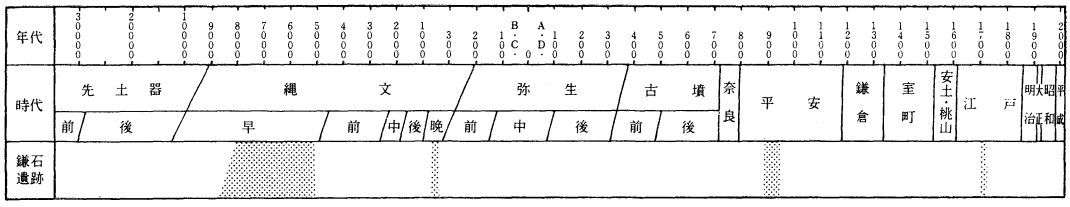
参考文献

鹿屋市教育委員会：『水の谷遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（5）　1986
別府大学考古学研究室：「古閑遺跡」『古保山・古閑・天城』熊本県文化財報告第47集　1980
横田賢次郎・森田勉：「太宰府出土の土師器に関する覚え書」
横田賢次郎：「太宰府出土の土師器に関する覚え書き（3）」
森田勉：「焼塩壺考」『九州歴史資料館開館十周年記念　太宰府古文化論叢　下巻』　1983
鹿児島県教育委員会：「小瀬戸遺跡」『小瀬戸遺跡・建馬場遺跡・松木田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（19）　1982.3

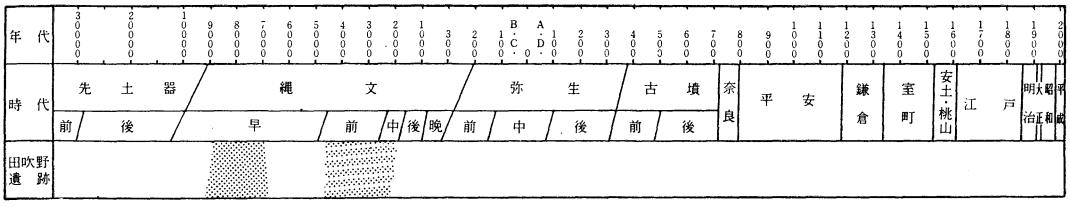
東郷町教育委員会：『五社遺跡』東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）　1986．3
鹿児島県教育委員会：「西ノ平遺跡」『成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）　1983．3　鹿児島県教育委員会

第７章　まとめ

1．鎌石遺跡Ａ地点・田吹野遺跡Ａ地点から縄文時代早期の遺物が出土した。
2．鎌石遺跡Ｃ地点で縄文時代早期に該当する集石遺構が１基発見された。
3．田吹野遺跡Ｂ地点ではアカホヤと御池ボラとの間から土器が出土した。これは鹿児島県内では初めての発見である。
4．鎌石遺跡Ｄ地点で縄文時代晩期の遺物が出土した。
5．鎌石遺跡Ｂ地点で平安時代前半の遺物が出土した。
6．鎌石遺跡Ｅ地点で江戸時代中ごろの墓２基が発見された。



第63図　鎌石遺跡のタイムスケール



第64図　田吹野遺跡のタイムスケール

あ　と　が　き

鎌石遺跡・田吹野遺跡の発掘調査報告書もようやく刊行にこぎつけた。

三地区にわたるかけはなれた台地での確認調査で、地主の方々はじめ各方面の方々に多大な御迷惑をかけたが、快く協力して頂き無事調査を終了することができた。

調査は、確認調査という遺跡保護の立場から充分な成果が得られた。

最後になったが、我々と一体となって働いて下さった発掘作業員・整理作業員の皆様に心から感謝申し上げる次第です。

特に、本町ではじめての試みであった地元で整理作業に従事された皆さんは、不安と戸惑いの連続であったことと推察するが、是非次回も協力をお願いしたい。

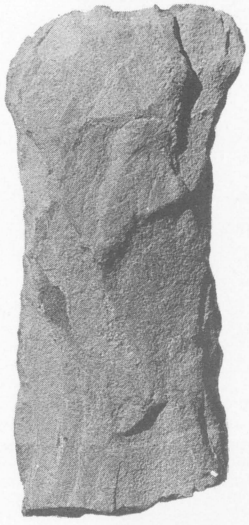
発掘作業員

春口峯次　山村又男　山村照男　森村和裕　持留正治　永吉ノリ　吉井ミヤ　上迫モミ
吉川弘子　春口フミエ　森村イチ子　小野ミエ子　片村光子　竹山サツ子　田之上鈴子
牧原愛子　山村ハルミ　牧之瀬セツ子　田中郁子　新堀ミヨ子　持留ミドリ　又木テル子
下渡エツ子　下山エル

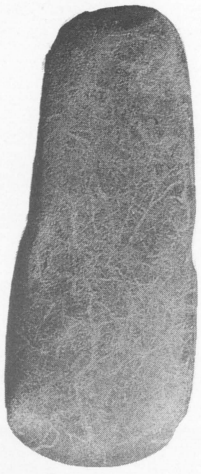
整理作業員

高倉晴美　四丸久美子　宮岡雪子　徳永美喜子　松元雅子　上杉みゆき　倉橋由美子
検崎女久美　竹山かおり　馬場優子

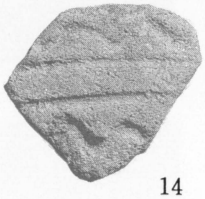
図　　版



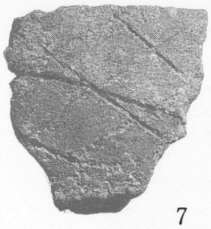
1



5



14

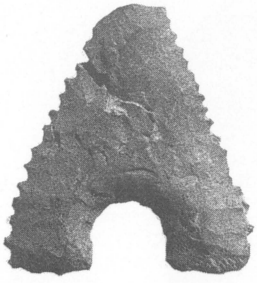


7

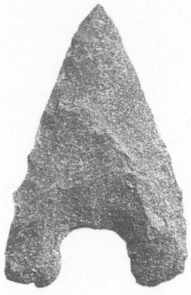
4

146

147



148

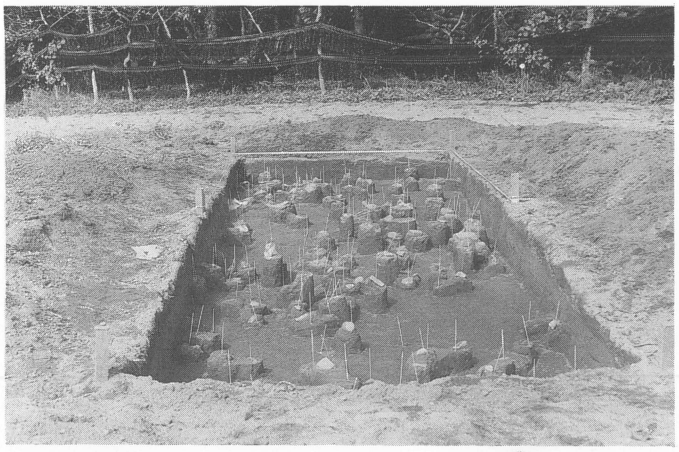


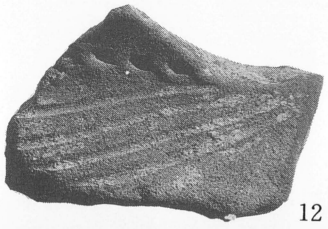
9

115

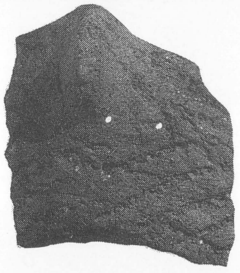
出　土　遺　物

図版 6

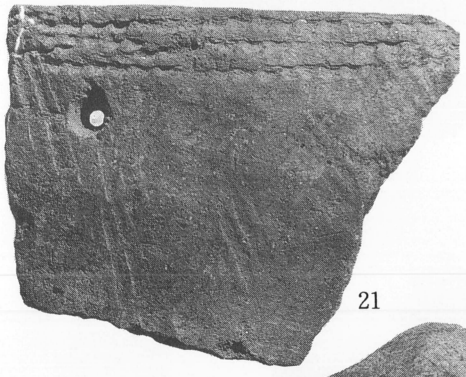




12



27

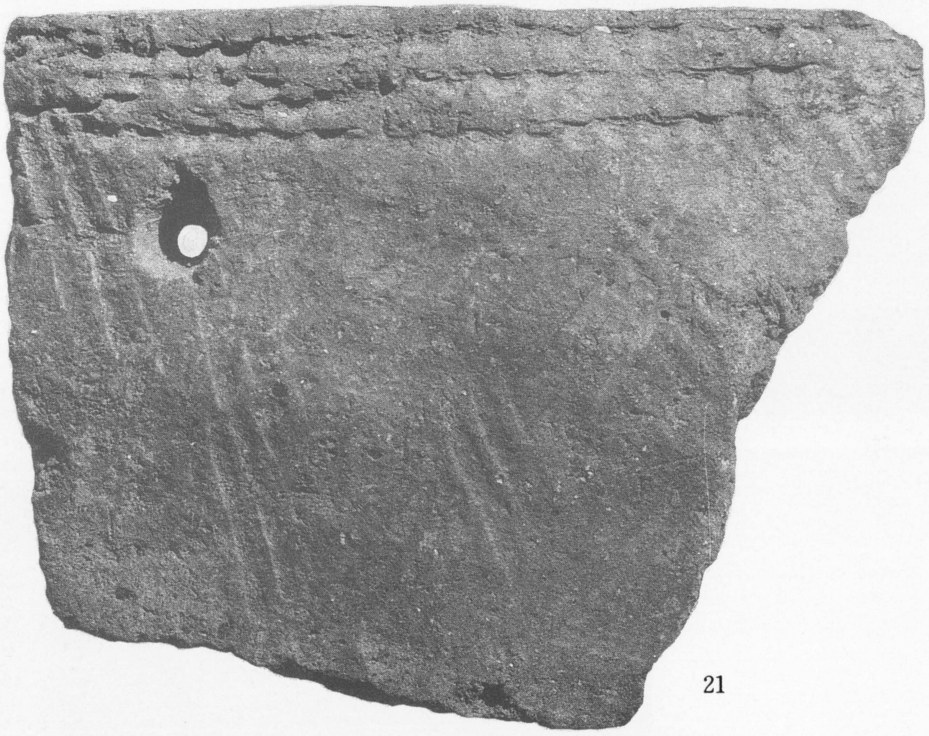


21

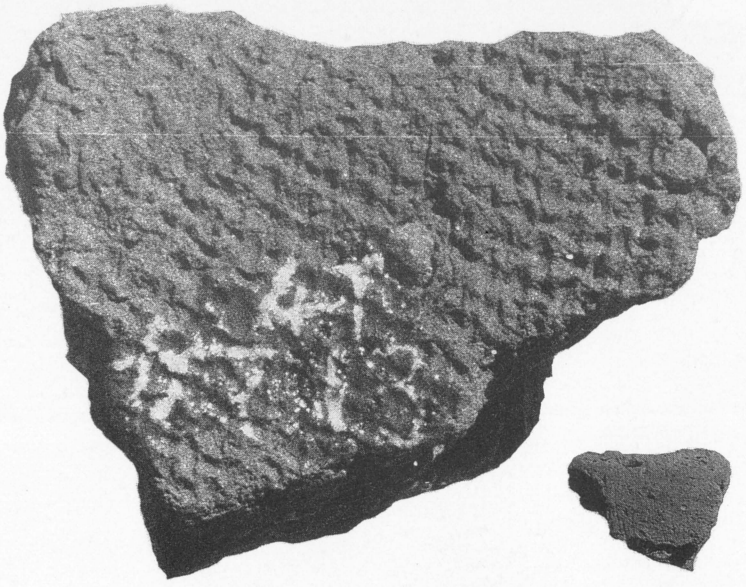
22

27

出　土　遺　物

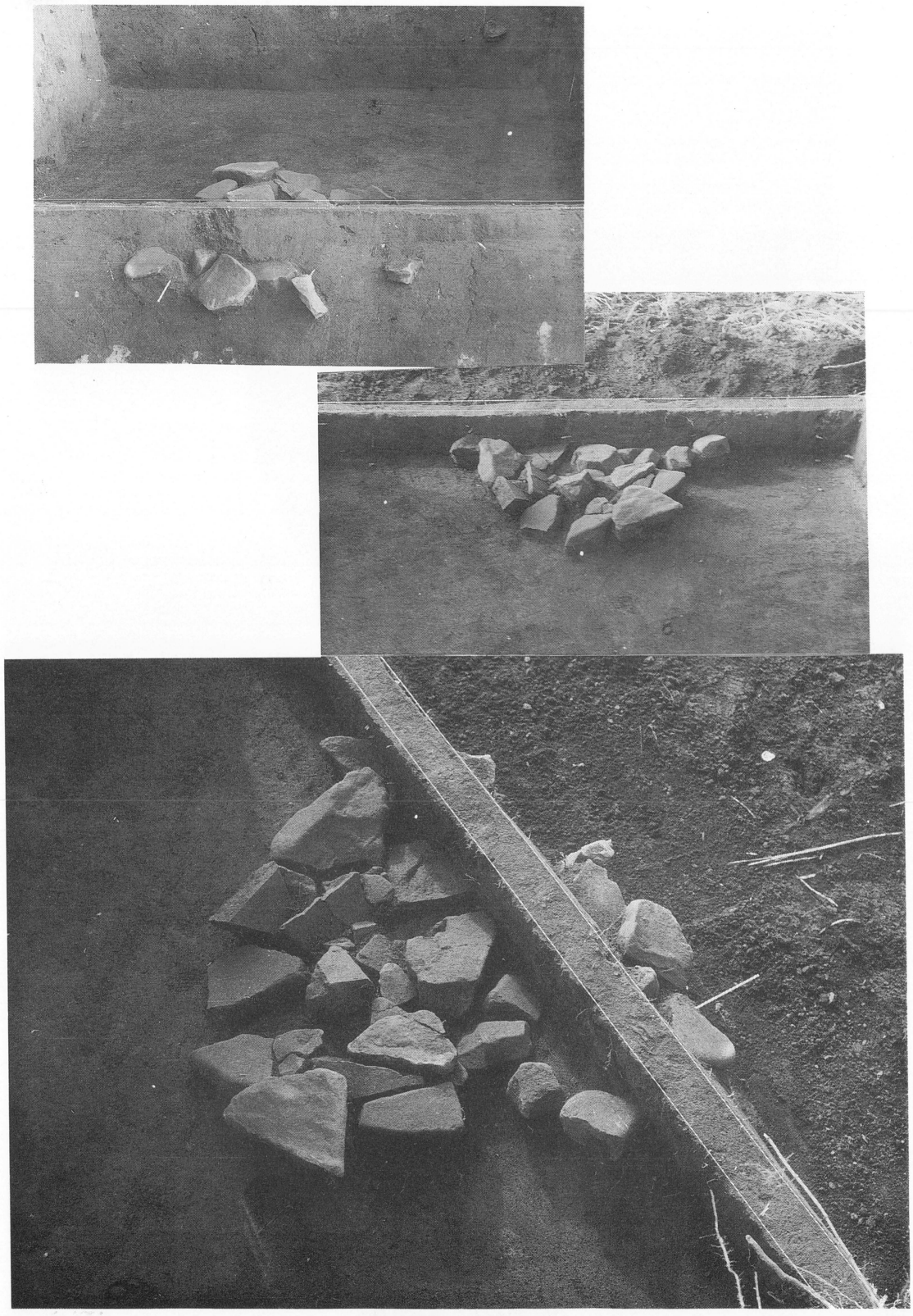


21

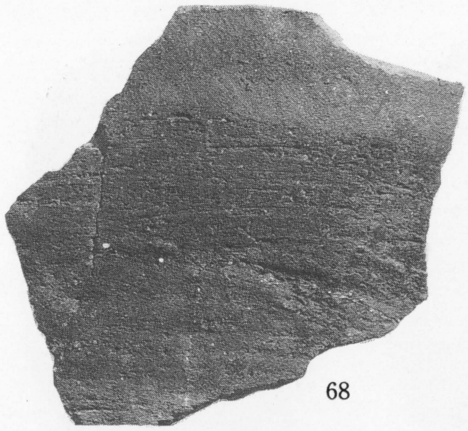


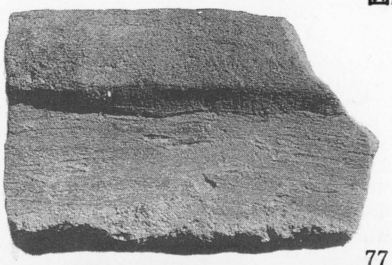
出　土　遺　物

図版 8

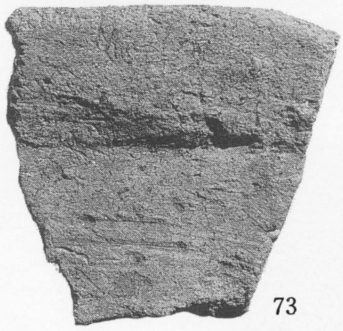


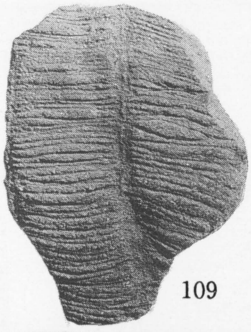
鎌石遺跡Ｃ地点集石


68

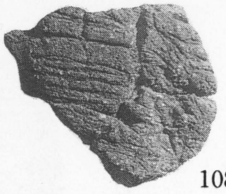

77

78


73


109

107

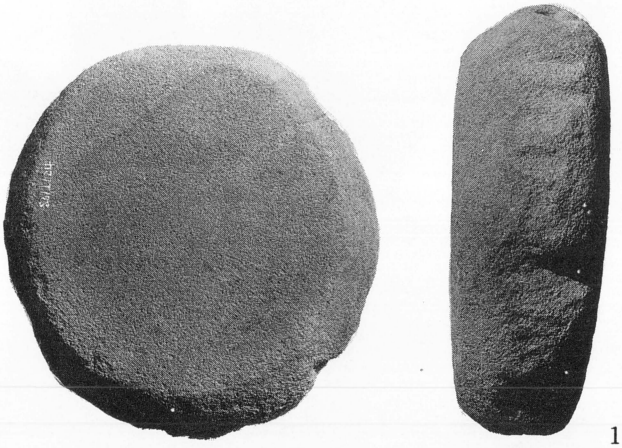

108

68

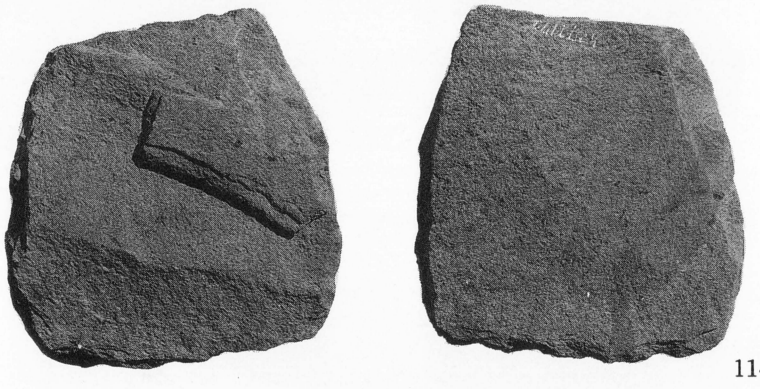
鎌石遺跡Ｄ地点出土遺物

図版10

111

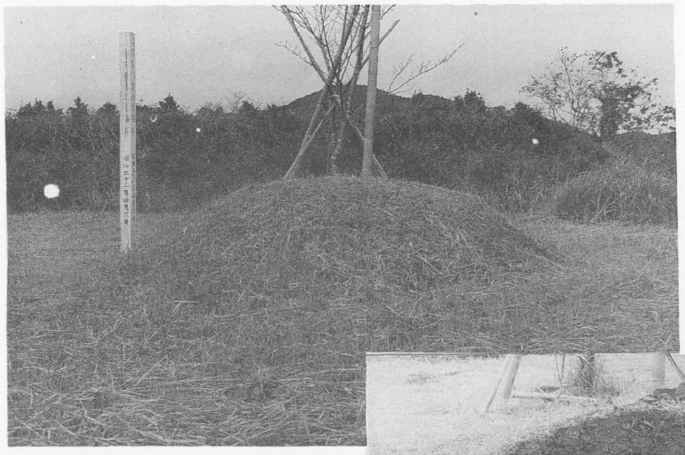


112



114

鎌石遺跡Ｄ地点出土遺物



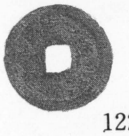
116

117

118

119

120


122

123

124

125

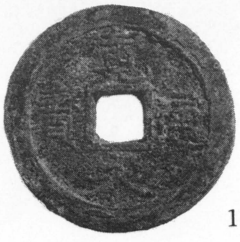
126

127

128

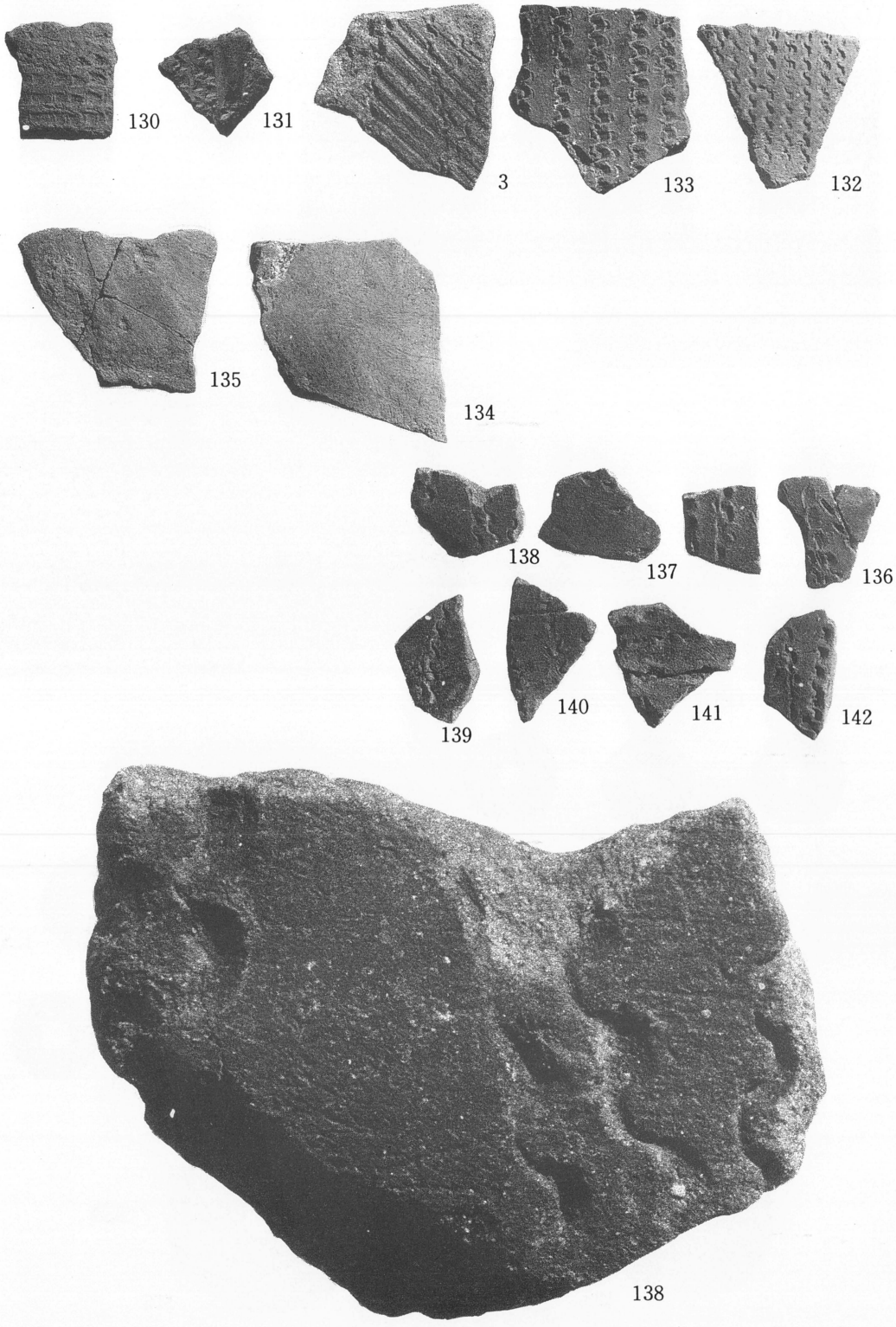
129

ス宝銭
123


ハ宝銭
116

鎌石遺跡Ｅ地点近世墓

図版12



出　土　遺　物

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(16)

鎌石遺跡・田吹野遺跡

発行日　平成２年３月
発　行　志布志町教育委員会（鹿児島県曽於郡志布志町志布志2542）
印刷所　中央印刷株式会社（鹿児島県鹿児島市春日町12－16）